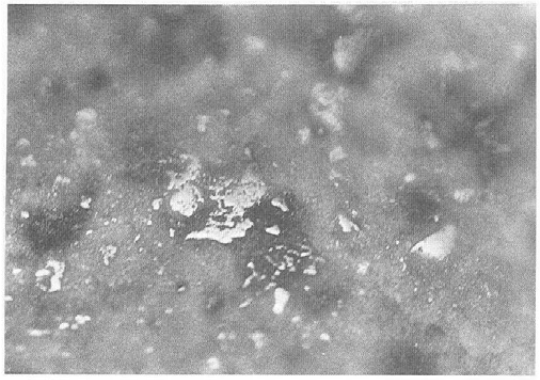


資料１　Ｂタイプ　1

資料１　Ｂタイプ　2

資料１　Ｂタイプ　3

資料１　Ｂタイプ　4

資料２　輝点程度の使用痕光沢　5

資料２　輝点程度の使用痕光沢　6

第585図　使用痕の顕微鏡写真

第２節　屋代遺跡群の石鏃について

株式会社アルカ　角張淳一

はじめに

屋代遺跡群23点の石鏃について、図化及び所見の作成作業を行った。

石鏃の観察事項は、剝離技術をその中心に据えている。石器は石を加工して製作されるのであるが、石の加工技術を「剝離技術」と呼ぶ。また「剝離技術」は「右手の属性」と「左手の属性」の組み合わせによって構成される。右手（利き手）の属性は、「ハンマーの種類」と「ハンマーの作法」であり、左手の属性は「素材の傾きの制御」である。両者の組み合わせによって、石器文化には独特の数種類の剝離技術があり、それらの剝離技術と石器のデザインが統合されて、石器は物質文化の一員として実現している。その統合の法を「技法」と呼ぶ。ゆえに、時代ごと、地域ごとに石器文化は個性的な「技法」がある。そして同時代他地域の異文化の接触によって、石器製作の属性が融合し、折衷形式の石器がつくられることもある。折衷形式の「技法」を解くことで、文化と文化の溶けあい方の歴史が理解できる。しかし本遺跡は資料数が少ないので「技法」までは記述できない。したがって、本報告で明らかにすることは、「剝離技術」を記述し、石器の種類を明らかにすることにある。

打製石鏃の種類とその製作技法

・石材について；黒曜石21点と頁岩１点の22点である。

・二次加工について；黒曜石の石鏃の二次加工技術は硬質ハンマーによる押圧剝離である。頁岩の石鏃のハンマーは軟質ハンマーの押圧剝離である。

・形態について；石鏃の形態は２類３形態に分類される。三角形の素材の底辺から基部を抉りながらつくるＡ類、あらかじめ基部から作り出すＢ類である。

　Ａ類は、かえしが基部と並行になるal形態、かえしが傘のように開くa2形態がある。

　Ｂ類の形態は１種類である。

・素材について；長さと厚みのグラフを作成した。Ｂ類は長さに従って厚みが増し、Ａ類は長さに関わらず厚みが一定である。この差は類によって選択される素材が異なることを示している。Ａ類の素材はおそらく両極剝片であり、Ｂ類は剝片素材であろう。それぞれ素材の面を残すものには属性表に記載した。

・製作技法について；本遺跡では３種類の石鏃がつくられている。最初に三角形をつくり、その底辺から抉りをいれて尖った短い基部をつくる有茎石鏃。剝片の打面を基部にして、基部からつくりだす有茎石鏃である。前者にはさらにかえしの作り方に２種類あり、a1とa2に分類される。

今後の課題

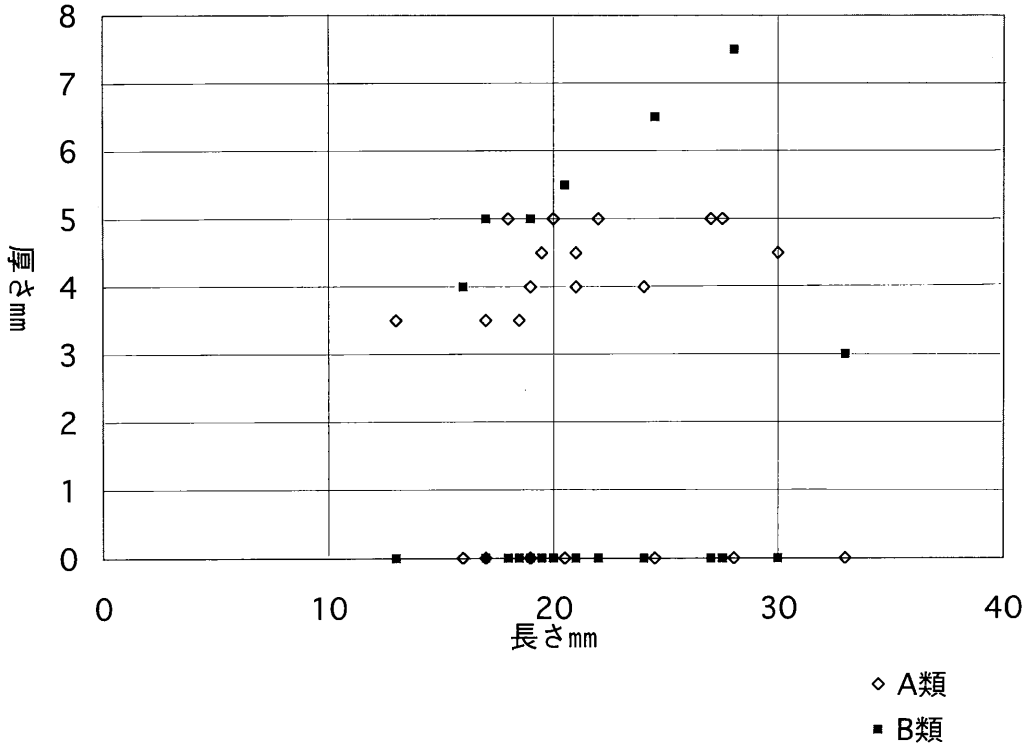
縄文後期後半（堀之内２式から）以降、千曲川流域には有茎石鏃と凹基鏃が共存する。この時期の遺跡には小諸市石神遺跡があり、その石鏃は採集品まで含めると数万点を越える。石神遺跡では、有茎石鏃は基部からつくられ、凹基鏃は三角形の底辺を抉って製作される。さらに後期後葉以前の凹基鏃は両極剝片を素材に製作されることが一般的である。

一方屋代遺跡群ではすべて有茎石鏃となり、凹基鏃は存在しない。そして興味深いことに、屋代遺跡群の有茎石鏃のＡ類は、凹基鏃の製作技法を踏襲して有茎石鏃を製作しているのである。

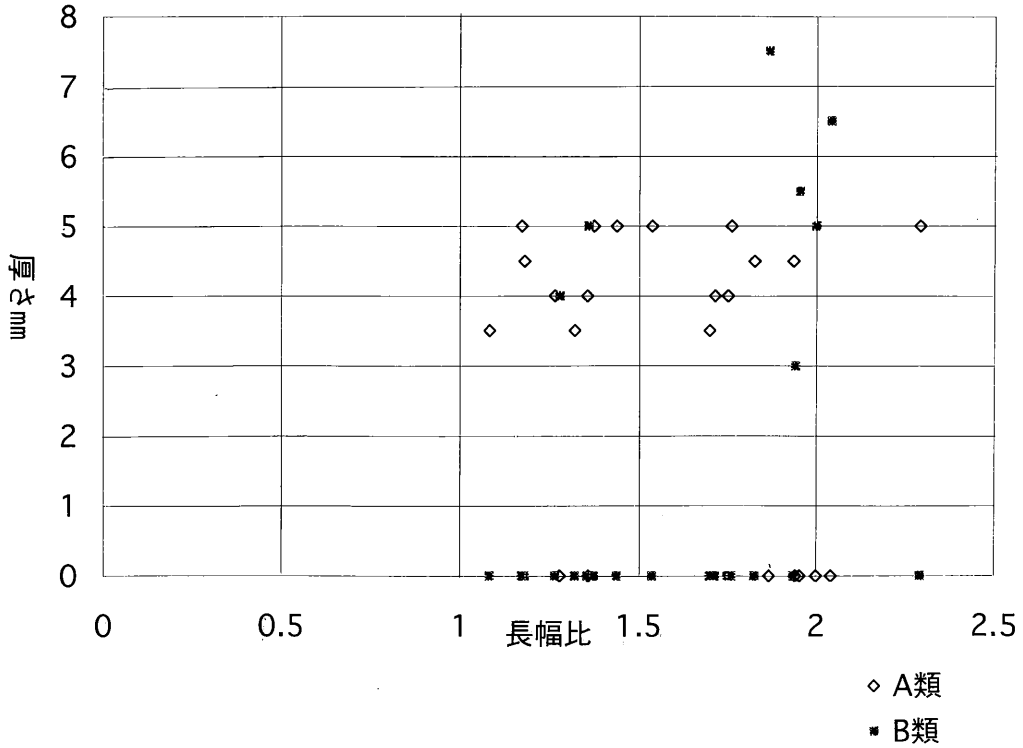
ところで、土器と石器の型式学は対比可能である。粘土は石質、輪積みは剝片剝離技術、文様は二次加工である。上記の石鏃の分析を土器に置き換えてみると、縄文後期後葉から晩期には在地の土器と大洞系の土器があり、そのあとは形態が大洞系であるが、その輪積みのテクニックは在地そのものという現象になる。実際の土器の分析と重なるであろうか。

第1表　屋代遺跡群出土石鏃統計表

No.	出土位置	器種	素材剝離技術	ハンマー	加工技術	石材	分類	分類2	所　　見
1	BX－10	有茎石鏃		硬質	やや不規則	黒曜石	A	a1	
2	BG－15	有茎石鏃		硬質	規則的	黒曜石	A	a2	
3	11号住	有茎石鏃		硬質	やや不規則	黒曜石	A	a2	
4	CA－7	有茎石鏃	両極剝片	硬質	やや不規則	黒曜石	A	a2	
5	BP－11	有茎石鏃		硬質	規則的	頁岩	A	a2	
6	FV－17	有茎石鏃		硬質	規則的	黒曜石	A	a2	
7	74号住	有茎石鏃		硬質	規則的	黒曜石	A	a2	
8	BR－12	有茎石鏃		硬質	規則的	黒曜石	A	a2	基部の作り出しに失敗
9	BD－15	有茎石鏃		硬質	規則的	黒曜石	A	a2	
10	13号住	有茎石鏃		硬質	やや不規則	黒曜石	B		
11	16号住	有茎石鏃		硬質	やや不規則	黒曜石	A	a1	
12	BD－14	有茎石鏃		硬質	やや不規則	黒曜石	A	a1	
13	BA－17	有茎石鏃		硬質	規則的	黒曜岩	B		
14	126号住	有茎石鏃		硬質	やや不規則	黒曜石	B		
15	17号住	有茎石鏃		硬質	規則的	黒曜石	A	a1	
16	AT－19	有茎石鏃		硬質	規則的	黒曜石	A	a1	
17	243号住	有茎石鏃		硬質	やや不規則	黒曜石	B		
18	土器集中	有茎石鏃		硬質	規則的	黒曜石	B		
19	28号住	有茎石鏃		硬質	やや不規則	黒曜岩	A	a1	
20	2号土坑	有茎石鏃		硬質	規則的	黒曜石	A	a2	
21	FQ－15	有茎石鏃	両極剝片	硬質	やや不規則	黒曜石	A	a1	
22	AV－19	有茎石鏃	剝片	硬質		黒曜石	B		B類石鏃の未成品
23	E0－13	磨製石鏃				凝灰岩	C		



第586図　打製石鏃の長さと厚さ



第587図　打製石鏃の長幅比と厚さの分布

第3節　屋代遺跡群出土木材の樹種同定

株式会社　古環境研究所

1．試　　料

試料は、屋代遺跡群ほかから出土した試料①～⑳の20点である。試料の詳細を第2表に示す。

2．方　　法

試料はカミソリを用いて新鮮な基本的三断面（木材の横断面、放射断面、接線断面）を作製し、生物顕微鏡によって60～600倍で観察した。同定は解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

3．結　　果

結果を第2表に示し、以下に同定根拠となった特徴を記す。図版183・184に主要な分類群の顕微鏡写真を示す。

a．スギ　*Cryptomeria japonica* D. Don　スギ科

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行はやや急で、晩材部の幅が比較的広い。樹脂細胞がみられる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は典型的なスギ型で、1分野に2個存在するものがほとんどである。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、10細胞高以下のものが多い。樹脂細胞が存在する。

以上の形質よりスギに同定される。スギは本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で、高さ40m、径2mに達する。材は軽軟であるが強靱で、広く用いられる。

b．スギ－ヒノキ科　*Cryptomeria japonica* D. Don－Cupressaceae　スギ科－ヒノキ科

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行はやや急である。樹脂細胞がみられる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は、1分野に存在する個数および形は不明瞭である。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。樹脂細胞が存在する。

以上の形質よりスギ－ヒノキ科に同定される。

c．ケヤキ　*Zelkova serrata* Makino　ニレ科

横断面：年輪のはじめに大型の道管が1～2列配列する環孔材である。孔圏部外の小道管は多数複合して円形、接線状ないし斜線状に配列する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、小道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織はほとんどが平伏細胞であるが、上下の縁辺部のものは方形細胞でしばしば大きくふくらみ、なかには結晶を含むものがある。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で、上下の縁辺部の細胞のなかには大きくふくらんでいるものがある。幅は1～7細胞幅である。

以上の形質よりケヤキに同定される。ケヤキは本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常

高さ20～25m、径60～70cmぐらいであるが、大きいものは高さ50m、径3mに達する。材は強靱で従曲性に富み、建築、家具、器具、船、土木などに用いられる。

d．トチノキ　*Aesculus turbinata* Blume　トチノキ科

横断面：小型でやや角張った道管が、単独ないし放射方向に2～数個複合して散在する散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、道管の内壁にはらせん肥厚が存在するが不鮮明である。放射組織はすべて平伏細胞からなり同性である。放射組織と道管との壁孔は、小型で密に分布する。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、比較的規則正しく層階状に配列する。

以上の形質よりトチノキに同定される。トチノキは北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ15～20m、径50～60cmに達する。材は軟らかく緻密であるが耐朽性、保存性がなく、容器などに用いられる。

e．サワラ　*Chamaecyparis pisifera* Endl.　ヒノキ科

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への以降はやや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は、ヒノキ型とスギ型の中間的な型のものが多く、1分野に2個存在するものがほとんどである。

第2表　屋代遺跡群出土木製品の樹種同定

（YD：土口バイパス地点、KTN：北野遺跡）

試料No.	出土位置	遺物	図版No.	樹種	（和名／学名）
①	KTN参考	馬形	514-1	スギ	*Cryptomeria japonica* D. Don
②	YD平安水田下	馬形	514-2	スギ	*Cryptomeria japonica* D. Don
③	YD平安水田下	馬形	514-3	スギ	*Cryptomeria japonica* D. Don
④	YD平安水田下	人形	514-6	スギ	*Cryptomeria japonica* D. Don
⑤	KTN参考	馬形		スギ	*Cryptomeria japonica* D. Don
⑥	KTN参考	馬形		スギ	*Cryptomeria japonica* D. Don
⑦	YD平安水田下	斎串	514-	スギ	*Cryptomeria japonica* D. Don
⑧	YD平安水田下	斎串	514-	スギ	*Cryptomeria japonica* D. Don
⑨	YD平安水田下	斎串	514-	スギ	*Cryptomeria japonica* D. Don
⑩	YD平安水田下	馬形	514-4	スギ	*Cryptomeria japonica* D. Don
⑪	YD平安水田下	斎串	514-	スギ	*Cryptomeria japonica* D. Don
⑫	YD平安水田下	馬形	514-5	スギ	*Cryptomeria japonica* D. Don
⑬	KTN参考			トチノキ	*Aesculus turbinata* Blume
⑭	KTN参考	皿		ケヤキ	*Zelkova serrata* Makino
⑮	YD平安水田下	木樋	516-26	スギ	*Cryptomeria japonica* D.Don
⑯	YD平安水田下	木樋蓋	516-27	スギ	*Cryptomeria japonica* D. Don
⑰	YD134号土坑	板材		スギ	*Cryptomeria japonica* D. Don
⑱	KTN参考	付札		スギ	*Cryptomeria japonica* D. Don
⑲	KTN参考	斎串		スギ —ヒノキ科	*Cryptomeria japonica* D. Don —Cupressaceae
⑳	YD84号土坑	井土枠	07-5	サワラ	*Chamaecyparis pisifera* Endl.

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質よりサワラに同定される。サワラは岩手県以南の本州、四国、九州に分布する。日本特産の常緑高木で、高さ30m、径１mに達する。材は木理通直、肌目緻密であるが、ヒノキより軽軟でもろいが、広く用いられる。

参考文献

佐伯浩・原田浩(1985)針葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，P. 20-48.

佐伯浩・原田浩(1985)広葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，P. 49-100.

第４節　屋代遺跡群66号住居跡出土炭化物の植物珪酸体分析

株式会社　古環境研究所

１．試　　料

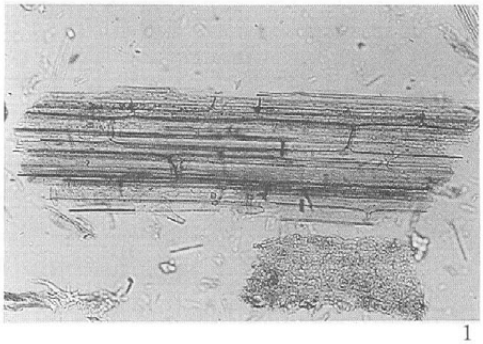
試料は、66号住居跡から出土した炭化物である。

２．方　　法

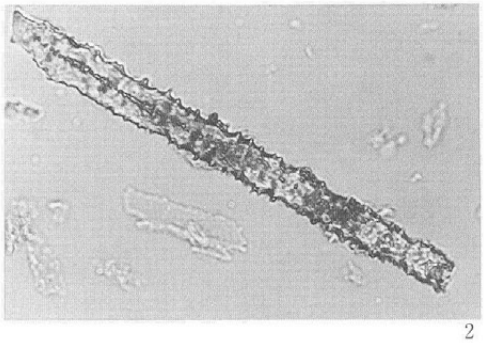
試料を洗浄して付着した土壌を取り除き、電気炉灰化法（550°C・６時間）で灰化して灰像プレパラートを作成した。その際、植物片の内部を観察するため灰像の一部を破壊した。観察は400倍の偏光顕微鏡下で行った。

３．結果と考察

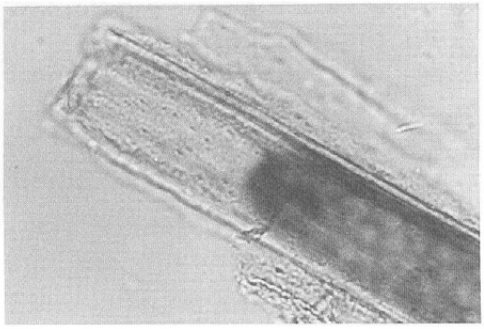
観察の結果、炭化物には棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）が多量に含まれており、ヨシなどのイネ科植物に特有な茎部起源の植物珪酸体も認められた（第588図）。このことから、66号住居跡から出土した炭化物は、ヨシなどのイネ科植物の茎の一部と推定される。



1



2



3

1　植物組織片（灰像）　×500
2　棒状珪酸体　×200
3　イネ科の茎部起源　×200

第588図　炭化植物の珪酸体顕微鏡写真

第５節　蛍光Ｘ線分析による屋代遺跡群出土黒曜石の原産地推定
――理化学的手法を用いたアプローチ――

東京学芸大学　建石　徹

（１）分析の目的

近年、長野県内の各遺跡で黒曜石の原産地推定分析が実施されるようになり、黒曜石原産地にほど近い長野県地域での黒曜石利用のあり方の実態が徐々に明らかにされつつある。特にここ数年の縄文時代遺跡における進展はめざましいものがある（小林・望月1999、宇田川・二宮1999など）が、弥生時代の資料に関する研究はいまだ乏しい現状にある。

本研究では、本遺跡をとりまく人・モノ・情報の移動について、土器などとは異なる側面から検討するための基礎資料作りをおこなうことを主な目的として、出土黒曜石資料の原産地推定を実施した。分析方法は、エネルギー分散型蛍光Ｘ線分析法（非破壊法）を採用した。

（２）分析資料（試料）

今回の調査で回収した石器（石材）資料のうち、φ５㎜程度以上の分析可能な大きさをもつ黒曜石資料22点を分析資料とした（第３表）。

（３）分析方法

黒曜石資料中の各元素の測定には、エネルギー分散型蛍光Ｘ線分析（非破壊法）を採用した。本研究で用いた装置は、セイコー電子工業製卓上型蛍光Ｘ線分析装置ＳＥＡ－2001である。

第３表　分析資料（試料）一覧

分析No.	図No.	地区	グリッド	遺構・層位	器　　種
1	559-1	B	X-10		石鏃
2	559-2	B	G-15	トレンチ	石鏃
3	559-4	C	A-17		石鏃
4	559-6	F	V-17		石鏃
5	559-7			74住	石鏃
6	559-8	B	R-12		石鏃
7	559-9	B	D-15		石鏃
8	559-10			13住	石鏃
9	559-11			16住	石鏃
10	559-12	B	D-14		石鏃
11	559-13	B	A-17		石鏃
12	559-14			126住	石鏃
13	559-15			17住	石鏃
14	559-16	A	T-19		石鏃
15	559-17			243住	石鏃
16	559-18			土器集中区	石鏃
17	559-19			28住	石鏃
18	559-20			土坑２	石鏃
19	559-21	F	Q-15		石鏃
20	559-22	A	V-19		石鏃
21	無	B	M-10		リタッチドフレイク
22	無	B		土坑54	石鏃（未成品）

黒曜石の主成分元素組成では、主成分8元素〈ケイ素（Si）、チタン（Ti）、アルミニウム（Al）、鉄（Fe）、マグネシウム（Mg）、カルシウム（Ca）、ナトリウム（Na）、カリウム（K）〉のうち、とくにFe、Ca、Kの存在量が原産地間で異なることが知られている。研究の蓄積が比較的多くある関東周辺の黒曜石原産地の場合、Fe、Ca、Kの存在量を比較することで、高原山、信州、神津島、箱根の大分類が可能である。本研究ではこれら主成分3元素に、これらと挙動が類似し原産地推定に有効とされる微量成分元素である3元素〈マンガン（Mn）、ストロンチウム（Sr）、ルビジウム（Rb）〉をくわえた6元素の測定をおこなった。これによってFe、Ca、Kの存在量比だけでは識別が困難な信州内部のより細かな原産地について識別することが可能となる。これは各原産地によって黒曜石の結晶分化の過程（段階）がそれぞれ異なることに由来する。近年、筆者らはこれら6元素の存在量比の比較が、遺跡出土黒曜石の原産地推定に有効であることを指摘してきた（建石・二宮1998、1999など）。

主成分分析の測定条件は以下のとおり。

試料室雰囲気　真空雰囲気、測定時間　180秒、測定回数　3回、加速電圧　15kV。標準試料に小深沢産黒曜石を用い、ファンダメンタルパラメーター法により8元素の酸化物の和を100とする重量濃度

第4表　関東甲信越地方周辺の主な原産地黒曜石の主成分元素組成（W%）

	SiO_2	TiO_2	Al_2O_3	Fe_2O_3	MgO	CaO	Na_2O	K_2O
高原山（栃木県）	75.3	0.5	12.9	2.5	0.1	2.0	3.7	3.1
星ケ塔（長野県）	76.2	0.2	13.2	1.1	0.1	0.7	3.7	4.9
小深沢（長野県）	76.6	0.1	13.1	1.0	0.1	0.6	4.1	4.5
麦草峠（長野県）	76.3	0.4	12.9	1.3	0.1	1.0	3.8	4.3
男女倉（長野県）	74.9	0.6	13.4	1.9	0.1	1.0	3.5	4.8
神津島（東京都）	76.6	0.3	13.1	1.2	0.1	1.0	4.5	3.3
畑宿（神奈川県）	74.6	0.7	12.7	3.4	0.1	2.3	4.8	1.3
柏峠　（静岡県）	73.6	0.6	12.6	2.7	0.1	2.3	3.7	2.4
上多賀（静岡県）	76.1	0.4	12.8	2.4	0.1	2.0	4.3	1.9
新発田（新潟県）	75.9	0.1	13.3	0.9	0.1	0.7	4.5	4.3
月山　（山形県）	75.5	0.2	13.5	0.9	0.2	0.7	5.5	3.6

第5表　関東甲信越地方周辺の主な原産地黒曜石の6元素組成（W%）

	MnO	Fe_2O_3	SrO	CaO	Rb_2O	K_2O
高原山（栃木県）	1.3	56.6	0.8	16.5	0.8	24.0
星ケ塔（長野県）	3.4	32.1	0.3	9.9	1.1	54.2
小深沢（長野県）	4.2	32.8	0.0	10.2	2.4	50.4
麦草峠（長野県）	1.6	40.4	1.1	12.7	0.8	43.5
男女倉（長野県）	2.2	38.5	0.7	11.1	1.2	46.3
神津島（東京都）	3.3	39.8	0.8	13.6	0.7	42.0
畑宿（神奈川県）	2.2	69.1	1.3	17.9	0.1	9.5
柏峠　（静岡県）	1.1	58.0	0.9	25.0	0.2	15.0
上多賀（静岡県）	1.7	61.0	1.2	20.0	0.3	16.0
新発田（新潟県）	3.3	32.0	0.5	14.0	1.3	48.0
月山　（山形県）	5.0	35.0	0.7	13.0	1.0	45.0

比を求めた。

６元素分析の測定条件は以下のとおり。

試料室雰囲気　空気雰囲気、測定時間　100秒、測定回数　３回、加速電圧　50kV。標準試料に小深沢産黒曜石を用い、ファンダメンタルパラメーター法により、６元素の酸化物の和を100とする重量濃度比を求めた。

本遺跡の地理的条件を考慮し、黒曜石資料の原産地推定をおこなうための基準資料として、関東甲信越地方周辺の主要な黒曜石原産地のうち、栃木県塩谷郡高原山、長野県小県郡和田村小深沢、同男女倉、長野県諏訪郡星ケ塔、長野県南佐久郡麦草峠、東京都神津島村恩馳島、神奈川県下足柄郡箱根町畑宿、静岡県柏峠、静岡県熱海市上多賀、新潟県新発田市板山、山形県月山の分析値を第４・５表に示した。第４表に参考として主成分８元素の濃度比を示し、第５表に先の６元素の濃度比を示した。

原産地の推定は黒曜石資料の分析結果をこれら各原産地固有の特徴的傾向と比較して、個々に原産地を推定する方法を採用した。

（４）分析結果、考察

第６表に屋代遺跡群出土黒曜石資料の６元素組成の分析値と原産地推定の結果を示した。ルビジウム、ストロンチウムの含有量比等からいずれも星ケ塔産と推定できた。

第６表　屋代遺跡群出土黒曜石の６元素組成分析結果（W%）と原産地推定結果

分析No.	図No.	MnO	Fe_2O_3	SrO	CaO	Rb_2O	K_2O	推定原産地
1	1	3.3	30.9	0.4	15.7	1.2	48.5	星ケ塔
2	2	2.5	31.9	0.4	12.3	1.1	51.7	星ケ塔
3	4	3.0	31.8	0.3	11.9	1.2	51.8	星ケ塔
4	6	3.2	31.5	0.2	10.6	1.2	53.3	星ケ塔
5	7	3.7	32.6	0.3	12.9	1.3	49.1	星ケ塔
6	8	3.1	31.9	0.3	8.3	1.4	54.9	星ケ塔
7	9	2.8	31.7	0.4	11.3	1.2	52.6	星ケ塔
8	10	2.6	31.7	0.4	10.7	1.2	53.4	星ケ塔
9	11	3.4	30.8	0.4	12.3	1.2	51.7	星ケ塔
10	12	3.5	30.1	0.4	13.0	1.1	52.0	星ケ塔
11	13	3.9	33.1	0.3	10.0	1.3	51.4	星ケ塔
12	14	3.8	30.6	0.3	12.5	1.1	51.7	星ケ塔
13	15	3.0	31.9	0.3	16.0	1.2	47.7	星ケ塔
14	16	3.0	31.5	0.3	13.3	1.1	50.7	星ケ塔
15	17	2.7	28.1	0.4	10.0	1.0	57.9	星ケ塔
16	18	3.2	33.4	0.2	15.0	1.2	46.9	星ケ塔
17	19	3.6	33.2	0.3	11.6	1.3	50.0	星ケ塔
18	20	3.7	33.3	0.3	15.3	1.1	46.2	星ケ塔
19	21	3.2	31.6	0.3	15.2	1.2	48.5	星ケ塔
20	22	3.7	33.2	0.3	13.8	1.2	47.8	星ケ塔
21	－	2.9	33.3	0.4	8.8	1.1	53.5	星ケ塔
22	－	3.1	32.6	0.3	11.0	1.0	52.0	星ケ塔

第６節　屋代遺跡群出土の土器胎土分析

建石　徹

（１）分析の目的

弥生時代後期から古墳時代初頭期の良好な一括資料を検出した416号住居から出土した土器について、原産地推定を目的とした胎土分析を実施した。

土器胎土の原料が、マトリクスである「粘土」部分と、河川砂などの「混和材」部分の混合土であると仮定する。本研究は、胎土の地球化学的特徴を根拠に、土器や情報の移動に関する基礎情報を蓄積することを主な目的とするが、特に粘土の由来を検討することで、この課題と取り組むこととする。これは筆者が、縄文土器製作技術の多様性、複雑性を認める一方で、粘土と混和材では、粘土の方が、より製作地付近から採取される可能性が高いと考えていることを前提としている。粘土の由来を検討することが、製作地を検討するうえでも有効であると考えたい。しかし、粘土と混和材を明瞭に識別、分離することは困難である。ここでは、肉眼で確認できる大型粒子（混和材に由来する可能性が高い）を分析の対象から極力除外することで問題に対応した。

（２）分析資料（試料）

分析に供した資料を第７表に示した。いずれも416号住居出土のもので、弥生時代後期から古墳時代初頭に位置付けられる土器群より採取した。

第７表　土器胎土分析資料（試料）一覧

分析No.	遺構	注記等	器形等
1	416住	No.12	壺
2	416住	No. 9	Ｓ字甕
3	416住	No. 9	杯（口縁内湾）
4	416住	No. 9	甕（刷毛目）
5	416住	No. 9	甕（内面箆削）

（３）分析方法

本研究では、エネルギー分散型蛍光Ｘ線分析法を採用、実施した。

分析装置はセイコー電子工業製エネルギー分散型SEA-2001を用いた。測定条件は以下のとおり。試料室雰囲気　真空雰囲気、測定時間　300秒、測定回数　５回以上、加速電圧　15kV。標準試料を用いず、ファンダメンタルパラメーター法により測定８元素（Si、Ti、Al、Fe、Mg、Ca、K、Mn）の酸化物の和を100とする重量濃度比を求めた。試料を超音波洗浄し、乾燥させた後、分析に供した。

本研究では標準試料を用いなかったため、定量性には優れないが、各試料間の比較や傾向を知るというレベルでは影響ないものと判断した。また、Naについては本条件での定量が困難なため測定しなかった。

（４）胎土の不均一性の問題

過去の筆者らの研究と同様、本研究でも同一個体内の胎土の不均一性を考慮し、各個体ごとに測定位置を変えて５回ずつ測定をおこなった。分析に供した５個体をすべて５回ずつ分析した後、個体ごとの結果のまとまりをみるために、25回（５回×５個体）の測定結果をクラスター分析（最長距離法）に供した。この結果、５回の測定結果が同一のクラスターを形成した個体については、５回の平均値を計算し、これをその個体の主成分元素組成とした。５回の測定結果がばらつく個体については、さらに６回目、７回目の分析をおこない、５つの測定結果が同一のクラスターを形成した段階で５回の平均値を計算し、これをその個体の主成分元素組成とした。本研究では８回以上の測定が必要だった個体はなかった。クラスター分析には、ＳＰＳＳ社製多変量解析ソフトＳＰＳＳ7.5.1Ｊを使用した。

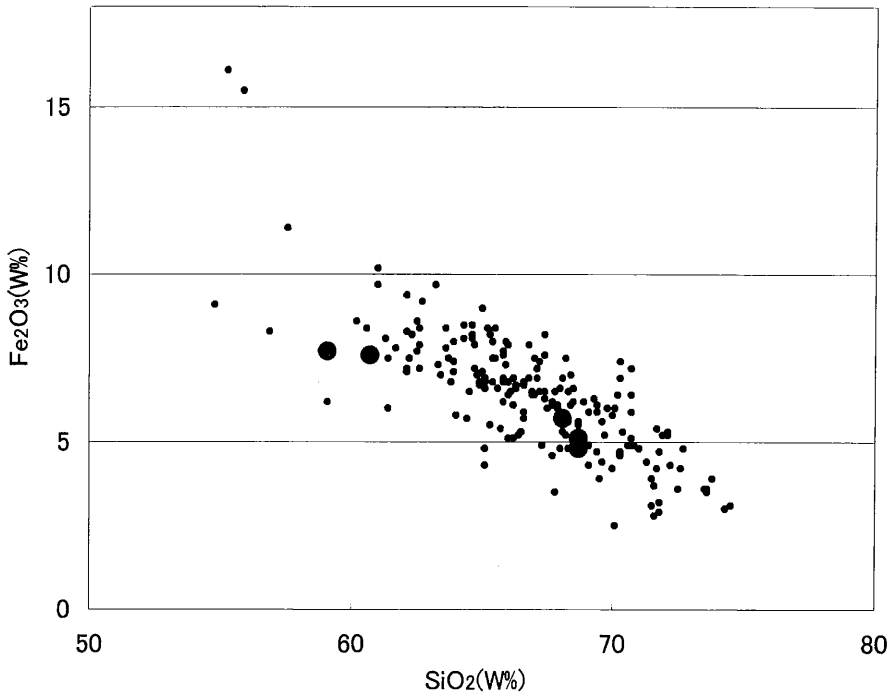
（５）分析結果、考察

第８表に蛍光Ｘ線分析の結果を示した。

粘土の基材である母岩の特徴を反映すると考えられるFeやSiの含有量比を検討すると、分析に供した５点は、Siが相対的に多く（68％程度）Feが少ない（５％程度）№１・２・５と、Siが相対的に少なく（60％程度）Feが多い（７％程度）№３・４の２つのグループに大きく分けることができる。さらに各グループが細分される可能性も多分にある。筆者は過去に屋代遺跡群の他地点（上信越自動車道地点）出土土器約200点（縄文時代～古代）について、本研究と同様の方法で胎土分析を実施し報告したことがある（建石　1999）。参考として、第589図に上信越道地点出土土器の分析結果（Si－Fe比）を重ねて示した。今後、詳細な型式学的検討、出土状況の検討、混和材の検討等を踏まえて総合的な考察をおこなうための基礎資料としたい。

第８表　屋代遺跡群出土土器の胎土分析８元素組成分析結果（W％）

分析№	MgO	Al_2O_3	SiO_2	K_2O	CaO	TiO	MnO	Fe_2O_3
1	1.4	21.8	68.7	0.9	1.3	0.8	0.0	5.1
2	1.8	21.8	68.7	1.1	1.2	0.7	0.0	4.8
3	2.1	25.3	60.7	2.2	1.2	0.8	0.0	7.6
4	2.7	26.2	60.1	2.3	1.5	0.4	0.1	7.7
5	2.4	21.1	68.1	1.0	1.2	0.5	0.0	5.7



第589図　屋代遺跡群土口バイパス地点（●）と上信越道地点（・）
出土土器の胎土分析結果（Si－Fe比）

文献

宇田川滋正・二宮修治　1999「エネルギー分散型蛍光Ｘ線分析による黒曜石の原産地推定」『氷遺跡発掘調査資料図譜』氷遺跡発掘調査資料図譜刊行会

小林克次・望月明彦　1999「鷹山遺跡群における黒耀石利用の様相」『日本文化財科学会　第16回大会　研究発表要旨集』日本文化財科学会

建石徹　1999「第10章．第１節．３（３）粘土の蛍光Ｘ腺分析による在地胎土と異質胎土」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書24　更埴市内その３　更埴条里遺跡・屋代遺跡―縄文時代編―』長野県埋蔵文化財調査センター

建石徹・二宮修治　1998「蛍光Ｘ線分析による大橋遺跡出土黒曜石の原産地推定」『大橋遺跡』目黒区大橋遺跡調査会

建石徹・二宮修治　1999「蛍光Ｘ線分析による下野谷遺跡出土黒曜石の原産地推定」『下野谷遺跡』保谷市遺跡調査会

第７節　屋代遺跡群出土の動物遺体

国立歴史民俗博物館　西本豊弘
慶応義塾大学大学院　姉崎智子

屋代遺跡群からは、約1000点以上の多量の動物遺体が出土した。これらの動物遺体の大半は小さく割れていた。中には焼けて収縮したり、また、解体痕や加工痕を持つものがあった。これらの骨の出土層位は、弥生時代から平安時代にわたるが、出土時期を特定できるのは、古墳時代および奈良時代である。検出された動物遺体には、キジ類・ニワトリ類・ネズミ類・ウサギ類・サル・シカ・カモシカ・イノシシ(？)・ブタ・ウシ・ウマ・イヌ・ツキノワグマ・ヤギまたはヒツジ・ヒトが含まれていた(第９表)。それらの内容を時代別、種別に第10～14表に示した。以下、それらについて簡単に説明する。

１．古墳時代の動物遺体

古墳時代の住居址あるいは土壙の覆土から出土した動物遺体は、総数154点であった。それらには、鳥類と哺乳類が認められた。鳥類では、キジあるいはニワトリが４点出土した（第10表)。このうち中手骨１点はキジ類のものである。ただし、ヤマドリではなく、小型のキジと思われる。

哺乳類では、最も出土量が多かったのはシカで破片総数（NISP）は60点で

第９表　種名表

キジ・キジ類	Phasianidae gen. et sp.
ニワトリ	*Gallus galus* var. *domesticus*
サル	*Macaca fuscata*
ヒト	*Homo sapiens*
ウシ	*Bos taurus*
イノシシ	*Sus scrofa*
ブタ	*Sus scrofa domestica*
シカ	*Cervus nippon*
カモシカ	*Capricornis crisps*
ヤギ・ヒツジ	*Ovis/Capra hircus*
ウマ	*Equus equus*
イヌ	*Canis familiaris*
ツキノワグマ	*Ursus thibetanus*
齧歯類	*Gen. Spa.* Indet.
ウサギ類	*Gen. Spa*. Indet.

第10表　屋代遺跡群出土鳥類遺体

出土地点	種	部位	左右	残存状態	備考	帰属年代
214住	キジ/ニワトリ	脛骨		骨幹部－遠位部		古墳
317住	キジ/ニワトリ	脛骨	R	遠位部		古墳
72住	キジ？	中手骨	L	骨幹部　破片		古墳
72住	キジ類	中手骨	R			古墳
21住	ニワトリ？	上腕骨	L	遠位部　破片		奈良以降
16住	キジ類	烏口骨	R		♂？	奈良以降
16住	鳥類	脛骨	L	近位部		奈良以降
1号溝	鳥類	上腕骨	L	遠位部	幼	奈良以降
1号溝	ニワトリ？	大腿骨	L	近位部	幼	奈良以降
409住	キジ類	中足骨	L		♂	奈良以降
78住	キジ/ニワトリ	尺骨	R	骨幹部		奈良以降
78住	キジ/ニワトリ	橈骨	R	骨幹部		奈良以降
78住	キジ類	中手骨	L	完存		奈良以降
CH8	キジ類	上腕骨	R	遠位部		奈良以降
H21	鳥類	上腕骨	R		若	奈良以降
110住	キジ類	尺骨	R	遠位部		不明
192住	キジ類	中手骨	L	完存	大型	不明
BL10	ニワトリ類	上腕骨	R		小型	弥生～平安
D5－1	ニワトリ類	脛骨	L	近位部		弥生～平安
H7－5	鳥類	尺骨	R			弥生～平安
R17－1	鳥類	指骨		破片		弥生～平安

あり、最小個体数（MNI）は5体であった。次いで、イノシシ類が9点出土しているが、四肢骨の骨幹部破片が多かったため、野生あるいは家畜の区別はできなかった。ウシは同一個体の左右下顎骨が1点および右下顎骨1点など、計10点が出土した。これらの下顎骨3点は、すべて31号住居から出土したものであり、いずれも成獣である。歯の保存状態は悪く、下顎全体が保存されていないため、大きさや形状は不明である。ウマは遊離歯4点、足根骨など計7点が出土したのみである。歯からみると、成獣の上顎右第2前臼歯が1点あることから、成獣個体が1体以上含まれていることは、確実である。イヌは、左大腿骨骨幹部が1点および左大腿骨骨幹部～遠位部が1点出土しており、最小個体数にして2体分が存在する。その大きさは小型～中型であろう。そのほかには、ネズミ類1点とヒトが1点認められた。このヒトの骨は、左膝蓋骨であって、117号住居から出土したものであった。表面が黒色化しており、火を受けている可能性がある。ほかの部位がともなっていないため、2次的にこの住居址覆土に混入した可能性がある（第11表）。

2．奈良時代～平安時代の動物遺体

奈良時代以降の住居址あるいは土壙の覆土から出土した動物遺体は、総数327点であった。鳥類では、キジとニワトリが計10点出土した。野生のキジと思われるものが目立った（第10表）。

哺乳類では、イヌ・シカ・カモシカ(？)・ウシ・ウマ・イノシシ類・クマ・ネズミ類・ヒトが認められた。その中で、最も出土量が多かったのはイヌである。ただし、イヌの出土量が多い理由は、82号土壙から1体分が一括して出土したためである。このイヌは、頭蓋骨の一部、左右の上顎骨・下顎骨をともなうもので、下顎骨の関節突起から計測した長さ124.2mmから推定した体高は約45cm、脛骨の最大長152.3mmから推定した体高は43cmであり、中型犬に相当する。下顎骨厚は幅ひろく、下顎底は平坦である。陰茎骨は確認されなかったが、犬歯が大きく、四肢骨が頑丈なため、雄である可能性が高い。また、出土状態からみて、埋葬されていた可能性が高い。シカは、37点が出土しており、最小個体数は3体である。イノシシ類は計17点が認められたが、遊離歯と四肢骨破片であり、その形質については良く分からない。また、カモシカと思われるものは、右寛骨1点出土しており、ツキノワグマの右中足骨IIIも1点出土している。

ウマは21点が認められた。そのうち同一個体と思われる左右上顎骨と左右下顎骨は、11号土壙から一括して出土したものである。この個体は第1後臼歯が萌出を開始したものであり、生後12ヶ月前後の個体である。この個体の骨の保存状態は悪いため、四肢骨や椎骨などもともなっていた可能性がある。また、251号住居からウマの頭蓋骨が1点出土している。これは成獣である。このほかには、橈骨・尺骨や脛骨、中手骨、中足骨が出土している。ウシは、35点出土しており、大半が四肢骨であった。なかでも、中手骨と中足骨、踵骨、距骨が多かった。計測値は第15表に示した。中手・中足骨の形状からみると、骨体が華奢なものと太いものがあった。それが、雌雄の差によるのか品種の差によるものかは不明である。ヒトは、上顎左側切歯1点が25号住居から、また左脛骨骨幹部が42号住居から1点出土している。いずれも成人のものと思われる（第12表）。

3．奈良時代以降の溝から出土した動物遺体

奈良時代以降のものと考えられる溝から動物遺体が24点出土している。確認した種はニワトリ類(？)・イノシシ類・ウシ・ウマ・シカである。その内容は、第10・13表に示したとおりである。G区

第11表　古墳時代の動物遺体

		種名	シカ	イノシシ類	ウマ	ウシ	イヌ	ネズミ類	ヒト
角			5						
頭蓋骨	L								
	R								
下顎骨	L					1		1	
	R		2			2		1	
遊離歯			3	1	4	2			
肩甲骨	L					1			
	R			1					
上腕骨	L	近位部							
		骨幹部	1	1					
		遠位部	3						
	R	近位部							
		骨幹部		1					
		遠位部	1						
橈骨	L	近位部							
		骨幹部							
		遠位部							
	R	近位部	2						
		骨幹部	1						
		遠位部	1			1			
尺骨	L		2						
	R		3						
中手骨	L	近位部	1	1					
		骨幹部	2	1					
		遠位部	2	1					
	R	近位部							
		骨幹部							
		遠位部							
寛骨	L		1						
	R			1					
大腿骨	L	近位部							
		骨幹部					2		
		遠位部					1		
	R	近位部							
		骨幹部							
		遠位部							
脛骨	L	近位部							
		骨幹部							
		遠位部	1						
	R	近位部							
		骨幹部			2				
		遠位部	1		1				
膝蓋骨	L								1
	R								
踵骨	L		1			1			
	R		3	1					
距骨	L		3						
	R								
中足骨	L	近位部	5						
		骨幹部	5						
		遠位部	2						
	R	近位部	1						
		骨幹部	1						
		遠位部	2						
基節骨			1			2			
中節骨									
末節骨				2					
NISP			60	9	7	10	2	1	1
MNI			5	1	1	2	2	1	1

第12表　奈良時代以降の動物遺体

		種名	シカ	イノシシ類	ウマ	ウシ	イヌ	ネズミ類	ヒト
角			5			2			
頭蓋骨	L			1	2		1		
	R				2		1		
下顎骨	L				1			1	
	R				1		1		
遊離歯			4	5	6	2	1	1	1
肩甲骨	L					2	1		
	R								
上腕骨	L	近位部							
		骨幹部					1		
		遠位部					1		
	R	近位部					1		
		骨幹部					1		
		遠位部	1				2		
橈骨	L	近位部				1	1		
		骨幹部				2	1		
		遠位部				1			
	R	近位部	1		1	1	1		
		骨幹部	1		1		2		
		遠位部	1		1		1		
尺骨	L					1	1		
	R		1		1	1	2		
中手骨	L	近位部	1						
		骨幹部							
		遠位部	1						
	R	近位部	1						
		骨幹部	1			1			
		遠位部			1				
寛骨	L		1		1				
	R			1					
大腿骨	L	近位部	1			1	1		
		骨幹部				2	1		
		遠位部	1			1	1		
	R	近位部				1			
		骨幹部				2	1		
		遠位部				1	1		
脛骨	L	近位部				1	1		
		骨幹部		1		1	1		1
		遠位部		1	1	1	1		
	R	近位部				1			
		骨幹部				1	1		
		遠位部	1		1	1	1		
膝蓋骨	L								
	R								
踵骨	L		2			2	1		
	R		2	1		2			
距骨	L		1				1		
	R		3	1		2			
中足骨	L	近位部					4		
		骨幹部					4		
		遠位部					4		
	R	近位部			1	1	4		
		骨幹部			1	1	4		
		遠位部				1	4		
中手・中足骨		破片		1	2				
手根骨				2		3			
足根骨						1			
中心足根骨	L								
	R					1			
基節骨			6	1		2	3		
中節骨			2	2	3	3	3		
末節骨							1		
環椎							1		
軸椎							1		
頸椎							5		
胸椎							5		
腰椎						2			
NISP			37	17	21	35	49	2	2
MNI			3	2	3	2	2	1	1

４号溝、Ｆ区５号溝からの出土が多い。そのうち４号溝からは、シカとイノシシ類が出土しており、５号溝はウシ、ウマが多かった。

４．弥生時代～平安時代の動物遺体

弥生時代から平安時代に堆積した遺物包含層から動物遺体が総数510点出土した。鳥類の出土量は4点と少なく、そのなかにはニワトリ類の上腕骨および脛骨を各１点確認しただけである（第10表）。

哺乳類は、ノウサギ(？)・サル・シカ・イノシシ・ブタ・ウマ・ウシ・イヌ・ヒトが認められた。最も出土量が多かったのは、シカで、破片総数にして65点で、最小個体数は５体であった。シカについで多かったのは、ウシ57点で、最小個体数にして３体であった。ウマは37点で、最小個体数３体である。

イノシシ類は25点が出土しており、最小個体数は２体であった。そのなかには、確実に家畜ブタと考えられる個体が含まれていた。その資料はFR-16区から出土した成獣の右上腕骨骨幹部～遠位部であり、骨が野生のイノシシと比べて肥大化していた(第590～595図参照)。この骨の近位部が失われているため、大きさ全体については不明であるが、遠位部の計測値（最大幅44.7㎜）からみると、野生イノシシと同程度の大きさであり、特に大型ではない。骨の肥大化の程度からみると、弥生時代のブタではなく、おそらく奈良・平安時代のものである可能性が高い。

このほかには、ウサギ類の頭蓋骨および下顎骨、幼獣の肩甲骨が出土した。また、サルは、上顎右第１後臼歯がＢ24-4区から１点および右大腿骨骨幹部がBT-11区から１点出土している。ヤギあるいはヒツジと考えられる左尺骨も１点、遺跡の検出面から採集されている。詳しい出土位置は不明である。ヒトは、FE-14区から新生児の右側頭骨、左上腕骨骨幹部と左脛骨骨幹部、また、A5-19区から成人の左下顎骨が出土している。ほかには、上腕骨、腓骨、肋骨が出土している。FE-14区で認められた

第13表　奈良以降の溝から出土した動物遺体

遺構	種	部位	左右	残存状態	数量	歯列	萌出状態	備考	BP	DP
A区溝1	ウシ	大腿骨	R	骨幹部	1			cut		
溝1	シカ	上腕骨	R	遠位部	1					
B区溝3	シカ	中手骨	L	近位部ー骨幹部	1			cut		
G区溝4	イノシシ類	遊離歯	L	下顎	1	M1	幼獣			
溝4	イノシシ類	遊離歯	R	下顎	1	M1	幼獣			
溝4	不明			骨片	1					
溝4	シカ	上腕骨	R	骨幹部　破片	1			噛痕		
溝4	不明			骨片	1					
F区溝5	イノシシ類	環椎		破片	1			cut		
溝5	ウシ	中手骨	R	近位部ー骨幹部	1				58.22	35.29
溝5	ウシ	橈骨	L	骨幹部ー遠位部	1					
溝5	ウシ／ウマ	脛骨		骨幹部　破片	1					
溝5	ウシ／ウマ	椎骨		椎体　破片	1					
溝5	ウマ	寛骨	L	腸，坐骨部，寛骨臼	1					
溝5	ウマ	距骨	R		1					
溝5	ウマ	脛骨	R	骨幹部-遠位部	1					
溝5	ウマ	踵骨	R		1					
溝5	ウマ	足根骨	R		1					
溝5	ウマ	大腿骨	R	近位部-遠位部	1					
溝5	ウマ	大腿骨	R	遠位部　破片	1					
溝5	ウマ	中足骨	R	近位部-骨幹部	1			華奢	41.14	33.89
溝5	シカ	基節骨			1					

*計測　BP：近位端最大幅、DP：近位端前後径

第14表　弥生時代～平安時代の動物遺体（グリッド一括）

		種名	シカ	イノシシ類	ウマ	ウシ	イヌ	ヤギ・ヒツジ	ウサギ類	サル	ヒト
角			7								
頭蓋骨	L			1					1		
	R			1					1		1
下顎骨	L				3		1		1		1
	R		1	2	1						
遊離歯			6	3	9	15				1	
肩甲骨	L		1		1						
	R		2			1			1		
上腕骨	L	近位部	1	1							
		骨幹部	1			1					
		遠位部	2			1					1
	R	近位部									
		骨幹部		1							
		遠位部		1	1						
橈骨	L	近位部				1					
		骨幹部			1	1					
		遠位部	1			2					
	R	近位部		1		1					
		骨幹部									
		遠位部									
尺骨	L		1			2		1			
	R					1					
中手骨	L	近位部	1			3					
		骨幹部	1			3					
		遠位部	1			2					
	R	近位部	1		1						
		骨幹部	1		1						
		遠位部			1						
寛骨	L		1	1							
	R										
大腿骨	L	近位部				1	1				
		骨幹部		1		1	1				
		遠位部	1				1				
	R	近位部									
		骨幹部	1							1	
		遠位部									
脛骨	L	近位部									
		骨幹部		1		1					1
		遠位部		1		1					
	R	近位部									
		骨幹部	1	1		1					
		遠位部	2	1		1					
膝蓋骨	L										
	R										
踵骨	L			1		1					
	R										
距骨	L		2		1						
	R		5	1							
中足骨	L	近位部	1			1					
		骨幹部			2						
		遠位部			1						
	R	近位部	1		2	1					
		骨幹部			2						
		遠位部	1		1						
中手・中足骨		破片	7	2		1					
手根骨			1		1	4					
足根骨					1						
中心足根骨	L		2			1					
	R		1								
基節骨			5		4	6					
中節骨			2	1	1	2					
末節骨				1	1						
肋骨						1					
NISP			65	25	37	57	2	1	3	2	8
MNI			5	2	3	3	1	1	1	1	2

新生児の骨は、一括して出土しており、この地に埋葬されたものであろう（第14表）。

５．ま と め

この遺跡の動物遺体をみると、弥生時代から平安時代という長い期間に堆積したものであるが、シカ・ウシ・ウマが多いことが特徴としてあげられる。シカは弥生時代以降、一般に多く出土する動物であるが、時代がくだるにしたがって少なくなる傾向がある。しかしながら、この遺跡では、奈良・平安時代になっても出土量が多い。それは、この遺跡が山間の盆地内に立地していることが関係しているかもしれない。また、近くにある生仁遺跡で知られているように、儀礼にシカの骨が用いられた可能性も考えられる。

また、この遺跡で興味深いことは、家畜ブタの上腕骨が１点確認されたことである。古代に猪飼部が存在し、ブタが飼育されていたことは知られているが、古代から中世にかけては、これまで実際にブタの骨が確認された例は少ない。出土した資料は弥生時代から平安時代のもので、時代が特定できないが、その形状からみて弥生時代あるいは現代のブタではないと考えられる。奈良・平安時代のものである可能性が高い。山間部の更埴市でブタがこの時代に存在したことは、日本におけるブタの歴史の空白を埋めるものとして、大変貴重である。

最後に、この遺跡において家畜のウシ・ウマが多いことも特徴である。一般に、古代においてウシ・ウマは出土するが、その量は少ない。また東日本においては、ウシと比較してウマの出土が多いことが知られている。しかし、この遺跡においては、ウマと比べてウシの出土が多い。ウシの骨は、加工品によく利用されるため、この遺跡でウシ・ウマの肋骨が「卜骨」に利用されていたことと関連があるのかもしれない。この遺跡の内容については、他の同時期のものと比較検討した上で、さらに論じるつもりである。

引用文献

山内忠平1958「犬における骨長より体高の推定法」
『鹿児島大学農学部学術報告』７　125-131

第15表　ウシ・ウマ骨計測値(mm)

遺構	種	部位	左右	残存状態	歯列	萌出状態	備考	P2L	P2B	P3L	P3B	P4L	P4B	M1L	M1M	M2L	M2M	M3L	M3B	GL	BP	DP	BD	DD	BT	GLl	GLm	帰属年代
31住	ウシ	下顎骨	R		(P34M123)	成獣				18.3		20.7		24.7		27.8		36.8										古墳
31住	ウシ	肩甲骨	L																	62.8			43.5					古墳
31住	ウマ	脛骨	R	骨幹部−遠位部																			71.1	45.9				古墳
132住	ウマ	遊離歯	R	上顎	P2	成獣		30.1	24.8																			古墳
21住	ウシ	橈骨・尺骨	R	近位部			噛痕															38.6						奈良以降
21住	ウシ	橈骨	L	近位部ー遠位部			cut															38.9						奈良以降
21住	ウマ	中手骨	R	遠位部			cut																46.9	34.7				奈良以降
21住	ウマ	橈骨・尺骨	R	完存			噛痕, cut													308		37.2	66.6	39.5				奈良以降
11土壙	ウマ	頭蓋骨	LR	上顎骨	L(P234M1) R(P234M12)	M1開始	L:計測	38.5		28.5		30.9																奈良以降
211住	ウシ	踵骨	L				噛痕																47.9			76.6	49.9	奈良以降
211住	ウシ	踵骨	R				噛痕																			75.8	69.1	奈良以降
211住	ウシ	脛骨	R	近位部ー遠位部			噛痕																71.3	50.7				奈良以降
211住	ウシ	中足骨	R	完存																227	56.3	52.3						奈良以降
224住	ウマ	遊離歯	R	上顎	M2	成獣	乱食い									27.2	24											奈良以降
251住	ウマ	頭蓋骨	LR	上顎骨	L(xI23P234M123) R(xI23M234M123)	成獣	雌、LM1膿漏？ L:計測	36.3	23.1	26.7	27.2	25.1	27.7	23.1	24	24.1	25.9	28.6	22.9									奈良以降
312土壙	ウマ	遊離歯	L	下顎	P2	萌出開始		29.6																				奈良以降
312土壙	ウマ	遊離歯	R	上顎	M3	成獣	小型											27.4										奈良以降
328住	ウマ	遊離歯		上顎	M3	成獣												27.4	22.4									奈良以降
333住	ウマ	脛骨	R	遠位部			cut																68.8	41.7				奈良以降
溝5	ウシ	中手骨	R	近位部ー骨幹部																	58.2	35.3						溝奈良以降
溝5	ウマ	中足骨	R	近位部−骨幹部			華奢														41.1	33.9						溝奈良以降
AY15	ウマ	基節骨		完存			噛痕													77.5	49.2	30.2	40.9					グリッドー括
F−14	ウマ	下顎骨	L		(M123)	ad	噛痕									23.1	15.7	28.8	14.5									グリッドー括
BB14	ウシ	基節骨																		52.4	28.9	30						グリッドー括
BB14	ウシ	中手骨	L	近位部−骨幹部			cut、噛痕														54.6	33						グリッドー括
CB6	ウシ	基節骨		完存			内側													57.1	33.5	34						グリッドー括
CB6	ウシ	中手骨	L	完存																199	63.5	39	66.1	36				グリッドー括
CB6	ウシ	中節骨		完存			内側													38	31.8	32.2						グリッドー括
CG9	ウシ	遊離歯	R	下顎	M2	d 若獣										31.4												グリッドー括
CH7	ウシ	中手骨	L	近位部−遠位部																	57.3	32.8						グリッドー括
CQ5	ウシ	上腕骨	L	骨幹部−遠位部			cut、噛痕																80.1	32.3	74.2			グリッドー括
Q13ー3	ウマ	遊離歯	L	上顎	M3	成獣												29.2	21.2									グリッドー括
s19−1	ウシ	遊離歯	R	下顎	P3	成獣				20.3																		グリッドー括
W19ー2	ウマ	遊離歯	R	上顎	P4	老						24.4	24.8															グリッドー括
FB16	ウマ	遊離歯	R	上顎	M1	成獣								24.4	25.2													グリッドー括
FL17	ウマ	中手骨	R	近位部−遠位部			cut													226			45.9	34.9				グリッドー括
FM15	ウマ	下顎骨	L		(P24M12)	成獣		31.8	15.1	26.3	16.1	25.7	16.6	23.6	15	24.4	15.2											グリッドー括
FN16	ウマ	中足骨	L	骨幹部−遠位部																				39.5				グリッドー括
FU16	ウマ	遊離歯	R	下顎	P3	成獣				26.6	16.6																	グリッドー括
一括	ウシ	脛骨	R	骨幹部−遠位部																				43.1				グリッドー括
検出面	ウマ	肩甲骨	L																	92.5			47.9					グリッドー括
地点不明	ウマ	下顎骨	LR		L(P234M123) R(P234M123)	老	乱食い、L:計測			25.9	14.9	24.5	15.7	21.3	14.6	23.8	13.8	30.7	14									グリッドー括
土151ー1	ウマ	遊離歯	R	下顎	M2	成獣										25.9	13.9											グリッドー括

第16表－１　遺構別出土動物遺体一覧

遺構	種	部位	左右	残存状態	数量	歯列	萌出状態	備考
9住	陸獣	椎骨		椎弓　破片	1			cut
	陸獣			骨片	3			
	イノシシ類	胸椎		椎体・椎弓	1			
12住	イノシシ類	尺側手根骨	R		1			
	イノシシ類	遊離歯	L	上顎	1			
	イノシシ類	橈側手根骨	R		1	C	成獣	♂
	ウシ	基節骨			1			
	ウシ／ウマ	椎骨		椎弓　破片	3			噛痕
	ウマ	中手・中足骨		骨幹部　破片	2			
	ウマ	中節骨		完存	2			焼
	シカ	距骨	R		1			
	シカ	脛骨	R	遠位部　破片	1			
	シカ	踵骨	R		1			
	シカ	大腿骨	L	遠位部	1			
	シカ	大腿骨	L	近位部	1			焼
	シカ／イノシシ類			肋骨　破片	3			焼
	ネズミ類	下顎骨	L		1	(I1)		
	ネズミ類	遊離歯	R	上顎	1	I1		
	陸獣			骨片	4			
14住	ウシ	頭蓋骨	R	角	1		成獣	
	ウシ／ウマ			骨片	1			
	不明			骨片	2			
	陸獣	椎骨		破片	1			焼
	陸獣	肋骨		破片	1			
	陸獣			骨片	4			
16住	シカ	距骨	R		1			cut
	陸獣			骨片	2			
17住	シカ	踵骨	R		1			cut
	不明			骨片	1			
21住	イヌ	大腿骨	L	近位部　骨頭	1			
	イヌ	頭蓋骨		頭頂骨、後頭骨	1			
	イノシシ類	寛骨	R	寛骨臼部	1			cut
	イノシシ類	中手・中足骨			1			
	イノシシ類	中節骨			1			
	イノシシ類	中節骨			1			焼
	イノシシ類	脛骨	L	骨幹部－遠位部	1			cut
	ウシ	大腿骨	R	骨幹部	1			噛痕
	ウシ	橈骨・尺骨	R	近位部	1			噛痕
	ウシ	橈骨	L	近位部－遠位部	1			cut
	ウマ	中手骨	R	遠位部	1			cut
	ウマ	橈骨・尺骨	R	完存	1			噛痕、cut
	カモシカ？	寛骨	R	坐骨　破片	1			
	シカ	基節骨			1			
	シカ	上腕骨		骨幹部－破片	1			cut
	シカ	中手骨		近位部－遠位部	1			
	シカ	角		破片	3			
	シカ	遊離歯	L	上顎	1	M2	若	
	不明			骨片	3.5			
	シカ	踵骨	L		1			焼(黒)
22住	ウマ	中心手根骨	L		1			
24住	シカ	足根骨	L	完存	1			
	シカ	中心足根骨	L	完存	1			
	シカ	中心足根骨	R	完存	1			
	シカ	中足骨	L	近位部－遠位部	1			
	不明			骨片	5			
	シカ	足根骨	R	完存	1			
	シカ	中足骨	R	近位部－遠位部	1			噛痕
25住	ヒト	遊離歯	L	上顎	1	I2		
30住	シカ	中足骨		骨幹部　破片	1			
31住	イヌ	大腿骨	L	骨幹部－遠位部	1			
	イノシシ類	上腕骨	L	骨幹部	1			cut、噛痕
	ウシ	下顎骨	R		1	(xxxP234M123)	成獣	M1-3歯根のみ
	ウシ	下顎骨	L		1	(xxxP234M123)	成獣	P234M123歯根のみ
	ウシ	下顎骨	R		1	(P34M123)	成獣	
	ウシ	肩甲骨	L		1			

第16表－２　遺構別出土動物遺体一覧

遺構	種	部位	左右	残存状態	数量	歯列	萌出状態	備考
31住	ウマ	脛骨	R	骨幹部－遠位部	1			
35住	ウシ	橈骨	R	遠位部	1			
	陸獣			骨片	2			
42住	ヒト	脛骨	L	骨幹部	1			噛痕、cut
47住	シカ	尺骨	L		1			
49住	シカ／イノシシ類	椎骨		椎体	1			
	シカ	中足骨	L	近位部－骨幹部	1			噛痕
	不明			骨片	3			
	陸獣			骨片	1			
52住	シカ	尺骨	R	完存	1			
	シカ	中心手根骨	R		1			
	シカ	橈骨	R	完存	1			cut
	陸獣			骨片	2			
59住	イヌ	大腿骨	L	骨幹部	1			焼
	シカ	下顎骨	R		1	(xM2)	５成獣	
	シカ	中足骨		骨幹部　破片	1			
	シカ	中足骨	R	遠位部	1			
	ネズミ類	下顎骨	LR		1			
	不明			骨片	1			焼
	不明			骨片	1			
	陸獣			骨片	1			cut
	陸獣			骨片	2			
65住	ウマ	遊離歯	R	上顎	1	M1?		
67住	シカ	中手・中足骨		遠位部　破片	1			
	陸獣			骨片	1			
68住	イノシシ類	肩甲骨	R		1			cut
	シカ／イノシシ類	寛骨		腸骨部　破片	1			
	不明			骨片	2			
	陸獣			骨片	1			cut
69住	ウシ	橈骨	L	骨幹部	1			
70住	ウマ	脛骨	L	遠位部　破片	1			
	不明			骨片	2			
72住	シカ	踵骨	R		1			
76住	イヌ	尺骨	R		1			
	イヌ	上腕骨	R	遠位部	1			
	イヌ	橈骨	R	骨幹部	1			
77住	シカ	中節骨		完存	1			焼
78住	シカ	基節骨			1			
	不明			骨片	1			
	陸獣	肋骨		破片	1			加工
	陸獣			骨片	4			
80住	イノシシ類	寛骨	R	腸骨部　破片	1			噛痕
	シカ	角			1			加工品
	陸獣			骨片	1			
87住	シカ	中節骨			1			焼
91住	シカ	距骨	L		1			cut
	シカ	脛骨	L	遠位部	1			
	シカ	角		角座	1			cut、落角
	シカ	角		破片	1			
	不明			骨片	1			
94住	シカ	尺骨	L		1			
	シカ	遊離歯	R	下顎	1	P2	成獣	
102住	シカ	中節骨			1			
104住	イノシシ類	上腕骨	R	骨幹部	1			
115住	シカ	足根骨			1			
116住	シカ	尺骨	R		1			
	シカ	橈骨	R	近位部	1			
	不明			骨片	1			
	シカ	中足骨		骨幹部　破片	1			
	不明			骨片	1			
117住	シカ	脛骨	R	遠位部	1			cut
	ヒト	膝蓋骨	L		1			焼
	不明			骨片	2			焼
118住	ウマ	遊離歯	L	下顎	1	I2		
	シカ	尺骨	R		1			

第16表－３　遺構別出土動物遺体一覧

遺構	種	部位	左右	残存状態	数量	歯列	萌出状態	備考
118住	シカ	下顎骨	R		1	(m2)	若獣	
	不明			骨片	1			焼
124住	シカ	角		破片	1			
	シカ	遊離歯	R	上顎	1	P4	成獣	
	シカ／ウシ	大腿骨		骨幹部　破片	1			
	陸獣			骨片	1			焼
	陸獣			骨片	2			cut、噛痕
	シカ	上腕骨	L	遠位部	1			
	陸獣			骨片	1			
131住	シカ	角		破片	1			加工
	シカ	距骨	L		1			
132住	ウマ	遊離歯	R	上顎	1	P2	成獣	
	シカ	距骨	L		1			
	シカ	踵骨	L		1			
	シカ	踵骨	R		1			
	シカ	踵骨	R	完存	1			
	シカ	中足骨	L	近位部－骨幹部	1			cut
158住	ウシ	遊離歯	L	下顎	1	I3	成獣	
	シカ	上腕骨	R	遠位部　破片	1			
	ウマ	遊離歯		下顎	1	臼歯破片		
179住	イノシシ類	末節骨			1			ⅡかⅤ
	シカ	角		破片	1			
	陸獣			骨片	3			
183住	シカ	中手骨	L	骨幹部－遠位部	1			
	シカ	中足骨	L	近位部－骨幹部	1			
184住	シカ	中手･中足骨	L	遠位部	1			
	シカ	中心足根骨	L		1			
185住	ウシ	踵骨	L		1			
191住	イノシシ類	遊離歯	L	上顎	1	I3		
	ウマ	脛骨	R	骨幹部　破片	1			
	ウマ	遊離歯	R	上顎	1	i2?		cut
	シカ	寛骨	L	腸骨部　破片	1			
	シカ？	下顎骨	R	間節突起	1			cut
	陸獣			骨片	5			
	ウシ	遊離歯	L	下顎	1	I3		
201住	イノシシ類	頭蓋骨	L	上顎骨	1	(P34M1)	Ⅱ　若獣	
	イノシシ類	遊離歯		臼歯　破片	1		未萠出	
	陸獣			骨片	1			cut
204住	イノシシ類	基節骨			1			
	不明			骨片	1			
207住	ウシ	遊離歯	R	上顎	1	P4	老	
	不明			骨片	3			
211住	ウマ	遊離歯		破片	2	I	老	
	不明			骨片	5			
	陸獣			骨片	10			
	ウシ	足根骨	R		1			
	ウシ	踵骨	L		1			噛痕
	ウシ	踵骨	R		1			噛痕
	ウシ	距骨	R		1			噛痕
	ウシ	脛骨	R	近位部－遠位部	1			噛痕
	ウシ	脛骨	L	近位部－遠位部	1			cut
	ウシ	踵骨	L		1			
	ウシ	大腿骨	L	近位部－遠位部	1			噛痕
	ウシ	大腿骨	R	近位部－遠位部	1			
	ウシ	中心足根骨	R		1			
	ウシ	中節骨		近位部　破片	1			
	ウシ	中足骨	R	完存	1			
	ウシ	頭蓋骨	L	角　破片	1			
	ウシ	腰椎			2			
	ウシ／ウマ	大腿骨		遠位部　破片	1			焼
212住	イノシシ類	末節骨			1			
214住	イノシシ類	踵骨	R		1			焼
	シカ	手根骨　Ⅱ－Ⅲ	L		1			
	シカ	中足骨	L	近位部－遠位部	1			
	シカ	中心足根骨	L		1			

第16表－４　遺構別出土動物遺体一覧

遺構	種	部位	左右	残存状態	数量	歯列	萌出状態	備考
214住	イノシシ類	中手骨　Ⅲ	L	近位部－遠位部	1			
	シカ	上腕骨	L	骨幹部－遠位部	1			cut
	シカ	中手骨	L	完存	1			cut
224住	ウマ	遊離歯	R	上顎	1	M2	成獣	乱食い
227住	イノシシ類	遊離歯	R	上顎	1	P3		
	ウマ	中足骨	R	近位部－骨幹部	1			cut
	不明			骨片	2			
228住	ウシ	中手骨	R	骨幹部	1			cut
230住	ウシ	手根骨　Ⅱ-Ⅲ	L		1			
235住	シカ？	肩甲骨	R	破片	1			
	ウシ	基節骨			1			
	ウシ/ウマ	椎骨		椎体　破片	1			
242住	シカ	尺骨	R		1			
	シカ	橈骨	R	近位部－遠位部	1			
	陸獣			骨片	1			
251住	ウマ	頭蓋骨	LR	上顎骨	1	L(x123P234M123) R(x123M234M123)	成獣	雌、LM1膿漏？
266住	ウシ	遊離歯	R	上顎	1	臼歯　破片		
	シカ	遊離歯	R	上顎	1	P3	成獣	
	陸獣			骨片	2			
288住	シカ	上腕骨	L	遠位部　破片	1			
300住	ウマ	寛骨	L	坐骨部、寛骨臼部	1			
	シカ	基節骨		骨幹部－遠位部	1			
	陸獣			骨片	1			
305住	シカ	遊離歯	R	下顎	1	P3	未崩出	
307住	ウシ	基節骨		近位部－遠位部	1			
313住	イノシシ類	遊離歯	R	上顎	1	M3	成獣	
	シカ	上腕骨	R	遠位部	1			cut
	シカ	中節骨		先端　破片	1			
	陸獣			骨片	8			
314住	シカ	寛骨	L	坐骨部　破片	1			
	シカ	距骨	L		1			
316住	イノシシ類	下顎骨		歯槽　破片	1			
	シカ	角		破片	1			
	シカ？	中足骨		近位部　破片	1			
	不明			骨片	2			
	陸獣	肋骨		破片	2			
	陸獣			骨片	4			
317住	ウシ	基節骨		破片	1			cut
	シカ/イノシシ類	肋骨		破片	2			
	陸獣			骨片	3			
	陸獣			骨片	1			cut
318住	シカ	中手骨	L	遠位部	1			cut
	不明			骨片	1			
	陸獣			骨片	3			
319住	ウシ／ウマ			骨片	1			
	シカ	基節骨		破片	1			
320住	ウシ	橈側手根骨	R		1			
	ウシ	肩甲骨	L		1			
	不明			骨片	2			
	陸獣			骨片	1			cut、噛痕
322住	シカ	遊離歯	L	上顎	1	M3	成獣	
327住	イノシシ類	距骨	R		1			
	イノシシ類	遊離歯		下顎	1	Ⅰ　破片		
	ウシ	大腿骨	L	骨幹部　破片	1			
	シカ	基節骨		近位部	1			cut、噛痕
	不明			骨片	10			
	陸獣			骨片	1			焼
328住	ウマ	遊離歯		上顎	1	M3	成獣	
333住	ウシ／ウマ			骨片	3			cut
	シカ	遊離歯	L	上顎	1	P3	成獣	
	ウマ	脛骨	R	遠位部	1			cut
	不明			骨片	1			
	陸獣			骨片	1			焼
337住	シカ	中心足根骨	L		1			

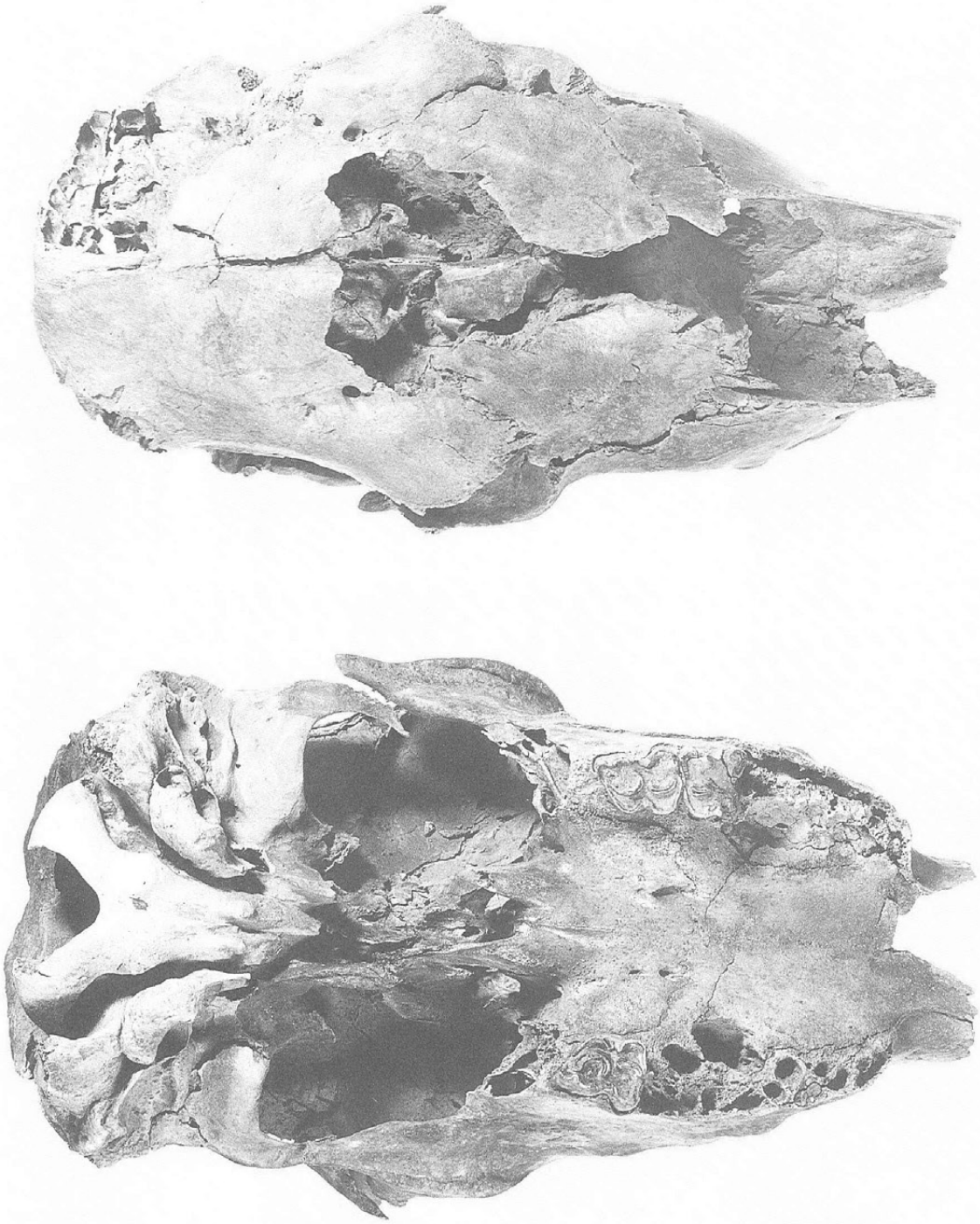
第16表－５　遺構別出土動物遺体一覧

遺構	種	部位	左右	残存状態	数量	歯列	萌出状態	備考
341住	シカ	踵骨	L		1			
	陸獣			骨片	2			
409住	シカ	基節骨			1			
410住	シカ	中手骨	L	近位部　破片	1			
	陸獣			骨片	1			
	シカ	距骨	R		1			cut
	陸獣			骨片	1			焼
412住	ウシ	距骨	R		1			cut
	ウシ	中節骨			1			cut
413住	シカ	基節骨		破片	1			
	シカ	中心手根骨	L		1			
	不明			骨片	2			
417住	イノシシ類	踵骨	R		1			
458住	ウシ	橈側手根骨	L		1			
	シカ	角		破片	1			cut
	陸獣			骨片	1			
	ウシ／ウマ			骨片	6			
	陸獣			骨片	2			
468住	シカ	中手骨	R	近位部－骨幹部	1			cut
477住	ウシ	踵骨	R		1			cut
	ウシ	中節骨			1			cut
10土坑	不明	腰椎		椎体	1			
11土坑	ウマ	下顎骨	LR		1	L(P234M1) R(P234M1)	M1開始	
	ウマ	下顎骨	LR		1	L(I12) R(I12)	I12未崩出	
	ウマ	頭蓋骨	LR	上顎骨	1	L(P234M1) R(P234M1)	M1開始	
47土坑	ウマ	中節骨		破片	1			
82土坑	イヌ	下顎骨	LR	完存	1	L(I123CP1234M12) L(I123CP1234M12)	成獣	
	イヌ	環椎		椎体･椎弓	1			
	イヌ	基節骨			3			
	イヌ	胸椎		椎体･椎弓	5			
	イヌ	距骨	L		1			
	イヌ	脛骨	L	近位部－遠位部	1			
	イヌ	脛骨	R	骨幹部－遠位部	1			
	イヌ	頚椎		椎体･椎弓	5			
	イヌ	肩甲骨	L		1			
	イヌ	肩甲骨	R		1			
	イヌ	軸椎		椎体･椎弓	1			
	イヌ	尺骨	L		1			
	イヌ	尺骨	R		1			
	イヌ	踵骨	L		1			
	イヌ	上腕骨	R	近位部－遠位部	1			
	イヌ	上腕骨	L	骨幹部－遠位部	1			
	イヌ	大腿骨	R	骨幹部－遠位部	1			
	イヌ	大腿骨	L	骨幹部－遠位部	1			
	イヌ	中足骨　Ⅱ	L		1			
	イヌ	中足骨　Ⅱ	R		1			
	イヌ	中足骨　Ⅲ	L		1			
	イヌ	中足骨　Ⅲ	R		1			
	イヌ	中足骨　Ⅳ	L		1			
	イヌ	中足骨　Ⅳ	R		1			
	イヌ	中足骨　Ⅴ	L		1			
	イヌ	中足骨　Ⅴ	R		1			
	イヌ	中節骨			3			
	イヌ	頭蓋骨	LR	完存、上顎	1	L(I123CP1234M12) L(I123CP1234M12)	成獣	
	イヌ	橈骨	L	近位部－骨幹部	1			
	イヌ	橈骨	R	近位部－遠位部	1			
	イヌ	腓骨		骨幹部　破片	1			
	イヌ	末節骨			1			
151土坑	ウシ	肩甲骨	L		1			
312土坑	ウマ	遊離歯	L	下顎	1	P2	崩出開始	
	ウマ	遊離歯	R	上顎	1	M3	成獣	小型

上：頭蓋骨底面観、下：下顎骨
第590図　屋代遺跡群出土のウマ頭骨（約35％）

１．左肩甲骨、２．右橈・尺骨、３．右脛骨、４．右脛骨・距骨、５．右中足骨、６．右中足骨、７．基節骨、８．中節骨、９．距骨

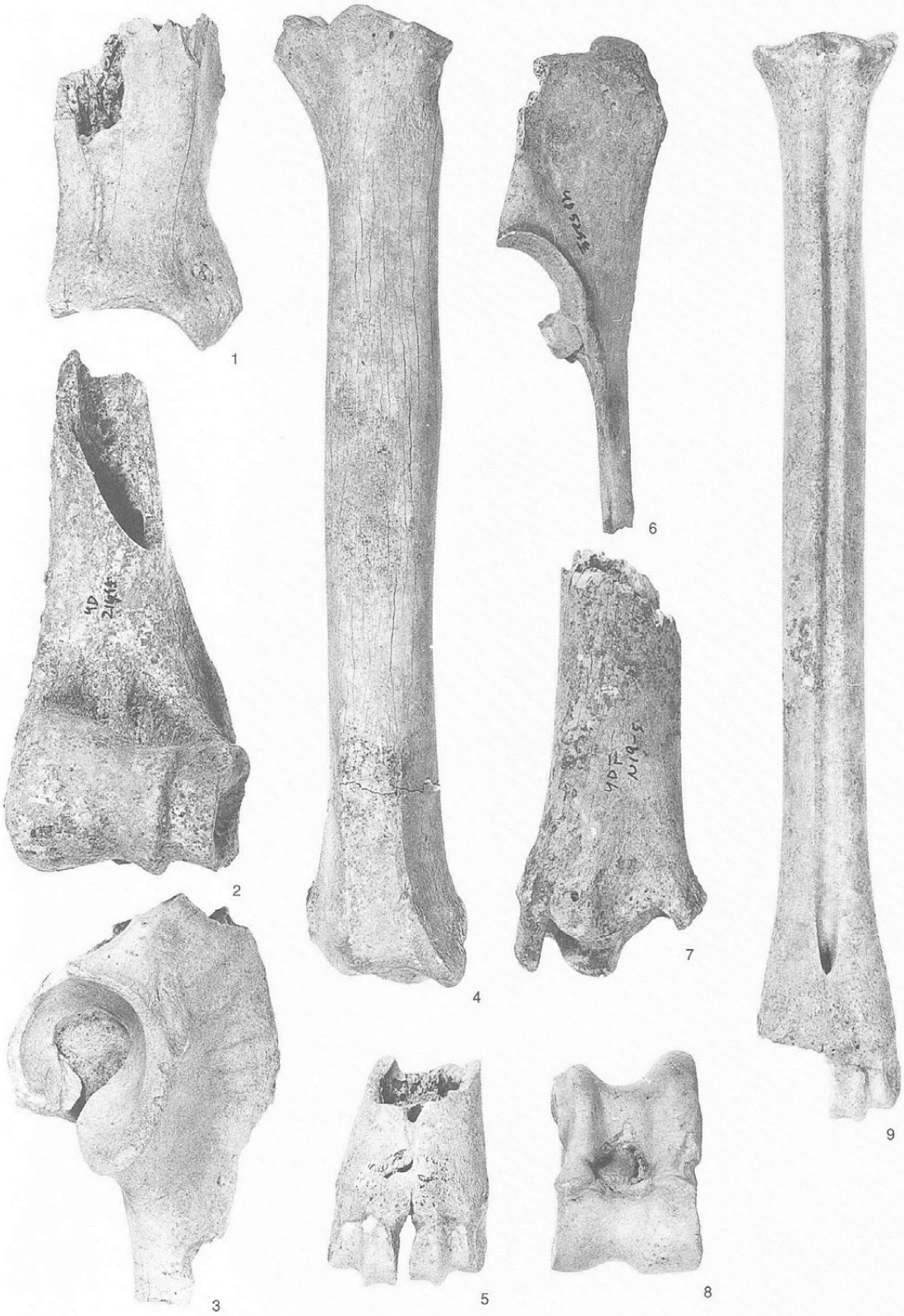
第591図　屋代遺跡群出土のウマ四肢骨（約40％）



上：上面観、下：底面観
第592図　屋代遺跡群出土のウシ頭蓋骨（約35％）

１．左肩甲骨、２．左上腕骨、３．左大腿骨、４．左橈骨近位部、５．右距骨、６．右脛骨、７．左中手骨、８．左中手骨

第593図　屋代遺跡群出土のウシ四肢骨（約40％）



１．イノシシ類右肩甲骨、２．シカ左上腕骨、３．シカ左寛骨、４．シカ右橈骨、
５．シカ右中足骨、６．シカ右尺骨、７．シカ右脛骨、８．シカ左距骨、９．シカ左中足骨
第594図　屋代遺跡群出土のシカ・イノシシ類四肢骨（約75％）

1．イノシシ類右上腕骨、2．イノシシ類左寛骨、3．イノシシ類左脛骨、4．イヌ左上腕骨、
5．ヤギ・ヒツジ左尺骨、6．イヌ左大腿骨、7．イヌ左脛骨、8．ヒト左上腕骨、9．ヒト左脛骨
第595図　屋代遺跡群出土のその他動物遺体（約75%）

第7章　まとめ

第1節　出土土器による時期区分

今回の調査で検出された土器は、コンテナ約400箱以上に及んでおり、実測を行った資料だけでも約2,000点を超えている。検出された遺構は、同一面で複雑に重複しているため、これらが出土する遺構を層位的にとらえることは難しく、遺物が混在しているため同一遺構のセットとして捉えることのできる資料も少ない。したがって、土器の形態変化とセット関係を中心に分類したが問題も多い。なお区分については、(財) 長野県埋蔵文化財センター (以下県埋文センター) によって実施された更埴条里遺跡・屋代遺跡群の編年によるところが大きい。

Ⅰ　期

弥生時代中期栗林式土器の終末と思われる一群で、壺の胴部文様帯は消え、頸部文様帯も縄文の施文は消滅し、沈線だけで構成されている。

Ⅱ　期

弥生時代後期箱清水土器の終末から、小型精製土器群が消滅し、屈折脚の高杯（和泉的高杯）が盛行する段階までの一群である。

箱清水系土器群のあり方と屈折脚の高杯の出現から、4段階に細分した。

a段階

箱清水系土器群だけで構成される段階である。土師系土器群が伴わないと明言できない点、b段階の箱清水系土器群と形態的に分類が難しい点から、今回は箱清水期として分けなかった。80・419・469号住居跡などが含まれ、高杯の脚部が短く口縁部の屈曲が弱い点、壺の胴部の張りが大きいなど新しい様相を示しているが、箱清水式土器としてなんら遜色はない。

b段階

箱清水系土器群と土師系土器群で構成される段階で、箱清水系土器群に、小型高杯・B類のS字状口縁台付甕・東海系の高杯・ヒサゴ壺などが伴うが、小型精製土器群はほとんど出現しない段階である。代表的な416号住居跡を見ると、箱清水系土器である高杯の杯部は赤色塗彩が行われていないが、脚部の透かしが矢形になる点などは80号住居跡の高杯と共通している。箱清水系土器群が主体をなす遺構と、客体的な遺構がある。

c段階

箱清水系土器群が消滅し、土師系土器群だけで構成される段階である。箱清水系土器群が姿を消し、小型精製土器群が出現する。C類のS字口縁甕、脚部が大きく開く小型高杯などが伴い、甕・壺の胴部は球形胴となり、口縁は、くの字状に外反している。131・421号住居跡に代表されるが、甕の形態や赤色塗彩がある点など131号住居跡は古い様相を示しており、細分が可能と思われる。また、7号A住居跡からは、小型高杯と共に、北陸系の口縁部外面に擬凹線を施文した甕なども出土している。

d段階

いわゆる和泉的高杯である屈折脚高杯が出現し、盛行する段階である。小型精製土器群は退化した小型丸底土器を除き消滅し、台付甕も姿を消す。検出できた遺構が少ないため明確ではないが、461・

462号住居跡に代表される。屈折脚の高杯脚部は筒形から裾部がＬ字形に開くもの、筒部の下が広がり裾部がハの字状に開くものなど多様であるが、盛行する時期に比べミガキが粗い。また、杯部が湾曲する鉢状のものもすでに出現している。小型丸底土器のミガキは省略され、胴部に最大径を持つようになる。高杯の変化から、古・新に細分が可能である。

Ⅲ　期

須恵器が登場し、屈折脚の高杯の衰退が始まって、杯が増加する段階から、古墳時代的様相がほぼ消滅する段階までの一群である。

屈折脚の高杯の有無、甕の長胴化傾向、須恵器の変化などから３段階に細分した。

ａ段階

須恵器が出現し、屈折脚の高杯が衰退する段階で、カマドの構築が始まる。内面黒色処理された土師器の杯が出現し、杯は数量的に増加して器形の分化が始まる。甕・壺は長胴化の傾向を示しており、有段口縁が姿を消す。大型の甑なども登場する。当該期の住居は少ないが、117号住居跡は良好な資料で、ＴＫ216併行期と思われる須恵器の高杯が出土している。杯は底部から湾曲し口縁端部が内湾気味になるものが多いが、外反するものや、体部下半で屈曲する器形も含まれている。高杯は退化した屈折脚の高杯が残っている。甕は長胴化が始まり、器面調整のハケも間隔の粗いものが見られる。

ｂ段階

屈折脚の高杯は消滅し、杯は体部で屈曲するものが主体をなす段階である。高杯は、脚部がハの字状に短く開くものに変わる。高杯・杯の多くはていねいにヘラミガキされており、内面黒色処理が行われる場合が多い。甕の長胴化は進み、口縁部に最大径を持つものが現れる。良好な資料に恵まれないが、66・123・132・229・280号住居跡などが含まれる。杯はａ段階からの影響を残すものも含まれるが、口縁部が大きく外反するものが主体をなす。高杯は口縁部が直線的に開き、脚部に透かしを持つなど、須恵器からの影響を感じさせる。123・229号住居跡は、口縁部が外反する杯が減少し小型化が見られる点や、高杯も長脚化していることから新しい様相を示しているといえる。

ｃ段階

古墳時代的な土器群と古代的土器群で構成される段階である。須恵器は食膳具に古代的な様相が顕著に現れるが、土師器は古墳時代的様相を残すものが多い。しかし、小型化の傾向にあり、器面の整形もヘラケズリの痕跡を残すものが多く、平底状の器形が出現する。87・231・277・413号住居跡などが含まれる。土師器の杯は口縁部が外反するものはほとんど姿を消し、口径も12～13cm前後の小型のものが主体をなす。須恵器の杯は、小型で受け部を持たないものや、大型で高台を持つ器形が出現する。杯蓋は小型のものは内面にかえりを持つものが多く、大型でかえりを持たないものも含まれる。土師器の高杯には長脚のものに、口径10cm前後の小型のものが加わる。甕の長胴化はさらに進み、ヘラケズリで調整するものが増え、口縁部がくの字状に開く北武蔵型の甕もこの段階から見られる。

Ⅳ　期

古墳時代的な様相は姿を消し、古代土器で構成される段階である。須恵器を中心に食膳具の整形方法の変化から、３段階に細分した。

ａ段階

食膳具は須恵器が主体となる段階で、土師器の杯は非ロクロとロクロ調整が混在している。須恵器杯の底部は基本的にヘラ切りであるが、糸切りもわずかに含まれる。高杯はほとんど姿を消す。良好

な資料に恵まれないが、78・251・442号住居跡などが含まれる。須恵器杯は底径が大きく体部が直線的に開くものが主体をなしており、高台を持つ箱型の杯は器形の分化が始まっている。高杯に替わって高盤が出現している。土師器の長胴化した甕にはほとんど変化は見られない。

b段階

杯の底部調整は基本的に糸切りで、灰釉陶器が伴う段階で、ロクロ甕が出現する。56・159・160・271・286・319号住居跡など当該期の住居は多いが、c段階との区分があいまいなため問題も多い。土師器杯の底部は糸切りであるが、糸切りの後に、手持ちや回転のヘラケズリを施すものも多い。こうした調整は須恵器が衰退するc段階でも見ることができる。須恵器杯は底部が糸切りで底径が小さくなる。土師器の椀や皿が登場し、甕はロクロ調整され底部は丸底で砲弾型になり、ハケが施された甕はほとんど見られない。

c段階

食膳具の主体が土師器に替わり、軟質の須恵器が増える段階で、268・309号住居跡などが含まれる。土師器の杯は器高が低くなる傾向を示し、口径の小さなものが増えるが、b段階との大きな違いは見られない。須恵器の杯は体部の湾曲が大きくなり、箱型の杯や杯蓋は姿を消す。墨書を持つ土器が増え、b段階は判読できない記号的な墨書が多かったのに対して、漢字が書かれたものが多い。北武蔵型の甕の口縁部はコの字状になる。162・221号住居跡は、杯がいわゆる「かわらけ」状で、羽釜を持つことから、c期の他の住居とはかなり時間差を持つ。

V　期

中世を一括した一群で、住居跡は検出されていないが井戸などが確認されており、14世紀から15世紀の磁器や内耳土器、珠洲系の擂り鉢などが出土している。

限られた時間の中、整理上の必要性に迫られ十分な検討を行わないまま区分したもので、問題点も多い。

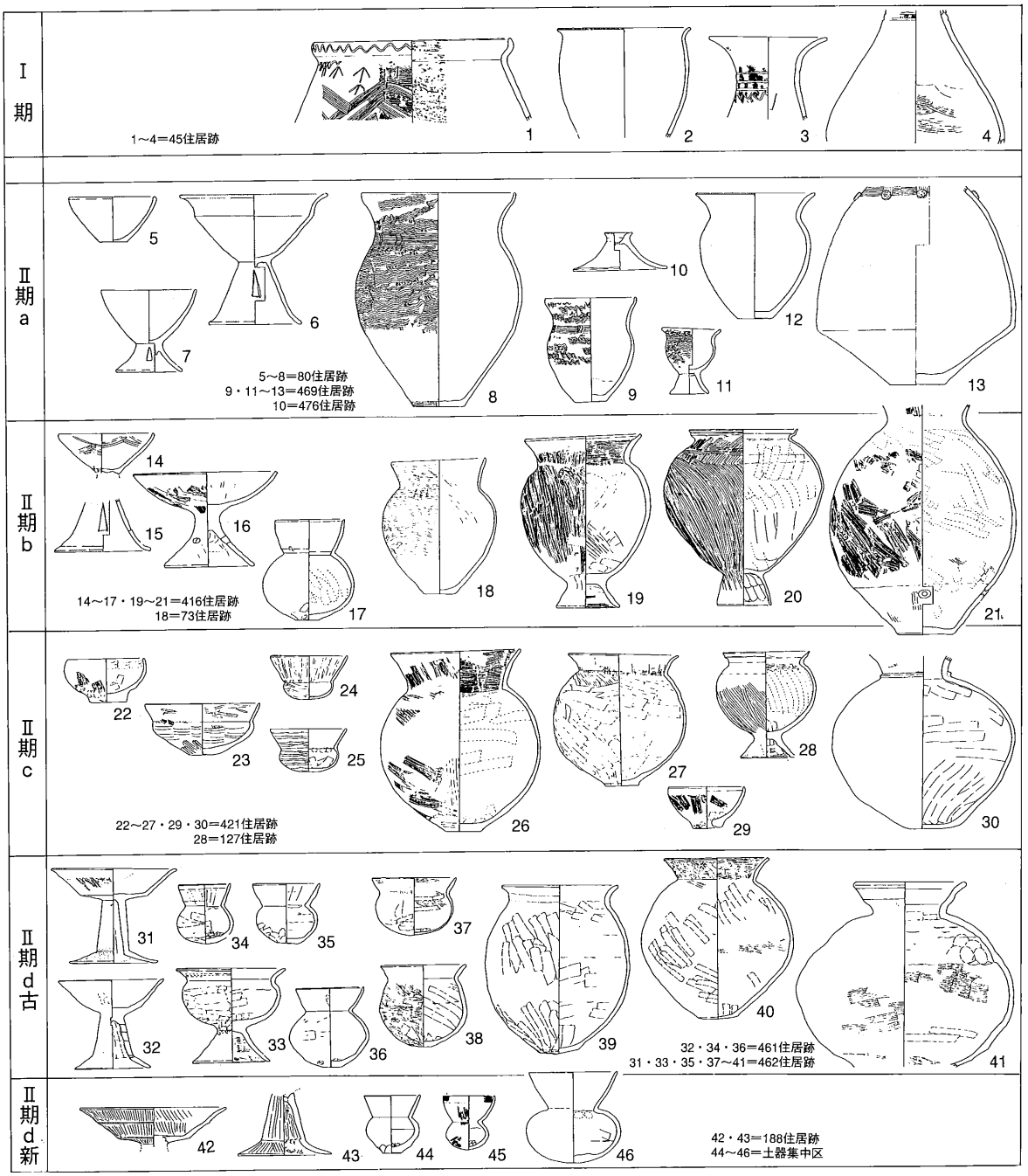
I期は栗林II式の最も新しい段階と思われるが、これに続く吉田式の段階から箱清水式の古い段階の遺物はほとんど出土していない。特に吉田式段階の遺物は更埴市ではほとんど検出されておらず、空白部分となっている。

II期はa段階を弥生時代後期の箱清水式期として、b段階以下とは別に扱うべきとも考えられるが、箱清水式とする土器の変化を捉えることができなかったため、今回は区別しなかった。今後周辺の調査を含めて検討することが必要である。b段階は実年代を充てるとすれば、416号住居跡のS字甕などから、3世紀末から4世紀初頭と考えられ、県埋文センター更埴条里・屋代遺跡群の土器編年（以下屋代編年）の古墳1期にほぼ併行する。c段階は小型丸底土器や甕から4世紀前半から中葉と考えられ、屋代編年の古墳2期にほぼ併行する。d段階は屈折脚の高杯や小型丸底土器から、4世紀後半から5世紀前半が考えられ、屋代編年の古墳3・4期に併行する。高杯の杯部が小型で、調整も粗いものが多い古相と、高杯の器形が多様化し、ていねいなミガキが施される新相に分けることが可能と思われるが、新相を示す遺構はほとんど検出されていない。

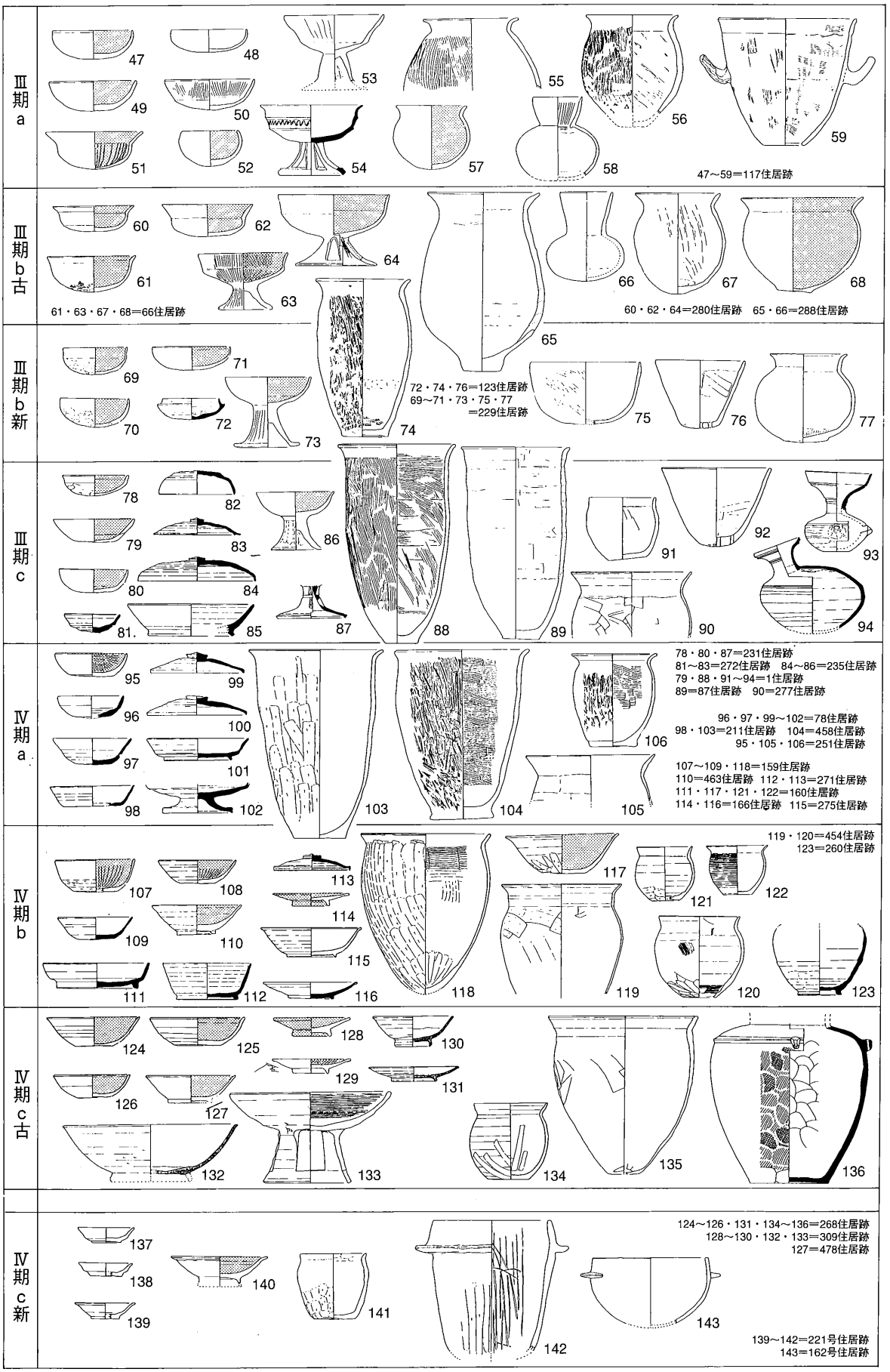
III期a段階は、カマドが出現する段階で、初期須恵器の存在から5世紀中葉から6世紀初頭が考えられ、おおむね屋代編年の古墳5・6期に併行する。b段階は実年代を与える資料に乏しいが、6世紀前半から7世紀初頭が考えられ、おおむね屋代編年の7・8期に併行する。土師器の高杯と杯の変

化から、66・280号住居跡を古相、123・229号住居跡を新相と見ることができる。ｃ段階は須恵器杯蓋を中心とした変化から、７世紀前半から８世紀初頭が考えられ、おおむね屋代編年の古代０・１期と２期の前半に併行する。

Ⅳ期ａ段階は糸切り底の普及が８世紀中葉からとすれば、８世紀前半から後半と考えられ、屋代編年の２期後半から３・４期に併行する。ｂ段階は灰釉陶器が含まれる点などから、８世紀末から９世紀中葉が考えられ、屋代編年の５・６期と７期の前半に併行する。ｃ段階は仁和の洪水砂を覆土に持つ住居の存在から、９世紀後半の遺構と考えられ、屋代編年の７期後半以降に併行する。ただ、羽釜を持つことから、10世紀後半から11世紀初頭と思われる162・221号住居跡を除けば、ｂ段階と大きな変化はなくほとんどが９世紀の範疇に納まるものと思われる。



第596図　土器編年案１



第597図　土器編年案2

第２節　集落の変遷

自然堤防上に展開する屋代遺跡群では、弥生時代中期から中世の遺構がほとんど断絶することなく営まれていたことはすでに知られている。今回の調査でも420棟を超える住居跡が、長さ約500m、幅十数mの調査区内から検出された。ここでは、（財）長野県埋蔵文化財センター（以下県埋文センター）による上信越自動車道（高速道）の調査成果を踏まえて、集落の時間的変遷について概観したい。

弥生時代中期（Ⅰ期）

２棟の住居跡がＡ地区から検出されている。いずれも自然堤防北側縁辺部で、４号住居跡は方形、45号住居跡は円形と思われる。屋代遺跡群では、高速道西側の大境遺跡・荒井遺跡から栗林式以前の住居跡が検出されており、すでに居住域としての土地利用が始まっていたことが知られているが、その状況は散在的で、栗林式の最終段階まで変わっていない。

弥生時代終末期から古墳時代前半（II期）

50棟以上が検出されている。これらを、土器の分類に従い、箱清水系土器群だけのａ、両者が共存するｂ、箱清水系土器群を持たないｃ、屈折脚高杯が伴うｄ段階に分類した。

ａ段階はＡ・Ｂ区を中心にＣ区にまで広がっており、集落の拡大が顕著になる。特に集中する地点はないが、125・449号住居跡のように一辺が７ｍを超える住居が検出されている。

ｂ段階は５棟が検出されており、うち３棟はBEグリッド付近にまとまっている。Ｇ区から検出されている337号住居跡は、高速道の調査地点で検出されている住居跡と群をなすものと思われる。

ｃ段階はＡ～Ｃ地区で検出されており、東側と西側の２群に分けられる。小単位集団の存在も考えられるが、重複する住居跡もあり、さらに検討が必要である。

ｄ段階の住居跡は３棟で、森・篠ノ井線部分から１棟、ＤＩグリッド付近から２棟検出されている。また、Ｄ区西端からは、祭祀遺構も検出されており、小単位の集落の存在は推測される。しかし、ｄ段階の住居跡は城ノ内遺跡・大境遺跡・荒井遺跡で多く検出されており、集落の中心は高速道の西側に移った可能性がある。

古墳時代後半（III期）

100棟ほどの住居跡が検出されており、調査区内全域に広がっているが、依然としてＡ～Ｃ区に集中している。出土遺物は変化の乏しい甕が主体をなしており、細分が可能な住居は少ないが、カマドが出現した５世紀中葉から６世紀初頭のａ、６世紀前半から７世紀初頭のｂ、７世紀前半から末のｃ段階に細分を行った。

ａ段階に帰属する住居は４棟で、Ａ～Ｃ区から検出されている。II期ｄ段階からの減少傾向が続いており、集落の中心からは外れている。

ｂ段階はＡ～Ｃ区に集中する傾向は続くが調査区全体に住居が広がり、数も急増している。ただ、Ｄ区付近に約100mの空白部分があり、大きく東西に二分される。

ｃ段階は調査区全体に広がっており、Ａ～Ｃ区に集中する傾向はなくなるが、ｂ段階同様Ｄ区付近に空白部分がある。古墳時代的様相が消滅するまでを当該期としたため、本来古代とすべき住居も含まれている。県埋文センターの調査では７世紀後半からの木簡が検出されており、官衙に関連する施設の存在が想定され、６号・７号掘立柱建物跡も当該期までさかのぼる可能性がある。

古代（Ⅳ期）

150棟ほどの住居跡が検出されており、分布の中心はＥ～Ｇ地区に変わっている。8世紀初頭から後半のａ、8世紀末から9世紀中葉のｂ、9世紀後半以降のｃ段階に分類した。

ａ段階はＥ～Ｇ区に集中する傾向が特に顕著である。6号・7号掘立柱建物跡との関係が注目されるが、竪穴住居との隔絶は見られない。84号土坑では建築部材が井戸枠に転用されており、廃絶した建物の部材を利用しているとすれば、当該期を前後する時期の建物と考えられる。かなり整った部材であり、床を支えたと思われる渡り腮の刻みなども見られることから、高床の大型建物の存在が想定できる。また、458号住居跡は一辺7ｍを超える規模を持ち、建て替えと思われる3棟が重複している。周辺に当該期の住居はなく、特別の機能を持った竪穴住居と考えられる。

ｂ段階は集落の規模が最も大きくなる時期で、約60棟の竪穴住居が確認されている。大型の竪穴住居の存在は認められないが、1・3・4・5号の掘立柱建物跡4棟も当該期と思われる。掘立柱建物跡はＢ・Ｅ・Ｆ地区から検出されており、竪穴住居とのセット関係を指摘できる。

ｃ段階は住居の減少傾向が始まる。多くは9世紀後半の住居で、Ｃ地区に集中する部分があり、9号掘立柱建物跡とのセット関係が考えられる。9世紀末の仁和の洪水(888?)とされる砂層を覆土に持つ住居は、206・268・269・405号の4棟しかなく、広範囲に散在している。洪水後に構築されたと思われる住居は162・221号住居跡など数棟で、すでに集落の中心は移っている。

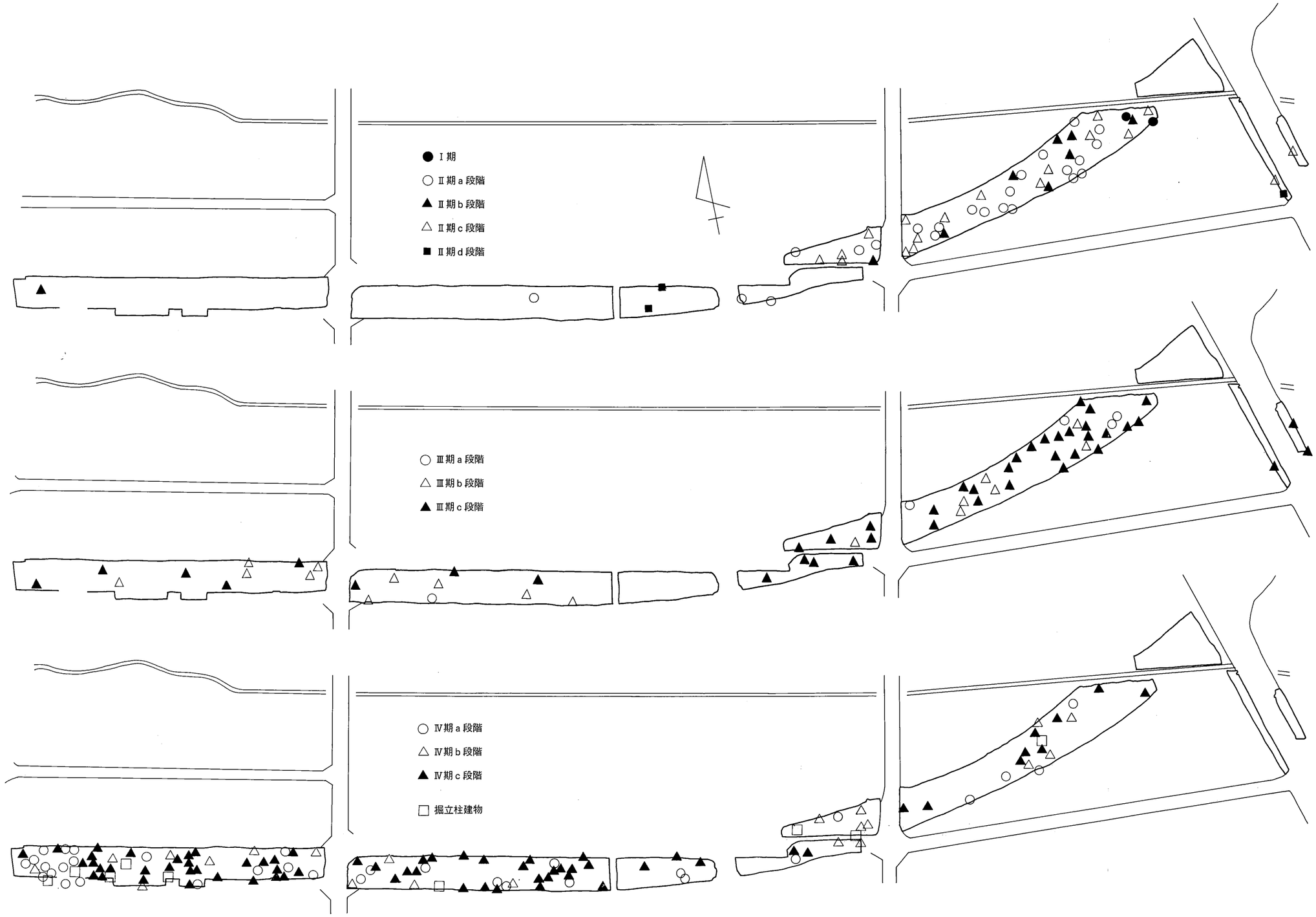
中世（Ⅴ期）

中世に入ると自然堤防は居住域としての利用が再開される。今回の調査では検出されていないが、県埋文センターの調査では、Ｇ区の南側で13世紀の集落が検出されている。14世紀から15世紀の井戸と思われる土坑は、調査地点でも確認されており、集落の拡大が想定される。また、Ｆ区7号溝・Ｇ区9号溝のような城館跡とされる方形区画溝も検出されている。

集落の変遷について概観を記したが、遺構が複雑に重複する検出状況からして、一部に誤認しているものも含まれていると思われる。しかし大きな流れはつかめたものと考えられる。以下注目される点について簡単に触れたい。

屋代遺跡群に集落が営まれるのは、縄文時代前期にまでにさかのぼることは、県埋文センターの調査で明らかになっているが、現在の自然堤防が形成され、居住が始まるのは、縄文時代晩期の、いわゆる浮線文系・条痕文系土器群の時期である。遺構の存在は確認していないが、かなり広範囲から散在的に遺物が出土している。今回の調査では検出されていないが、城ノ内遺跡・大境遺跡では、伊勢宮・新諏訪町段階の住居跡が確認されている。しかし単独で存在しており、集落としては存在していない。

弥生時代中期終末になると集落の展開が始まる。しかし、遺物の部分でも触れたとおり、弥生時代後期前半の遺構はほとんど検出されていない。弥生時代終末からは集落がほとんど途絶えることなく9世紀まで続いている。集落の広がりを見ると、東側から西側に広がって行くように見えるが、自然堤防北側縁辺部から南側へ広がっていると考えるのが妥当であろう。現在の自然堤防は東流する下条堰が北側縁辺部にあたり、これより北側は旧河道部にあたる。自然堤防の北側縁辺部を調査すると、5世紀前半の住居跡は北側が旧河道で切られており、少なくとも5世紀前半の自然堤防は、現在の北側縁辺部よりさらに北側に伸びていたことがわかる。その後、自然堤防は北側が削られて南側へ広



第598図　集落の変遷図

がっており、集落も南側へと広がっている。今回の調査地点では、５世紀の中頃に住居の減少が見られるが、城ノ内遺跡・大境遺跡では多数の住居が確認されており、集落の中心が今回の調査地点より西側に移っているものと思われる。

７世紀には自然堤防の北側に集中する傾向がなくなり、８世紀には中心が南に移る。９世紀前半から中頃に集落は最大規模となるが、その後は縮小し、仁和の洪水があったとされる９世紀末にはわずかの住居を残し、自然堤防南側の水田地帯の微高地に移って行く。10世紀以降は数棟の住居が散在する程度で、自然堤防の居住地としての役割は一旦とだえる。こうした集落の移動は、更埴条里水田と呼ばれる広大な水田地帯の開発・運営と、密接な関係の上に成り立っていることは言うまでもない。

中世になると再び集落の展開が始まる。県埋文センターの調査によると13世紀にはＧ区の自然堤防南側で集落が形成されており、14世紀から15世紀になると、城ノ内遺跡・大境遺跡、今回調査を行ったＦ区・Ｇ区付近にまで広がっている。ただ、14世紀から15世紀の遺構は城館と考えられる方形区画溝が主体をなしており、一般的な集落との関係は定かではない。

県埋文センターによって実施された上信越自動車道の調査では、国符・郡符木簡を始め多数の木簡が出土しており、自然堤防上における官衙に関連する施設の存在が想定されている。県埋文センターの調査で検出されたST4201や今回の調査で検出された６号・７号掘立柱建物跡はそうした施設の一部の可能性が高い。更埴市教育委員会では、平成８年から官衙関連施設の確認を目的に、周辺遺跡の調査を実施しているが、現在までのところ確認されていない。

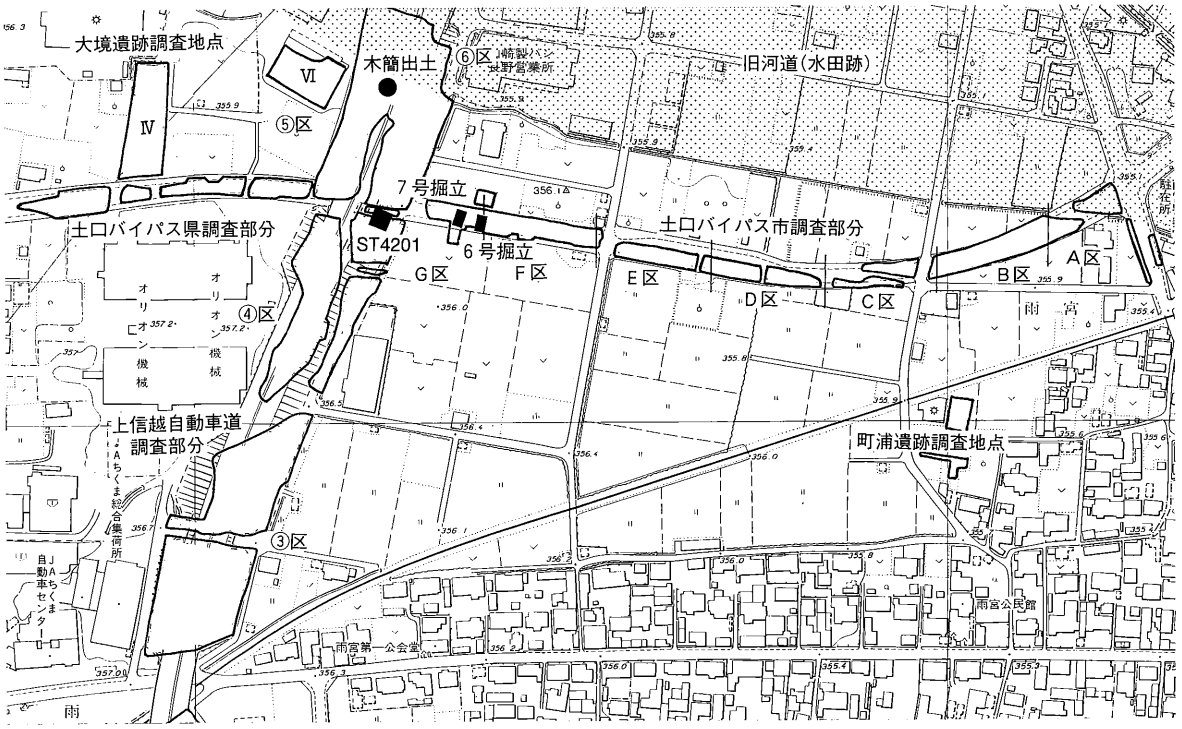
第１節・第２節　　引用・参考文献

更埴市教育委員会　1994　『大境遺跡Ⅳ・Ⅴ』

長野県埋蔵文化財センター　1998　『上信越自動車道埋蔵文化財調査報告　25　更埴市内その４』

長野県埋蔵文化財センター　1999　『上信越自動車道埋蔵文化財調査報告　26　更埴市内その５』

長野県埋蔵文化財センター　2000　『上信越自動車道埋蔵文化財調査報告　28　更埴市内その７』



第599図　屋代遺跡群調査位置図（１：5,000）

第3節　掘立柱建物の性格をめぐって

木　下　正　史

今次調査区の西端は、上信越自動車道建設に伴う屋代遺跡群発掘地の東に近接する場所であって、7世紀後半から8世紀前半の木簡百数十点や、多量の祭祀遺物が出土したことで注目された地点から、東南へ100mほどのところである。関連する遺構の発見によって、遺跡の性格の解明に前進が図れるものと期待したのである。

予想どおり、調査地の西端にあたるG区で2棟以上の掘立柱建物や柱列の存在を明らかにする成果があった。そのうち、建物の全規模を明確にできたのは7号掘立柱建物のみであった。そのほかは柱穴の一部が調査区外に入ったり、後世の竪穴住居等により旧地表面等が削平されたため一部の柱穴しか検出できず、規模等を十分に明らかにできなかった。また、方1m程度の大きさの掘立柱穴とみるべき穴が単独で確認できたものも数か所ある。なお、数棟の建物の存在を推定させるが、詳細を明らかにできなかったのは残念である。掘立柱建物等については、すでに遺構各節で報告されたところであるが、以下、これら掘立柱建物群などに関連して、その特質や問題点について若干の整理をしておきたい。

〈7号掘立柱建物〉　南北4間、東西2間の南北棟であり、総長は南北桁行7.65mほど、東西梁行5.88mほどに復原できる。造営方位は概ねN－30°－Eである。柱掘方は、一辺1mないしそれを超える整った方形であり、深さも1mほどに復原できる。柱痕跡を多くの柱穴で検出できた。柱痕跡から、柱は円柱で、根元部分の太さは、25～29cm程度と相当の太さをもつものであった。柱掘方の底には、いずれにも30～50cm大、厚さ10cmほどの板石1個を据えて礎板としていた。礎板が据えられた深さの絶対高にはばらつきがあり、一定しない。柱痕跡や礎板によって各柱間の寸法を復原すると、桁行は1.91m等間となるが、ややばらつきがある。梁行は2.94m等間に割り付けられる。単位尺を1尺＝29.4cmとすれば、梁行は10尺等間で総長20尺、桁行は各間6.5尺等間で総長26尺と整数値が得られ、造営にあたって1尺＝29.4cm程とする唐尺が用いられた可能性がある。南側柱から1間目の棟通り位置に径30cmほどの円柱の痕跡がある。深さは側柱方よりも浅く、50cm程である。より北側は重複する316号住居跡によって破壊されたためか、確認できていない。

以上を勘案すると、この建物は床張であった可能性が高い。礎板は床張とすることによる柱の沈下を防ぐための配慮であろう。また、柱掘方は、暗褐色土と黄褐色土とを交互に突き固めつつていねいに埋められており、その整った形状や大きさ、柱の太さ、柱間寸法の相当な精度等をあわせ考えると、床面積は広くないものの、建物の格は相当に高いと判断できる。なお、北にある3号柱列は、この建物の目隠し塀的施設である可能性がある。

〈6号掘立柱建物〉　南北4間ないしそれ以上、東西2間ないし3間の南北棟に復原できる。南は発掘区外へ延びる。建物北部の柱穴は、竪穴住居跡によって削平されており、遺存しないか、その底部をわずかに残す程度である。造営方位は概ねN－18°－Eである。柱掘方は、遺存状況の良い南部で見ると、一辺1m程度の整った方形になり、深さも0.8mほどはあったと復原できる。7号掘立柱建物と同様に、柱掘方の底に板石による礎板を据えたものが多く、また、径25cm程度の円形柱痕跡をとどめるものも多い。柱間寸法は、桁行が約1.66m等間、梁行は総長5.35m程で、2間とすれば2.67m等間、3間とすれば1.78m等間と復原できる。梁行は唐尺で9尺ないし6尺で計画された可能性がある。以

上のように、６号掘立柱建物も７号同様に相当に格の高い建物と考えてよい。

１号柱列と２号柱列とに関しては柱通りが揃わず、とくに２号柱列ではずれが大きい。したがって、２条の柱列に復原するには疑問が残り、一部の柱掘方は建物にまとまる可能性もある。それら疑問については、北側部分の発掘成果に期することとし、ここでは柱掘方が一辺0.8mほどの方形に近い形状で、板石による礎板を据えたものがあり、柱痕跡も径20cmほどと太く、かつ柱間距離も３m程と広い部分があることを注目しておきたい。格の低い施設と見るべきではなかろう。方位は、ほぼ東西に並ぶものと、東西に対して、西で北へ７°前後振れるものとがあるようである。

掘立柱建物や柱列は造営方位から３群に細分できる。ＡはＮ－30°－Ｅ、ＢはＮ－18°－Ｅ、ＣはＮ－７°－Ｅからほぼ東西の方位をとるものである。柱掘方などの重複関係から、Ａ・Ｂが先立ち、Ｃが遅れることは確かである。ＡとＢとの前後関係については明確な手がかりがない。掘立柱建物や柱列はいくつかの竪穴住居跡と重複し、いずれもそれらに先行する。Ａの方位をとる７号掘立柱建物は、８世紀前半造営の316・327号住居跡に先行する。Ｃの方位をとる１・２号柱列の一部も316号住居跡と重複しており、それに先立つ。かつ316号と327号とも重複している。これらの点を勘案すると、７号掘立柱建物は、316号住居跡が使用される８世紀前半を相当遡って存在した可能性が強くなる。６号掘立柱建物も、７世紀代に遡る可能性のある321号住居跡以前の造営であり、ともに、造営は７世紀後半まで遡るらしい。ただ、Ａ・Ｂが一時期併存した可能性は残る。また、Ｃ区で見つかった10号掘立柱建物は５間×３間の南北棟建物で、梁行を３間割りにした建物である。柱掘方も１mほどと大きく、方形状である。造営方位はＮ－25°－Ｅと７号掘立柱建物のそれに近く、時期は８世紀初頭から中葉とされる。礎板を持たないなど、７号掘立柱建物とはやや特徴を異にすることを注目しておきたい。

〈掘立柱建物ST4201〉　長野県埋蔵文化財センターによる上信越自動車道建設に先立つ屋代遺跡群の発掘調査では、７号掘立柱建物の西方やや南よりにあたる場所で、大規模な掘立柱建物ST4201が検出されている。報告者（注１）は、５間×５間で、南北に廂をもつ面積74.64m²の建物に復原している。柱掘方は、実測図では不整円形状の平面形のものが多いが、発掘調査時、掘立柱穴と明確に認識しないまま発掘されたようで、本来、一辺１mないしそれを超える方形と見るべきで、深さも0.8m以上であったと思われる。柱掘方の底に、30～50cm大の板石を敷いたものが多数確認されており、多くに径22～25cmほどの円形柱痕跡が認められた。柱掘方や板石による礎板の設置や柱の太さなど、７号掘立柱建物と共通する点が顕著であることを注目したい。５間×５間とすれば、東西桁行総長は約8.90mで、柱間寸法はほぼ1.78m等間に復原でき、各柱間でのばらつきは少ない。南北梁行総長は約8.50mで、南北の廂は1.78m等間で、身舎３間は、ほぼ1.66m等間に復原できる。桁行同様ばらつきは小さい。造営方位は７号掘立柱建物に近いが、わずかに振れが小さいようである。

さて、北側柱列の東延長約1.8mの位置に、板石を礎板とする柱掘方があり、径二十数cmの円形柱痕跡が認められている。また、身舎部分では、その西半部の柱掘方が確認できていないものが多く、報告者の復原には疑問が残る。むしろ東西桁行は、東にもう１間分延びて、東西６間となる可能性が高い。すなわち４間×３間の身舎の四面に廂を付けた東西６間、南北５間の建物と考えるべきであろう。したがって、桁行総長は約10.70mとなり、面積は約90m²となる。身舎内にも柱穴と見るべきものがあるから、床張建物であった可能性も高い。身舎梁行を３間割りにする柱配置は７世紀の建物に例が多いことも注目したい。

〈ST4201と７号掘立柱建物〉　掘立柱建物ST4201を上述のように復原してよければ、７号掘立柱建物

の西側柱列は、ST4201の東側柱列から約35m東に、前者の南側の柱列は、後者の北側柱列から約7m北に位置することになる。また、ST4201の西方約21mでやや北寄りにも、これら建物と造営方位をほぼ一致させて南北3間（総長約8.5m）、東西2間（総長約3.8m）の掘立柱建物がある。全体として東西棟の主殿を中心に、その東西の北寄りに南北棟の付属建物を配置する建物群構成を思わせる。掘立柱建物ST4201等の時期については、古代Ⅰ期前半（7世紀後半）に成立したものとされ、その周辺の竪穴住居群や建物の北側100mの旧千曲川支流河道で発見された水辺の祭祀場とともに、7世紀後半から8世紀前半にかけて継続的に展開したものとされている。なお、ST4201の周辺には、さらに4棟ほどの小規模掘立柱建物が存在し、これらの造営方位は、概ね先に見たBやCの方位を取るようである。

〈ST4201群の性格〉　掘立柱建物ST4201の周辺では、⑥区溝内の8世紀前半の層から銅巡方が、④～⑥区集落内からは刀子や円面硯など文書作成に関わる遺物や畿内系土師器が出土している。また、ST4201の西側から北側にかけて分布する竪穴建物内からは、鉄製品、銅製品生産に関わる遺構や遺物、ガラス玉製作の鋳型、糸の生産に関わる紡錘車などが出土し、各種手工業品の工房と見るべき施設が展開する。集落北側の旧流路で行われた祭祀には、114号木簡の記載等から郡家が関わり、また、木簡等の年代とST4201や集落の存続時期とが一致することから、祭祀場と建物群との深い関係も想定されている。

木簡には、評家・郡家に関わる7世紀末から8世紀前半の出挙関係木簡があり、郡司層が農業生産において主導的役割を果たし、農民に稲作の奨励を促した内容のものもある。ST4201群の北方では、稲の脱穀作業を大々的に行ったことを示す稲籾の多量廃棄など、生産と加工に関わる遺物群の出土も顕著である。鉄製品の生産では、製錬から精錬、鍛錬、鍛冶、鋳造の各工程の遺物が認められるが、鍛冶炉は竪穴住居内にあるもののみで、大規模工房は発見されていない。このように、生産活動は種々の物を製作する一方で、いずれも小規模生産である点に特色があり、年代も7世紀後半から8世紀前半に限定されるという。

屋代遺跡群は律令制下の埴科郡屋代郷推定地内に位置する。建物ST4201の性格については、竪穴住居群との境が曖昧であることなどから、報告者は官衙というよりも、公務を行った在地有力者の居宅である可能性が高いと見ている。すなわち、ST4201居住者は、その居宅周辺に設けた各種の工房により、金属製品、ガラス製品、布製品、木製品など種々の私的、公的生産を掌握し、また、水辺の祭祀でも大きな役割を担い、円面硯や朱墨硯の出土が示すように、文書作成にも関わっていたと推定する。一方で、7世紀後半における木簡の廃棄や祭祀施設の充実、祭祀具の増加、そして8世紀前半におけるこれらの急減と消滅が、ST4201建物群の成立と消滅の動向とよく相応することから、ST4201建物群と、郡家等の官衙との密接な関わりを想定している。

その上で、⑥区溝から出土した郡符木簡や国符木簡、軍団関係木簡から存在が推定される官衙施設と、ST4201建物群とを直接結びつけ得る証拠は少なく、官衙中枢施設は別地点にあると見る。さらに踏み込んで、出土木簡等の分析から、ST4201建物の居住者は、埴科郡の少領以下の階層に属する人物であったと考える。なお、木簡の検討から、評や郡の成立初期においては、8世紀に「埴科郡」と「更級郡」となる両郡域は、「科野評（郡）」であった可能性が高いと見ている。

では、郡衙などの官衙施設はどこに想定できるのか。土口バイパスは、幅100mほどの自然堤防の中央を東西に貫通するから、その点の手がかりを得る絶好の調査地であった。

さて、バイパス建設地の調査で出土した硯は、円面硯3点、須恵器の高台付き杯や台付き大壺の底

部外面等を転用した硯５点、灰釉の杯を転用した硯２点の計10点である。円面硯は、いずれも口径15cmほどのもので、台脚部も高く、縦長方形の透かし穴をもつ本格的なものである。時期は、転用硯を含めて７・８世紀から平安時代にかけての諸時期のものがある。灰釉転用硯は朱墨用であり、須恵器転用硯にも朱墨用が１点確認できる。出土地はＦ・Ｇ地区から７点、Ａ区、Ｃ区、Ｅ区から各１点出土しており、出土地の中心は、先の掘立柱建物群の分布域と概ね重なっている。とくに、円面硯はいずれもＦ区の出土であって、この付近に文書の作成を行う中心的施設があり、そうした性格が、相当長期間にわたり継承されていた状況を示唆するものであろう。

土口バイパス道路地区の発掘では、各時期に及ぶ420軒以上の竪穴住居跡を発見したにもかかわらず、その西端部のＧ区を除いて、大規模な掘立柱建物や官衙施設の存在を物語る顕著な遺物の出土もなかった。わずかに、Ｃ区にやや規模の大きい掘立柱建物が存在した程度であり、一帯の中心が西端部付近から以西の地にあった可能性は高い。

屋代遺跡群出土木簡に記された年紀は、最古が「乙丑年」であり、最新は「神亀三」（726年）である。「乙丑年」は665年と判断できる。これら木簡は、郡（評）衙の存在に関わっている可能性が高いから、埴科郡（評）等の郡（評）衙が、665年頃まで遡って成立していた可能性を示唆し、早い時期の郡（評）衙の成立を知る重要な資料である。また、木簡群は先に見たST4201や６・７号掘立柱建物群等の年代と併行するのであって、これら掘立柱建物群が郡（評）衙などの官衙、ないしそれと深い関係にある施設である可能性は極めて高い。かつ７世紀後半から８世紀前半にかけて造り替えられつつ継承されており、少なくとも、初期の郡（評）衙の有力候補として、その構造を考える重要な手がかりであることは間違いない。

付近には、埴科郡（評）の郡庁のほか厨、館、正倉、郡司居宅なども存在したと見られ、また、７世紀末～８世紀初頭の層から出土した更科郡司に宛てた「国符木簡」が示す初期の信濃国府や国府関連施設の存在、さらに「少毅」といった軍団の役職名を記す木簡の出土が示す軍団の存在の可能性など、付近には諸公的施設が設置されていた可能性があり、初期国庁は郡家に同居、付属していた可能性も指摘されている。また、郷長・里正の居宅や、千曲川を利用した水運の港津など水陸交通の拠点としての関連施設も存在したろう。また、雨宮地籍にある雨宮廃寺は、貞観８年（866）に準官寺である定額寺に列せられた「屋代寺」に比定されており、郡内で最も重要視された寺院である。その創建は７世紀末から８世紀初頭まで遡り、郡寺的性格の寺院であった可能性が高い。

今後、これらの諸課題について、従来の発掘成果等の詳細な分析とともに、周辺地域の多角的な調査の進展を通して、解明が図られることを期待する。この地域が、古代の科野（信濃）国の中心の一であった可能性がますます高まるなか、上述のような課題の解明は、科野（信濃）国の成立過程や成立事情を明確にする上でも大きな成果を波及するであろう。

注１：長野県教育委員会等『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書』28　2000.3

第17表－1　屋代遺跡群住居跡一覧表

住居No.	位　　置	時代	形　態	主軸方向	規　模	備　　考
1	BA・BB・BC-17・18・19	Ⅲb	方形	N－47°－W	5.35×5.35	P84 に記載
2	AU・AV-16	Ⅲb	方形?	N－10°－E	不　明	P87 に記載
3	AX・AY-16・17	Ⅲ？	隅丸方形	不　明	5.80×	北側攪乱
4	AS-17・18	Ⅰ	方形？	不　明	不　明	P25 に記載
5	AS-17・18	Ⅲ	方形	N－60°－W	不　明	西側攪乱
6	AX・AY-18	Ⅱ	不　明	不　明	不　明	西壁の一部検出
7A	AY・BA-18・19	Ⅱb	方形	不　明	5.35×	P27 に記載
7B	BB-19	Ⅳb	不　明	N－10°－E？	不　明	P175に記載
8	AS・AT-17・18	Ⅳb	方形	N－15°－E	2.80×2.25	P175に記載
9	AU・AV-18	Ⅱb	不　明	不　明	不　明	P28 に記載
10	AW・AX-16・17	Ⅲa	不　明	不　明	不　明	P87 に記載
11	AX-19	Ⅲ	不　明	不　明	不　明	床面のみ検出
12	AY・BA-14・15・16	Ⅲb	隅丸方形	N－35°－W	5.20×4.60	P88 に記載
13	BA-18・19	Ⅱa	隅丸方形	N－120°－E	3.65×3.70	P28 に記載
14	AS・AT-18・19	Ⅲb	隅丸方形	N－35°－E？	6.30×	P91 に記載
15	AV-17	不明	不　明	不　明	不　明	壁の一部検出
16	AV・AW・AX-15・16	Ⅳb	隅丸方形	N－35°－E？	6.30×	P92 に記載
17	AT・AU-17・18	Ⅲ	隅丸長方形	不　明	(7.10)×5.80	
18	BA-16、BB-15・16	Ⅱc	不　明	不　明	不　明	P30 に記載
19	BA・BB-14・15	Ⅲ？	方形	不　明	(4.05)×	
20	BB・BC-16・17	Ⅲb	長方形	N－50°－W	3.95×3.10	P93 に記載
21	BB・BC・BD-13・14	Ⅲc	方形	N－30°－W	4.60×4.45	P94 に記載
22	AW・AX-18・19	Ⅱ	隅丸方形	不　明	4.85×	
23	AW-19	Ⅲ？	不　明	不　明	不　明	床面のみ検出
24	BC・BD-16・17	Ⅲc	方形	N－40°－W	3.90×3.60	P97 に記載
25	BD・BE-16・17	Ⅳc	方形	N－20°－E	3.30×3.15	P176に記載
26	AX-15	Ⅲ？	不　明	不　明	不　明	東壁の一部検出
27	BB・BC-19・20	Ⅲb	方形？	不　明	不　明	P99 に記載
28	BC・BD-19	Ⅱa	方形？	不　明	不　明	P30 に記載
29	AS-17	Ⅲ	不　明	不　明	不　明	カマドのみ検出
30	AS・AT・AU-17・18	Ⅲ	長方形	不　明	6.50×5.15	東側調査区外
31	AS・AT-18・19	Ⅱc	隅丸方形？	不　明	(5.50)×	P30 に記載
32	AV-16	不明	不　明	不　明	(2.40)×	壁の一部検出
33	BE-15	Ⅱb	隅丸方形	不　明	5.90×	P31 に記載
34	BE・BD-15・16・17	Ⅲb	方形	N－125°－W	4.25×3.75	P99 に記載
35	BD・BE-12・13・14	Ⅲb	長方形	N－40°－W	5.35×3.80	P100に記載
36	BE・BF-17・18	Ⅲa	隅丸方形	N－35°－E	5.60×	P101に記載
37	AW・AX-18・19	Ⅱ	隅丸方形	N－50°－W	5.05×	P32 に記載
38	AW・AX-17	Ⅱc	隅丸方形？	不　明	不　明	P33 に記載
39	AV・AW・AX-15・16	不明	不　明	不　明	不　明	壁の一部検出
40	BF・BG-16・17	Ⅳb	不　明	N－20°－E	3.80×3.70	P177に記載

第17表－2　屋代遺跡群住居跡一覧表

住居No.	位　　置	時代	形　態	主軸方向	規　模	備　　考
41	BH・BI-13	Ⅳc？	方形	N－25°－E	2.85×2.85	P178に記載
42	BH・BI-11	Ⅳ	方形？	N－15°－E	不　明	
43	BI・BJ-16	Ⅳc	隅丸方形？	N－95°－E	不　明	P179に記載
44	AU・AV-19	Ⅱ	隅丸方形？	不　明	不　明	北側攪乱
45	AU・AV-18・19	Ⅰ	楕円形	N－48°－E	5.35×4.40	P26 に記載
46	BG・BH・BI-15・16	Ⅲb	方形	N－25°－E	5.35×4.80	P102に記載
47	BF・BG-15・16	Ⅲb	長方形	不　明	5.05×	P103に記載
48	BI・BJ-14・15	Ⅳb	方形	N－105°－E	3.05×2.55	P180に記載
49	BF・BG・BH-13・14・15	Ⅲb	隅丸方形	N－50°－W	6.10×5.60	P104に記載
50	BI-15	Ⅳ	方形	N－30°－E	2.95×2.80	北壁にカマド
51	BA・BB-14	Ⅲ	不　明	不　明	不　明	床面のみ検出
52	BB-13・14、BC-13	Ⅲb	隅丸方形？	N－45°－W	不　明	P107に記載
53	BD-14	Ⅲ	不　明	不　明	不　明	床面のみ検出
54	BC-18、BD-17・18	Ⅳa	方形	N－40°－E	3.55×3.45	P181に記載
55	BI・BJ・BK-14・15	Ⅲb	長方形	N－30°－W	4.80×3.80	P107に記載
56	BI・BJ-12・13	Ⅳb	方形	N－20°－E	3.60×3.60	P182に記載
57	AT-19	不明	不　明	不　明	不　明	床面のみ検出
58	BC・BD-15・16	Ⅲb	隅丸方形？	N－50°－W	不　明	P109に記載
59	BE・BF-12・13・14・	Ⅲ	方形？	不　明	不　明	P109に記載
60	BJ・BK-12・13	Ⅳ	方形	N－60°－W	(3.15)×3.10	P183に記載
61	BK・BL-12・13	Ⅳb？	方形	N－10°－E	3.70×3.50	P184に記載
62	AX・AY-16・17	Ⅲa	不　明	N－35°－E？	不　明	P110に記載
63	欠					
64	BB・BC-14・15	Ⅲ	方形	不　明	5.35×	21号住居跡に南側切られる
65	BK・BL-10・11・12	Ⅳc	長方形	N－20°－E	4.50×3.90	P184に記載
66	BL・BM・BN-12・13	Ⅲb	隅丸方形	N－35°－E	4.90×4.50	P111に記載
67	BL・BM-13・14	Ⅲb	隅丸方形	N－35°－E	4.05×	P112に記載
68	BL・BM・BN-13・14	Ⅲ	方形	不　明	7.40×	P113に記載
69	BO-13・14	Ⅳ？	方形？	不　明	不　明	北側調査区外
70	BN・BO-12・13	Ⅲ？	方形	N－65°－W	3.40×3.20	P114に記載
71	BP・BQ-11・12・13	Ⅲc	方形	N－25°－E	3.60×3.25	P114に記載
72	BC・BD-14	Ⅱa	隅丸長方形	N－130°－W	3.90×3.20	P33 に記載
73	BD-17	Ⅱb	不　明	不　明	不　明	P34 に記載
74	BI-14	Ⅲ？	隅丸方形	不　明	5.10×	48・50 号住居跡に北側切られる
75	BC・BD-15・16	Ⅳ？	不　明	不　明	不　明	西壁のみ検出
76	BK・BL・BM-11・12・13	Ⅳb	長方形	N－20°－E	4.05×3.20	P186に記載
77	BJ-11	Ⅳ	方形	不　明	4.45×	65号住居跡に西側切られる
78	BM・BN-10・11	Ⅳa	隅丸方形	N－105°－E	2.80×2.75	P187に記載
79	BM・BN-10・11・12	Ⅲb	隅丸方形	N－70°－W	4.80×4.80	P115に記載
80	BA・BB-15・16	Ⅱa	隅丸方形	N－30°－E	5.05×4.30	P35 に記載

第17表－3　屋代遺跡群住居跡一覧表

住居No.	位　　置	時代	形　態	主軸方向	規　模	備　　考
81	BI・BJ-11	Ⅳa	方形？	不　明	不　明	P188に記載
82	BL-10・11	Ⅳ	方形	不　明	不　明	南西壁のみ検出
83	BF・BG-11・12	Ⅲb	不　明	不　明	不　明	P116に記載
84	BK・BL-10	Ⅲ	不　明	不　明	不　明	南側調査区外
85	BE-17 BF-16・17	Ⅱb	不　明	不　明	不　明	P37 に記載
86	BL・BM-10・11	Ⅳ	方形	N－75°－W	3.45×	P189に記載
87	BN・BO・BP-10・11	Ⅲa	隅丸方形	N－70°－W	5.15×5.05	P117に記載
88	欠					73住と同一
89	BC-13	Ⅲ？	不　明	不　明	不　明	床面・炉のみ検出
90	BE・BF-12・13・14	Ⅱa	隅丸長方形	N－145°－W	3.80×	P37 に記載
91	BG・BH-13・14	Ⅱc	隅丸方形	N－130°－E	6.00×(4.70)	P38 に記載
92	BG-16・17	Ⅲ？	方形？	不　明	不　明	北西壁のみ検出
93	BH・BI-15・16	Ⅱa	隅丸長方形	N－35°－W	5.10×4.05	P39 に記載
94	BD・BE-12・13	Ⅱa	隅丸方形?	N－50°－W	(4.10)×	P41 に記載
95	BH・BI-11・12	Ⅱb	隅丸方形?	不　明	3.90×	P42 に記載
96	BE-12・13	Ⅱa	隅丸方形?	不　明	不　明	P42 に記載
97	BI・BJ-11・12・13	Ⅱc	隅丸方形	N－45°－W	5.25×4.80	P43 に記載
98	BI・BJ-13	不明	方形	不　明	3.10×	南側不明
99	BO-12	Ⅱ？	不　明	不　明	不　明	東壁のみ検出
100	BO・BP・BQ-12・13	Ⅲ	隅丸長方形	N－25°－E？	(5.30)×4.40	P119に記載
101	BP・BQ・BR-11・12・13	Ⅲ	方形？	N－70°－W	5.40×	P119に記載
102	BG-13・14	Ⅱ？	方形？	不　明	不　明	西壁のみ検出
103	BL・BM-13・14	Ⅱb	隅丸方形	N－40°－E	3.25×	P44 に記載
104	BM・BN-12・13	Ⅱa	隅丸長方形	N－65°－E	5.75×3.75	P45 に記載
105	BK・BL-13・14	Ⅱa	方形	不　明	(3.95)×	P46 に記載
106	BJ・BK-14・15	Ⅱ	長方形	N－78°－E	6.80×5.15	P47 に記載
107	BI-15	Ⅱ	不　明	不　明	不　明	床面のみ検出
108	BM-9・10	Ⅱ？	不　明	不　明	不　明	床面のみ検出
109	BN-9・10	Ⅱa	隅丸方形？	不　明	4.85×	P48 に記載
110	BM・BN-9・10	Ⅱa	隅丸方形？	N－40°－E	(4.40)×	P49 に記載
111	CB・CC-8・9	Ⅳb	方形	N－100°－E	4.30×	P189に記載
112	BX・BY-8・9	Ⅳb	方形	N－15°－E	3.50×3.50	P190に記載
113	CA・CB-8	Ⅲ	隅丸方形	N－40°－W	2.55×2.40	P120に記載
114	CB・CC-7	Ⅳ	方形	N－40°－E	3.55×(3.45)	北壁にカマド
115	CB・CC-6・7	Ⅱc	方形？	不　明	不　明	P49 に記載
116	BX・BW-7・8	Ⅲb	隅丸方形	N－105°－E	4.80×4.60	P120に記載
117	BY・CA・CB-10・11	Ⅲa	隅丸方形？	N－130°－E	不　明	P122に記載
118	BR・BS・BT－8・9	Ⅳa	方形	N－15°－E	4.50×(4.60)	P191に記載
119	BS・BT・BU-11・12	Ⅲb	隅丸方形？	不　明	不　明	P125に記載
120	BS・BT-9・10	Ⅲa	方形？	不　明	5.40×	P126に記載

第17表－4　屋代遺跡群住居跡一覧表

住居No.	位　　置	時代	形　態	主軸方向	規　模	備　　考
121	BX-10・11	Ⅱ	不　明	不　　明	不　　明	床面・炉のみ検出
122	BT・BU-8・9	Ⅲa	方形	不　　明	(4.00)×4.00	P127に記載
123	BW・BX-9・10	Ⅲb	隅丸長方形	N－60°－W	3.90×3.70	P128に記載
124	BQ・BR・BS-9・10・11	Ⅲb	隅丸方形	N－55°－W	6.65×6.60	P131に記載
125	BY・CA-7・8・9・10	Ⅱa	隅丸長方形	N－25°－E	8.75×6.40	P50 に記載
126	BX・BY-11	不明	方形？	不　　明	不　　明	東壁のみ検出
127	CA・CB-9・10	Ⅱc	方形？	不　　明	不　　明	P52 に記載
128	BW・BX-7・8	Ⅱ	隅丸方形	不　　明	(4.40)×	南側調査区外
129	BP・BQ-9・10	Ⅱa	長方形？	不　　明	5.80×(3.10)	P52 に記載
130	BX・BY-7	Ⅱ？	方形？	不　　明	不　　明	南側調査区外
131	BU・BV・BW-8・9・10	Ⅱc	方形？	N－35°－E	7.00×6.95	P53 に記載
132	BQ・BR・BS-10・11・12	Ⅲb	方形	E	4.70×4.70	P134に記載
133	欠					
134	BR-12・13	不明	不　明	不　　明	不　　明	北側調査区外
135	BV・BW-7・8	Ⅱb	隅丸方形	不　　明	4.30×(3.50)	P55 に記載
136	欠					
137	BR-12	Ⅲ	不　明	不　　明	不　　明	床面のみ
138	BU-10・11	Ⅱ？	不　明	不　　明	不　　明	床面のみ
139	BW-7・8	Ⅱa	方形	不　　明	2.80×2.50	P55 に記載
140	CB-6・7	Ⅱc	不　明	不　　明	不　　明	P56 に記載
141	BU・BV-11	不明	方形	不　　明	(3.10)×	北側調査区外
142	欠					
143	BQ・BR・BS-10・11	Ⅱa	隅丸長方形	N－45°－E	5.50×3.60	P56 に記載
144	BV・BW-7・8・9	Ⅱa	隅丸長方形	N－25°－E	5.55×4.25	P57 に記載
145	欠					
146	BY・CA-8・9・10	Ⅱc	隅丸長方形	N－30°－E	6.85×4.80	P58 に記載
147	BP・BQ-11・12・13	Ⅱc	隅丸長方形	N－25°－E？	7.05×5.75	P59 に記載
148	BT-11・12	Ⅲ？	隅丸方形？	不　　明	不　　明	北側調査区外
149	BS・BT-11・12	Ⅲ？	隅丸方形	不　　明	不　　明	132 号住居跡に切られる
150	EV・EW-11・12	Ⅳc	方形？	N－105°－E	不　　明	P192に記載
151	ET・EU・EV-12・13	Ⅳa	方形	N	4.05×3.70	P193に記載
152	ER・ES・ET-13・14	Ⅳb	方形	E	4.00×3.95	P194に記載
153	EU・EV・EW-14・15	Ⅳb	方形	不　　明	5.20×	P196に記載
154	ES・ET-12・13・14	Ⅳa	長方形	N－15°－E	4.50×3.90	P197に記載
155	EU・EV-13・14	Ⅲb	方形	N－35°－E	4.50×	P135に記載
156	EP・EQ・ER-13・14	Ⅳc	方形	N	3.45×(3.10)	P198に記載
157	EP・EQ-12・13・14	Ⅲc	隅丸方形	N－60°－W	5.40×4.90	P136に記載
158	ET・EU-11	Ⅲc	隅丸方形？	N－35°－W	不　　明	P138に記載
159	EP・EQ-11・12	Ⅳb	方形	E	3.90×3.75	P199に記載
160	EN・EO-12・13	Ⅳb	方形	N－85°－E	3.15×3.10	P200に記載

第17表－5　屋代遺跡群住居跡一覧表

住居No.	位　　置	時代	形　態	主軸方向	規　模	備　　考
161	EP-12・13	Ⅲ	方形？	不　明	不　明	北側攪乱
162	EN・EO-10・11	Ⅳc	方形？	N－130°－E	不　明	P201に記載
163	EM・EN-11・12・13	Ⅳb	方形	N－95°－E	(3.40)×3.40	P202に記載
164	EK・EL-11・12	Ⅲc	隅丸方形	W	3.75×3.40	P139に記載
165	EK・EL-13	Ⅳb？	不　明	不　明	不　明	P204に記載
166	EL・EM-12・13	Ⅳb	方形	N－ 5°－E	3.45×2.95	P204に記載
167	EN-11	Ⅳ	方形？	N？	不　明	カマドのみ検出
168	欠					288 号住居跡と同一
169	EJ-9	不明	不　明	不　明	不　明	南側調査区外
170	EL・EM-9・10	Ⅲa	隅丸長方形	N－50°－W	(4.10)×3.50	P139に記載
171	EL・EM・EN-12・13	Ⅳa	方形	N－25°－W	5.20×(4.50)	P205に記載
172	EK・EL-11	Ⅳ？	方形	不　明	不　明	南壁のみ検出
173	EL-11・12	Ⅳ？	方形	不　明	5.90×	
174	EN-12・13	Ⅲ	方形？	不　明	不　明	床面のみ検出
175	EU-13	Ⅲ	不　明	不　明	不　明	東壁のみ検出
176	EO・EP-11	Ⅳ	方形？	N－55°－W？	不　明	北壁のみ検出
177	EL-13	Ⅳ	方形？	N－95°－E	不　明	カマドのみ検出
178	AF-11・12	Ⅲ	方形	不　明	4.00×	周溝あり
179	AF・AG-12・13	Ⅲ？	不　明	N－45°－W	不　明	P140に記載
180	AG・AH-15	Ⅲ？	方形？	不　明	3.90×	
181	AG・AH-14・15	Ⅲ？	方形	不　明	4.50×	西側調査区外
182	AG-13・14	Ⅲ？	不　明	不　明	不　明	北壁のみ検出
183	AD・AE-7・8	Ⅲb	方形？	不　明	4.70×	P141に記載
184	AE-6・7	Ⅲ	不　明	不　明	不　明	西側調査区外
185	AH・AI-17	Ⅲ	方形	N－40°－E	3.60×	西側調査区外
186	AH-16	Ⅲ？	不　明	不　明	不　明	床面のみ検出
187	AC・AD-5	Ⅲ？	不　明	不　明	不　明	南側調査区外
188	AD-5・6	Ⅱc	不　明	不　明	不　明	P60 に記載
189	AE-8・9	Ⅲ	不　明	不　明	不　明	東側調査区外
190	AF-10・11	Ⅲ？	不　明	不　明	(5.70)×	
191	AF・AG-13	Ⅲ	隅丸方形？	不　明	不　明	東側調査区外
192	AG-16・17	Ⅲ	方形？	不　明	不　明	東側調査区外
193	AD-7	Ⅲ？	不　明	不　明	不　明	東側調査区外
194	AC-13・14・15	Ⅲ	方形？	不　明	(5.00)×	西側調査区外
195	AB-13・14	Ⅲ？	不　明	不　明	不　明	東側調査区外
196	AC-13	Ⅲ？	不　明	不　明	5.40×	
197	AB・AC-12・13	Ⅲb	長方形	N－45°－W	4.50×(4.00)	P142に記載
198	AB・AC-10・11・12	Ⅱc	隅丸方形？	不　明	(6.00)×	P61 に記載
199	AB-9	Ⅱ	不　明	不　明	不　明	南西側調査区外
200	AA・AB-11	Ⅲ	不　明	不　明	不　明	

第17表－6　屋代遺跡群住居跡一覧表

住居No.	位　　置	時代	形　態	主軸方向	規　模	備　　考
201	FC・FD-14・15	Ⅳb？	方形	N－100°－E	3.45×3.05	P207に記載
202	FF・FG・FH-14・15	Ⅳb	方形？	N－5°－E	5.05×	P208に記載
203	FA・FB-16・17	Ⅳc	方形？	N－110°－E	3.25×	P209に記載
204	欠					215 号住居跡と同一
205	FC・FD-16・17	Ⅳb	不　明	不　明	不　明	P209に記載
206	EY・FA・FB-13・14・15	Ⅳ	方形？	不　明	(4.10)×	P210に記載
207	FF・FG-16・17	Ⅳb	方形	N－5°－E	3.60×3.25	P210に記載
208	FB-13・14	Ⅳ	不　明	不　明	不　明	
209	EY・FA・FB-15・16・17	Ⅲc	方形？	N－10°－E	5.00×	P143に記載
210	FD・FE-16・17	Ⅳa	方形	N－105°－E	4.50×	P211に記載
211	FD・FE-14・15・16	Ⅳa	方形	N－15°－E	3.75×3.45	P212に記載
212	FB・FC-14・15・16	Ⅲc	隅丸方形	N－20°－E	4.25×3.75	P144に記載
213	EY・FA-15	Ⅲ？	不　明	不　明	不　明	床面のみ検出
214	FB・FC・FD-16・17	Ⅲb	不　明	不　明	(6.30)×	P145に記載
215	FB・FC-13・14	Ⅳa	方形	N－65°－W	不　明	P213に記載
216	FE・FF-17	不明	隅丸方形？	不　明	不　明	北側調査区外
217	FE・FF-14	Ⅳb	方形？	不　明	不　明	P214に記載
218	FF・FG-15	Ⅳb？	方形	不　明	4.10×	P214に記載
219	EE-14	不明	不　明	不　明	不　明	煙道のみ検出
220	FD・FE-16	Ⅲ	不　明	不　明	不　明	
221	FH・FI-17・18	Ⅳc	不整隅丸方形	N－115°－E	(3.60)×3.60	P215に記載
222	FN・FO-17・18	Ⅳc	方形	N－95°－E	4.15×3.65	P216に記載
223	FP・FQ・FR-16・17	Ⅳ	長方形	不　明	4.45×3.20	P217に記載
224	FS・FT-17・18	Ⅳc	方形	N－95°－E	3.80×3.20	P218に記載
225	FI・FJ-16・17	Ⅳb	方形	N－85°－W	3.30×3.05	P219に記載
226	FL・FM-18・19	不明	方形	不　明	(5.70)×	周溝あり
227	FP・RQ・FR-17・18・19	Ⅳc	方形	N－100°－E	4.60×4.10	P220に記載
228	FP・FQ・FR-16・17	Ⅳb	方形	N－110°－E	4.20×3.85	P221に記載
229	FL・FM-15・16	Ⅲb	隅丸方形	N－20°－W	4.65×	P146に記載
230	FP・FQ・FR-18・19	Ⅳc	方形	N－15°－E	3.90×	P222に記載
231	FI・FJ・FK-15・16・17・18	Ⅲc	隅丸方形	N－85°－W	6.45×5.75	P148に記載
232	FP・FQ-18・19	Ⅳb	方形？	E	不　明	P223に記載
233	FI・FJ-14	Ⅳb	方形	N－5°－E	3.95×	P223に記載
234	FM・FN-15・16	Ⅳb？	隅丸方形	N－10°－E	3.60×	P224に記載
235	FI・FJ-17・18	Ⅲc	隅丸方形	N－10°－E	3.60×3.50	P149に記載
236	FH・FI-17・18	Ⅲ	隅丸方形	不　明	3.90×	北側調査区外
237	FH-14・15	Ⅳ	方形？	N－5°－E	不　明	P225に記載
238	FP・FQ-18・19	Ⅲ	不　明	N－105°－E	不　明	P150に記載
239	FQ・FR-15・16	Ⅳb	方形	N－20°－E	4.05×	P225に記載
240	FF・FG-17・18	Ⅲ	方形	不　明	5.55×	北側調査区外

第17表－7　屋代遺跡群住居跡一覧表

住居No.	位　　置	時代	形　態	主軸方向	規　模	備　　考
241	FG-17	Ⅲ？	不　明	不　　明	不　　明	
242	FP・FQ・FR-16・17・18	Ⅳb	方形	N－15°－E	4.85×(4.65)	P226に記載
243	FH・FI・FJ-15・16	Ⅳa	方形	N－55°－W	4.50×4.40	P227に記載
244	FK-18	Ⅲ？	隅丸方形	不　　明	(4.00)×	焼失住居
245	FG・FH-15・16・17	Ⅳb	方形	N－15°－E	4.40×4.00	P228に記載
246	FS・FT-19・20	Ⅳc	方形	N－115°－E	3.10×2.95	P229に記載
247	FR・FS-18・19	Ⅳb？	方形？	N－105°－E	不　　明	P230に記載
248	FT・FU-19・20	Ⅳ	方形	N－110°－E	4.35×4.10	P230に記載
249	FR-17・18・19	Ⅲb	隅丸方形	N－75°－W	(5.40)×	P151に記載
250	FR-19	Ⅳ	隅丸方形	不　　明	不　　明	
251	FP・FQ-15・16	Ⅳa	方形	N－20°－E	4.10×	P231に記載
252	FS・FT・FU-16・17	Ⅲ	隅丸方形	N－50°－W	4.80×(4.00)	P152に記載
253	FU-19	Ⅳ	隅丸方形	不　　明	不　　明	焼失住居
254	FU-18・19	Ⅳ	隅丸方形？	不　　明	不　　明	P232に記載
255	FN・FO-15・16	不明	不　明	不　　明	不　　明	土坑の可能性あり
256	FT-18		不　明	不　　明	不　　明	
257	FW-20・21	Ⅳ？	方形	N－20°－E？	3.30×	
258	FV・FW-17・18	Ⅳb？	方形	N－20°－E	3.80×3.70	P233に記載
259	FV・FW-19・20	Ⅳa	方形	N－20°－E	3.75×	P233に記載
260	FX・FY-20・21	Ⅳb	方形	N－15°－E	4.65×	P234に記載
261	FV・FW-19・20	Ⅳ？	方形	不　　明	不　　明	
262	FX・FY-18・19	Ⅳ	方形	N－20°－W	3.85×	北壁にカマド
263	FX・FY-21	Ⅳ	方形	不　　明	(4.20)×	北側調査区外
264	FX・FY-18・19・20	Ⅲ	隅丸方形	N－50°－W	5.25×5.10	P153に記載
265	FX・FY-17・18	Ⅳ	方形	N－ 5°－E	(3.45)×	P235に記載
266	FW・FX-16・17	Ⅳc	方形	不　　明	4.60×	P235に記載
267	FV・FW-16・17	Ⅳb	方形	N－10°－E	(2.50)×	P236に記載
268	EA・EB-8・9	Ⅳc	方形	N－95°－E	3.20×3.00	P237に記載
269	DS・DT・DU-11	Ⅳ	方形	不　　明	3.60×	P242に記載
270	DU・DV-8	Ⅳa	不整楕円形	不　　明	2.90×(1.50)	P242に記載
271	DV・DW-8・9	Ⅳb	方形	N－20°－E	4.20×3.50	P243に記載
272	DS・DT・DU-6・7	Ⅲc	隅丸方形	N－15°－E	5.80×	P153に記載
273	DT・DU-7・8	Ⅳa	方形	N－75°－W	4.50×4.30	P245に記載
274	DX・DY-8・9	Ⅳb	隅丸方形	N－10°－E	4.05×3.75	P246に記載
275	DT・DU-8・9	Ⅳb	方形	N－80°－W	3.60×3.00	P248に記載
276	DY・EA-10・11	Ⅳb？	方形	N－105°－E	3.80×3.75	P249に記載
277	DY・EA-7・8・9	Ⅲc	方形	N－20°－E？	5.10×3.90	P155に記載
278	DV・DW-10・11	Ⅳb	方形	E	3.10×	P250に記載
279	DT-9、DU・DV-9・10	Ⅳb	隅丸方形	N－10°－E	3.90×3.75	P251に記載
280	DW・DX・DY-9・10	Ⅲb	隅丸方形	N	4.05×3.95	P156に記載

第17表－8　屋代遺跡群住居跡一覧表

住居No.	位　　置	時代	形　態	主軸方向	規　模	備　　考
281	ED・EE-8・9	Ⅳb	方形	N－95°－E？	2.65×	P253に記載
282	EH・EI-9	Ⅳb？	隅丸方形	N－95°－E	3.90×	P254に記載
283	EE・EF-11・12	Ⅳb	方形	不　明	3.45×	P254に記載
284	ED・EE-8・9	Ⅳa	方形？	N	不　明	P255に記載
285	EE・EF-8・9	Ⅳb	方形	N－95°－E	3.40×	P256に記載
286	EG・EH-12・13	Ⅳb	方形？	不　明	不　明	P256に記載
287	EE・EF・EG-12	Ⅳ？	隅丸方形	不　明	6.60×	
288	EH・EI・EJ-12・13	Ⅲb	隅丸方形	N－40°－W	4.85×	P158に記載
289	EF・EG-11	不明	不　明	不　明	不　明	南壁のみ検出
290	EI-11・12	Ⅳ？	不　明	不　明	不　明	西側調査区外
291	EG-9・10	Ⅳ？	不　明	N－5°－E	不　明	床・火床のみ検出
２９２～２９９　欠						
300	GJ・GK-19・20	Ⅳa	方形	N－25°－E	4.15×4.10	P257に記載
301	GM・GN-22・23	Ⅳb	方形	N－5°－E	(4.00)×(3.90)	P258に記載
302	GK・GL-20・21	Ⅳc	方形	N－105°－E	3.70×3.70	P261に記載
303	GA・GB-19・20・21	Ⅳc	方形	N－100°－E	4.00×3.85	P262に記載
304	GF・GG-21・22	Ⅳa	方形	N－10°－E	(4.00)×3.50	P263に記載
305	GC・GD-21・22	Ⅳb	方形	N－115°－E	4.60×	P264に記載
306	GD・GE-20・21	Ⅳb	方形	N－10°－E	3.25×2.95	P265に記載
307	GK-22・23	Ⅳ	方形	不　明	(3.55)×	P267に記載
308	GK-22	Ⅳ	不　明	不　明	不　明	床面のみ検出
309	GD・GE-8・9	Ⅳb	方形	N－5°－E	4.00×	P267に記載
310	欠					303 号住居跡と同一
311	GE・GF-20・21	Ⅳb	方形	N－10°－E	2.90×	P272に記載
312	GM・GN-23	Ⅲ	不　明	不　明	不　明	溝の可能性あり
313	GL・GM-21・22	Ⅳa	隅丸方形	N－65°－W	4.00×(4.00)	P272に記載
314	GK・GL-21・22	Ⅳa？	隅丸方形	N－20°－E	3.70×3.40	P274に記載
315	GA・GB-19	Ⅳ	方形	不　明	3.65×	
316	GF・GG-20・21・22	Ⅳa	方形	N－5°－E	6.10×5.40	P276に記載
317	GB・GC-20・21	Ⅲ	隅丸方形？	N－85°－E	不　明	P159に記載
318	GJ・GK-20	Ⅳa	方形	N－15°－E	4.25×	P279に記載
319	GC・GD・GE-19・20・21	Ⅳb	方形	N－95°－E	4.85×(4.30)	P280に記載
320	GH・GI-22	Ⅳb	不　明	不　明	3.70×	P281に記載
321	FY・GA・GB-18・19	Ⅲc	長方形	N－50°－W	4.20×3.50	P160に記載
322	GG・GH・GI-19	Ⅳ	長方形？	N－10°－E	4.50×	P282に記載
323	GJ・GK-22・23	Ⅳa？	隅丸方形	N－125°－E	不　明	P283に記載
324	欠					
325	GN-22	Ⅳ	方形	不　明	不　明	西側調査区外
326	GL-20	不明	不　明	不　明	不　明	南側調査区外
327	GG・GH-19・20・21	Ⅳa	隅丸方形	N－20°－E	5.10×5.00	P284に記載

第17表－9　屋代遺跡群住居跡一覧表

住居No.	位　　置	時代	形　態	主軸方向	規　模	備　　考
328	GB・GC-18	Ⅳ	方形	N－10°－W	3.90×	
329	GC・GD-17・18・19	Ⅳb	方形	N－95°－E	4.10×4.10	P287に記載
330	GK-19、GL-20	Ⅲb	不　明	不　明	不　明	P161に記載
331	GJ・GK-20・21	Ⅳa？	隅丸方形？	N－25°－E？	(4.40)×(4.00)	P288に記載
332	欠					
333	GB・GC-18・19	Ⅳb	方形	N－125°－E？	4.45×	P289に記載
334	GA-19	Ⅲ？	方形？	不　明	不　明	西壁のみ検出
335	GF-19	Ⅳ	不　明	不　明	不　明	煙道のみ検出
336	GE-19	Ⅳ	不　明	不　明	不　明	煙道のみ検出
337	GJ・GK・GL-20・21・22	Ⅱb	隅丸方形	N－125°－E	5.20×4.90	P61 に記載
３３８・３３９欠						
340	GC-19	Ⅳb	不　明	不　明	不　明	P290に記載
341	GE・GF・GG-17・18・19	Ⅳa	隅丸方形	N－70°－W	4.80×	P290に記載
342	GE・GF-19・20	Ⅳ	不　明	不　明	不　明	床面のみ検出、焼失住居
343	GE・GF-19・20・21	Ⅲ？	方形	不　明	4.55×4.85	
344	GG・GH-19	Ⅳ	方形	N－ 5°－E	3.35×	P291に記載
345	GG-21	Ⅲb	不　明	不　明	不　明	P161に記載
346	欠					
347	GF・GG-22	Ⅳa	方形？	不　明	(4.80)×	P292に記載
348	GF-22	Ⅲ？	不　明	不　明	不　明	西壁のみ検出
349	GC-21	Ⅲ？	不　明	不　明	不　明	床面のみ検出
350	GB-21	Ⅲ	不　明	不　明	不　明	北側調査区外
３５１～３５４欠　（国庫補助事業・屋代遺跡群発掘調査の住居跡）						
355	FY・GA-16・17	Ⅳ	隅丸方形	不　明	3.65×	南側調査区外
356	GA-17	不明	不　明	不　明	不　明	西壁・床面のみ検出
357	FX・FY-16・17	Ⅳ	不　明	不　明	不　明	西壁・床面のみ検出
３５８・３５９欠						
360	GG・GH-18	Ⅳa	方形	N	3.10×	P293に記載
３６１～４００欠　（国庫補助事業・屋代遺跡群発掘調査の住居跡）						
401	AA-9	Ⅲ？	不　明	不　明	不　明	南東側調査区外
402	AA-9	Ⅲb	不　明	不　明	不　明	P161に記載
403	AC・AD-15	Ⅲ？	不　明	不　明	不　明	北西側調査区外
404	CE・CF-7・8・9	Ⅳ	方形	N－20°－E？	3.70×	東側調査区外
405	CE-10	Ⅳ	方形？	不　明	不　明	北東側調査区外、覆土仁和の砂
406	CE・CF-8・9	Ⅲb	方形	N－115°－E	5.05×	P162に記載
407	CJ・CK-9・10	Ⅳa	方形？	N－30°－E	(3.75)×	P294に記載
408	CF・CG-7・8	Ⅲ	隅丸方形？	N－120°－E	4.40×	P163に記載
409	CG・CH・CI-7・8	Ⅳc	方形	N－105°－E	4.50×3.85	P294に記載
410	CK・CL-9	Ⅳc	方形？	N－100°－E	不　明	P295に記載
411	CJ・CK-7	Ⅱc	方形？	不　明	不　明	P64 に記載
412	CG・CH・CI-8・9・10	Ⅳc	方形	N－20°－E	6.40×5.80	P296に記載

第17表－10　屋代遺跡群住居跡一覧表

住居No.	位　　置	時代	形　態	主軸方向	規　模	備　　考
413	CH・CI・CJ-6・7・8	Ⅲc	隅丸長方形	N－30°－E	(6.00)×5.95	P163に記載
414	CG-7	Ⅳc	不　明	不　明	不　明	P297に記載
415	CG・CH-6	不明	不　明	不　明	不　明	煙道のみ検出
416	CF・CG-6・7	Ⅱb	方形	N－100°－E	4.30×	P64 に記載
417	CF-9/ CG-8・9	Ⅳ	方形	不　明	6.05×	東壁のみ検出
418	CF-8	Ⅱ	不　明	不　明	不　明	床面のみ検出
419	CE-7、CF-7・8	Ⅱa	隅丸長方形	N－55°－E	4.20×	P66 に記載
420	CG・CH・CI-7・8・9	Ⅱa	隅丸長方形	N－50°－W	5.60×4.55	P68 に記載
421	CF・CG-9・10	Ⅱc	方形	N－55°－E	4.45×4.15	P69 に記載
422	CK・CL・CM-7・8	Ⅲb	隅丸方形	N－30°－E？	4.75×(4.70)	P166に記載
423	CQ・CR-8・9	Ⅳ？	不　明	不　明	不　明	東壁のみ検出
424	CJ-7・8	不明	不　明	不　明	不　明	床面のみ検出
425	CG・CH-6	不明	不　明	不　明	不　明	南側調査区外、周溝あり
426	CQ・CR-8	Ⅳ	不　明	不　明	不　明	西側調査区外
427	CM・CN-9	Ⅳ	方形	N－105°－E	3.05×	P297に記載
428	CO・CP・CQ-7・8	Ⅲb	方形	N－65°－W	(5.40)×(4.80)	P167に記載
429	CN・CO-8・9	不明	不　明	不　明	不　明	床面のみ検出
430	CQ-9	Ⅱ？	不　明	不　明	不　明	北側調査区外
431	CQ-8	Ⅲ	方形	N－50°－W	5.85×	南側調査区外、西壁にカマド
432	CM・CN-7	Ⅱc	不　明	不　明	不　明	P71 に記載
433	CJ-7・8	Ⅱc	不　明	不　明	不　明	P72 に記載
434	CP-8・9	Ⅱa	方形？	N－125°-E？	不　明	P72 に記載
435	CF-6・7	Ⅲb	不　明	不　明	不　明	P168に記載
436	EC-8・9	Ⅳa	不明	N－95°－E	不　明	P298に記載
437	EC-10・11・12	Ⅳ	方形	不　明	不　明	北側調査区外
438	EB・EC-8	Ⅳ	方形？	不　明	不　明	P300に記載
439	DP-5・6	Ⅳ	方形	N－15°－E	不　明	南側調査区外、南壁にカマド
440	DQ・DR-8・9	Ⅳb	方形	N－100°－E	4.10×3.85	P300に記載
441	DX・DY-10・11	Ⅳ	方形	N－10°－E？	3.15×(2.60)	P301に記載
442	DV-9・10	Ⅳa	隅丸方形	N－75°－E	3.65×3.40	P302に記載
443	欠					
444	DP・DQ-5・6・7	Ⅳb	方形	N－25°－E	3.30×3.10	P303に記載
445	DR・DS-9・10	Ⅳb	方形	不　明	3.90×	P304に記載
446	DV-8・9・10	Ⅳb	隅丸方形	不　明	3.00×	P305に記載
447	DX-7	Ⅲ？	方形？	不　明	不　明	南側調査区外
448	DY-7	Ⅲ？	不　明	不　明	不　明	南側調査区外
449	DX・DY・EA-9・10	Ⅱa	隅丸長方形	N－62°－W	7.30×5.40	P72に記載
450	DW・DX-10・11	Ⅳ	方形	N	3.35×	P305に記載
451	欠					
452	DX・DY-7	Ⅳb	方形？	N－10°－E？	4.00×	P306に記載
453	DS・DT-8・9	Ⅳb	方形	N－10°－E	4.20×4.10	P306に記載

第17表－11　屋代遺跡群住居跡一覧表

住居No.	位　　置	時代	形　態	主軸方向	規　模	備　　考
454	EA・EB-8・9	Ⅳb	方形	N	3.40×3.20	P308に記載
455	DS-7・8	Ⅳ	方形	不　明	不　明	南壁・床面のみ検出
456	DQ-5・6	Ⅳ	不　明	不　明	不　明	南側調査区外、周溝あり
457	DR・DS・DT-9・10	Ⅳ	不　明	不　明	不　明	床面のみ検出
458	DE・DF・DG-4・5・6	Ⅳa	方形	N－40°－W	7.35×6.60	P310に記載
459	DH・DI-8	Ⅳ	方形	不　明	3.95×	北側調査区外
460	DF・DG-7・8	Ⅳb	方形	N－120°－E	(3.85)×	P314に記載
461	DH・DI-7・8	Ⅱc	方形	不　明	4.50×	P74に記載
462	DI・DJ・DK-5・6・7	Ⅱc	方形	N－35°－E	6.45×5.85	P76に記載
463	DC・DD-6・7	Ⅳb	方形	N－115°－E	4.50×	P314に記載
464	DL・DM-5・6	Ⅲ？	隅丸方形	不　明	4.55×	
465	DC-4	不明	不　明	不　明	不　明	南側調査区外
466	DJ・DK-7・8	Ⅳb	方形	N－105°－E	3.20×3.10	P315に記載
467	DJ-7・8	Ⅲ	隅丸方形	不　明	3.75×	
468	CS・CT・CU・CV-4・5・6	Ⅲb	方形	N－50°－W	7.30×7.20	P169に記載
469	CW・CX-4・5	Ⅱa	長方形	N－115°－W	3.40×	P78に記載
470	DB・DC-6・7	Ⅳ	不　明	不　明	不　明	東壁のみ検出
471	DG-6	Ⅳ	不　明	不　明	不　明	煙道のみ検出
472	DF-6・7	Ⅳ	不　明	不　明	不　明	西壁のみ検出
473	DD・DE-5・6・7	Ⅳ	方形？	不　明	(7.00)×	P316に記載
474	DF-6　DG-6・7	Ⅳa	方形？	N－45°－W？	不　明	P316に記載
475	CQ・CR-4・5	Ⅲ	方形	不　明	不　明	
476	CT・CU-4	Ⅱa	不　明	不　明	不　明	P79に記載
477	CN・CO・CP-4・5・6	Ⅳb	方形	N－105°－E	(6.05)×	P317に記載
478	CK・CL-5・6	Ⅳc	方形	N－20°－E	3.30	P318に記載
479	CH・CI-5・6	Ⅳc	方形？	不　明	不　明	P319に記載
480	CI・CJ-5・6	Ⅳc？	隅丸方形？	不　明	不　明	南壁のみ検出
481	CI・CJ-4・5	Ⅲb	隅丸方形？	不　明	不　明	P171に記載
482	CP・CQ-5・6	Ⅳb	不　明	不　明	不　明	P321に記載
483	CH・CI-4　CH-5	Ⅲ？	不　明	不　明	不　明	東側調査区外
484	CM・CN-5	Ⅲ	不　明	不　明	不　明	床面のみ検出
485	CN・CO・CP-6・7	Ⅲb	不　明	N－60°－W	(6.00)×	P172に記載
486	CP・CQ-5	Ⅳa	不　明	不　明	不　明	P321に記載
487	CO・CP-5	Ⅲ？	方形？	不　明	不　明	南側調査区外
488	CP-6・7	Ⅲ？	不　明	不　明	不　明	
489	CN・CO-5・6	Ⅲb	隅丸方形	不　明	4.45×4.25	P173に記載
490	CN-5	不明	不　明	不　明	不　明	
491	CN・CO-6・7	Ⅲ？	方形	不　明	(3.60)×	
492	CH・CI-5・6	Ⅳ？	方形？	不　明	不　明	北西側調査区外
493	CM・CN・CO-4・5	Ⅲ	隅丸方形	不　明	不　明	南側調査区外
494	CN-5・6	Ⅲ？	不　明	不　明	不　明	周溝あり

※　土坑については、規模、性格が不明なものが多いため一覧表は掲載しなかった。

第18表－1　屋代遺跡群出土遺物（土製品）一覧表

土製紡錘車

(mm・g)

図版No.	出土位置	長さ	幅	重さ	備考
553 －1	218 住	29	70	128	須恵質
553 －2	216 住	49.5	26	6.5	
553 －3	FI- 16	18	47	39	
553 －4	G区 7溝	21	39	39	
553 －5	BD- 13	(26)	46	(52)	
553 －6	EE- 12	(29)	(43)	(53)	
553 －7	AX- 16	15	(47)	(20)	1/2 存
553 －8	85 住	14	(41)	(11)	1/3 存
553 －9	GA- 22	20	(24)	(16)	1/4 存
553 －10	DJ- 6	29	5	(42)	1/2 存

土錘1

図版No.	出土位置	長さ	幅	重さ	備考
553 －1	307 住	90	39	156	須恵質
553 －2	151 住	90.5	29	92	須恵質
553 －3	EO- 10	78	28	82	須恵質
553 －4	62 土坑	80	30	73	須恵質
553 －5	309 住	69	29	70	
553 －6	248 住	(71)	32.5	(81)	須恵質
554 －7	267 住	(69)	33	(72)	
554 －8	DR- 5	(61)	36	(90)	
554 －9	GD- 18	(64)	36	(76)	須恵質
554 －10	CH- 8	68	30	76	
554 －11	303 住	68	(31)	(33)	1/2 存
554 －12	267 住	65	32	72	
554 －13	286 住	62	38	97	須恵質
554 －14	G 区 8溝	59	34	82	
554 －15	141 土坑	61	32	65	
554 －16	222 住	64	34.5	76	
554 －17	305 住	(57)	34	(62)	
554 －18	267 住	69	25	43	
554 －19	63 住	64	29	54	
554 －20	267 住	59	28	54	
554 －21	222 住	56	28	41	
554 －22	156 住	60	24	40	
554 －23	268 住	66	28	54	
554 －24	95 土坑	65	25	53	
554 －25	FM- 16	57	28	57	須恵質
554 －26	282 住	61	31	68	

土錘2

図版No.	出土位置	長さ	幅	重さ	備考
554 －27	FD- 16	67	32	69	
554 －28	144 住	56	26	43	
554 －29	135 住	53	26	42	
555 －30	112 住	45	27	29	
555 －31	FT- 19	41	28	32	
555 －32	303 住	48.5	19	21	
555 －33	CB- 6	50	23	22	
555 －34	BJ- 13	(41)	22	14	
555 －35	FD- 17	27	30	27	
555 －36	231 住	91	25	55	
555 －37	GB- 19	78	29	62	
555 －38	ES- 12	80	24.5	52	
555 －39	GD- 21	73.5	24	32	
555 －40	BU- 10	74	24	42	
555 －41	BR- 9	74	29	70	
555 －42	135 土坑	67	24	35	
555 －43	333 住	75	25	(19)	1/2 存
555 －44	FF- 17	51	27	31	
555 －45	EP- 14	65	17	20	
555 －46	181 土坑	66	19	23	
555 －47	84 土坑	55	20	21	
555 －48	BJ- 15	54	17	18	
555 －49	201 住	(47)	14	(7)	
555 －50	FY- 21	38	15	8	
555 －51	306 住	36	14	6	
555 －52	FE- 17	36	12	5	
555 －53	BJ -15	55	19.5	23	
555 －54	BL- 12	(59)	22	(33)	2/3 存
555 －55	184 住	(52)	28	(35)	2/3 存
555 －56	226 住	(44)	29	(17)	1/3 存
555 －57	G 区検出	(40)	18	(12)	1/2 存

羽　口

図版No.	出土位置	長さ	直径	備　考
557 －1	GK－20	150	67	
557 －2	EN－10	(108)	(57)	
557 －3	62 土坑	(90)	(60)	
557 －4	EM－11	105	(65)	
557 －5	EN－20	(67)	60	

第18表－2　屋代遺跡群出土遺物（石器）一覧表

打製石斧　(mm)

図版No.	出土位置	石質	長さ	幅	厚さ	備考
558 －1	DR- 7	頁岩	228	72	16	
558 －2	156 住	頁岩	159	48	18	
558 －3	DC- 4	頁岩	137	56	14	
558 －4	CA- 7	頁岩	123	59	15	
558 －5	236 住	頁岩	132	36	13	
558 －6	143 住	頁岩	102	56	15	
558 －7	81 住	頁岩	129	45	17	
558 －8	161 住	頁岩	123	66	18	
558 －9	AX- 19	頁岩	(114)	57	38	
558 －10	DC- 4	頁岩	90	62	15	
558 －11	14 住	頁岩	(71)	59	20	

打製石刃

図版No.	出土位置	石質	長さ	幅	厚さ	備考
559 －1	87 住	頁岩	129	47	11	
559 －2	125 住	頁岩	95	91	17	

石鏃1

図版No.	出土位置	石質	長さ	幅	厚さ	備考
559 －1	BX- 10	黒曜石	(30)	16	4.5	有茎
559 －2	BG- 15	黒曜石	(24)	14.5	2.5	有茎
559 －3	11 住	黒曜石	(20)	(13)	4	有茎
554 －4	CA- 7	黒曜石	(22)	16	5	有茎
559 －5	BP- 11	硬質頁岩	(26)	23	3	有茎
559 －6	FV- 17	黒曜石	(29)	(12)	4	有茎
559 －7	74 住	黒曜石	(19)	14.5	3	有茎
559 －8	BR- 12	黒曜石	21	12	3	有茎
559 －9	BD- 15	黒曜石	19	14	3	有茎
560 －10	13 住	黒曜石	25	(11)	6	有茎
560 －11	16 住	黒曜石	22	12	3	有茎
560 －12	BD- 14	黒曜石	20	(12)	4	有茎
560 －13	BA- 17	黒曜石	19	10	4	有茎
560 －14	126 住	黒曜石	21	10	5	有茎
560 －15	17 住	黒曜石	(18)	14	4	有茎
560 －16	AT- 19	黒曜石	20	(16)	4	有茎
560 －17	243 住	黒曜石	18	13	4	有茎
560 －18	土器集中	黒曜石	16	13	4	有茎
560 －19	28 住	黒曜石	18.5	13	4	有茎
560 －20	2 土坑	黒曜石	17	10	3	有茎
560 －21	FQ- 15	黒曜石	(13)	12	3	有茎

石鏃2

図版No.	出土位置	石質	長さ	幅	厚さ	備　考
560 －22	AV- 19	黒曜石	28	15	6	未成品
560 －23	ED- 13	凝灰岩	(37)	(22)	2	磨製石鏃

磨製石斧

図版No.	出土位置	石質	長さ	幅	厚さ	備　考
561 －1	190 住	閃緑岩	141	56	50	蛤刃
561 －2	458 住	蛇紋岩	126	62	30	定角式
561 －3	BG－15	閃緑岩	116	45	27	蛤刃

磨製石包丁　(g)

図版No.	出土位置	石質	長さ	幅	重さ	備　考
561 －1	BS- 12	砂岩	(167)	52.5	10	
561 －2	45 住	頁岩	95	36.5	8	
561 －3	96 住	砂岩	87	42	6	被熱
561 －4	235 住	頁岩	(79)	49	8	1/2 存
561 －5	BS- 9	頁岩	(57)	(43)	7	1/3 存
561 －6	BV- 9	砂岩	(55)	(52)	3	1/3 存
561 －7	26 住	砂岩	(67)	(38)	7	欠損部大
561 －8	79 住	頁岩	(47)	(41)	5	欠損部大
561 －9	106 住	砂岩	(24)	(38)	6	欠損部大
561 －10	BU- 8	頁岩	(42)	(27)	3.5	欠損部大
561 －11	44 住	頁岩	(51)	37	6.5	欠損部大

石製紡錘車1

図版No.	出土位置	石質	長さ	幅	重さ	備　考
562 －1	BI- 11	滑石	21	42	46	
562 －2	CA- 10	滑石	13	45	37	
562 －3	8 住	滑石	22	44	63	
562 －4	FR- 19	滑石	15.5	38	28	
562 －5	E 区検出	滑石	13	36	30	
562 －6	331 住	滑石	19	46	60	
562 －7	21 住	砂岩	22	38	44	
562 －8	9 住	砂岩	9	60.5	33	
562 －9	FU- 20	砂岩	12	54	27	
562 －10	96 住	砂岩	8	(52)	(21)	
562 －11	143 住	砂岩	9	48	33	
562 －12	268 住	滑石	(10)	(25)	(11)	1/3 存
562 －13	254 住	滑石	(17)	44	(21)	1/3 存
562 －14	CM- 8	砂岩	(11)	(38)	(11)	1/2 存
562 －15	AY- 17	砂岩	(10)	(31)	(17)	1/3 存
562 －16	10 土坑	砂岩	(11)	51	(10)	1/2 存

第18表－3　屋代遺跡群出土遺物（石器）一覧表

石製紡錘車２　(mm・g)

図版No.	出土位置	石質	長さ	幅	重さ	備　考
562 －17	122 住	砂岩	(10)	(55)	(23)	1/2 存
562 －18	337 住	砂岩	(6)	55	(17)	1/2 存
562 －19	BK- 11	砂岩	(6)	(51)	(10)	1/3 存
562 －20	CF- 7	砂岩	(7)	52	(12)	1/2 存
562 －21	BE- 12	砂岩	(3)	47	(3)	1/4 存
563 －22	80 住	砂岩	(7.5)	(30)	(9)	1/4 存
563 －23	49 住	砂岩	(7)	(24)	(7)	1/4 存

砥石１

図版No.	出土位置	石質	長さ	幅	厚さ	備　考
563 －1	69 住	粘板岩	210	26	10	
563 －2	17 住	粘板岩	(168)	41	20	沈線の研磨痕
563 －3	421 住	凝灰岩	62	18	14	
563 －4	242 住	粘板岩	57	29	8	
563 －5	84 土坑	凝灰岩	(68)	45	13	
563 －6	FP- 16	砂岩	(41)	32	15	玉砥石？
563 －7	EG- 12	凝灰岩	57	32	11	
563 －8	EN- 13	凝灰岩	(74)	50	17	
563 －9	228 住	凝灰岩	(101)	38	24	
563 －10	49 住	粘板岩	119	47	18	
563 －11	1 住	砂岩	77	23	17	沈線の研磨痕
563 －12	BV- 9	凝灰岩	86	41	30	
563 －13	201 住	砂岩	99	51	29	
563 －14	250 住	凝灰岩	80	44	42	沈線の研磨痕
564 －15	134 住	砂岩	90	53	38	
564 －16	281 住	砂岩	(80)	45	33	沈線の研磨痕
564 －17	FE- 17	砂岩	(66)	74	32	
564 －18	BU- 8	砂岩	89	51	39	
564 －19	G 区 8溝	砂岩	(81)	63	41	沈線の研磨痕
564 －20	BJ- 14	砂岩	(77)	72	42	沈線の研磨痕
564 －21	329 住	砂岩	(76)	63	30	沈線の研磨痕
564 －22	BK- 11	砂岩	(116)	66	53	
564 －23	306 住	砂岩	121	90	50	沈線の研磨痕
564 －24	124 住	砂岩	161	89	65	
565 －25	49 住	砂岩	(197)	102	65	
565 －26	319 住	砂岩	177	108	41	
565 －27	3 住	砂岩	195	99	29	沈線の研磨痕
565 －28	117 住	砂岩	128	132	56	
565 －29	12 住	安山岩	230	356	110	

砥石２

図版No.	出土位置	石質	長さ	幅	厚さ	備　考
565 －30	120 住	砂岩	200	220	185	
565 －31	66 住	砂岩	(108)	(72)	45	沈線の研磨痕
565 －32	B 区検出	砂岩	(140)	150	66	
388 －13	279 住	砂岩	110	24	72	
432 －11	320 住	凝灰岩	57	30	35	

軽石製品

図版No.	出土位置	石質	長さ	幅	厚さ	備　考
566 －1	470 住	軽石	87	78	69	有孔
566 －2	444 住	軽石	53	45	17	有孔
566 －3	151 住	軽石	56	36	23	有孔
566 －4	95 住	軽石	(32)	(18)	8	有孔・1/2 存
566 －5	FP- 19	軽石	95	85	27	
566 －6	123 住	軽石	66	54	39	
566 －7	123 住	軽石	36	29	29	刻みあり
566 －8	431 住	軽石	54	47	44	
566 －9	20 住	軽石	48	44	27	
566 －10	421 住	軽石	(75)	(86)	(58)	
566 －11	416 住	軽石	(71)	(78)	(42)	凹石
566 －12	CP- 8	軽石	98	75	86	

凹石，石臼１

図版No.	出土位置	石質	長さ	幅	厚さ	備　考
567 －1	409 住	安山岩	78	66	51	
567 －2	CL- 8	安山岩	101	86	45	
567 －3	F 区検出	安山岩	71	60	41	
567 －4	FB- 15	砂岩	75	57	29	砥石
567 －5	275 住	安山岩	58	54	29	
567 －6	12 住	安山岩	132	111	60	
567 －7	229 住	安山岩	120	117	75	
567 －8	283 住	安山岩	111	99	57	
567 －9	FS- 18	安山岩	131	116	59	
567 －10	56 住	安山岩	185	98	66	
567 －11	5 住	安山岩	152	158	86	
568 －12	421 住	安山岩	165	113	69	
568 －13	A 区水田	安山岩	243	194	125	
568 －14	124 住	安山岩	148	194	122	
568 －15	210 住	安山岩	(125)	153	90	2/3 存
569 －16	113 住	安山岩	(154)	(117)	87	2/3 存
569 －17	229 住	安山岩	(155)	(90)	97	1/2 存

第18表－4　屋代遺跡群出土遺物（石器・銅製品・鉄製品）一覧表

凹石，石臼２

(mm)

図版No.	出土位置	石質	長さ	幅	厚さ	備　考
569 －18	333 住	安山岩	(86)	146	87	2/3 存
569 －19	E 区 8溝	安山岩	(66)	86	75	1/2 存
569 －20	FE- 17	安山岩	(86)	120	51	1/2 存
569 －21	272 住	安山岩	173	(120)	84	1/2 存
569 －22	193 住	安山岩	(60)	(108)	63	1/4 存
569 －23	116 土坑	安山岩	(90)	(63)	69	1/5 存
569 －24	124 住	安山岩	119	99	39	
569 －25	224 住	安山岩	108	126	44	

叩　石

(g)

図版No.	出土位置	石質	長さ	幅	重さ	備　考
570 －1	F 区 5溝	安山岩	190	90	68	
570 －2	G 区検出	安山岩	146	60	51	
570 －3	AV- 18	安山岩	164	71	51	
570 －4	AD- 6	閃緑岩	80.5	44	26	磨製石斧？

丸　石

図版No.	出土位置	石質	長さ	幅	重さ	備　考
570 －1	D 区P272	安山岩	74	69	41	
570 －2	BW- 9	安山岩	59	54	38	
570 －3	107 土坑	安山岩	45	44	38	

玉　石

図版No.	出土位置	石質	長さ	幅	重さ	備　考
570 －1	96 住	泥岩	54	41.5	15	被熱
570 －2	96 住	泥岩	60	63	23	被熱
570 －3	BR- 12	泥岩	45	41	38	
570 －4	BV- 12	泥岩	38	32	27	

石　錘

図版No.	出土位置	石質	長さ	幅	重さ	備　考
570 －1	DD- 6	安山岩	45	43	36	有孔

銅製品

図版No.	出土位置	器種	長さ	幅	厚さ	備　考
552 －1	124 住	銅鏃	20	13	5	
552 －2	EQ－11	銅鏃	33	14	4	
552 －3	BU－ 9	帯金具	42	(24)	9	
552 －4	CH－ 9	針	(76)	5	2	
552 －5	84 土坑	針？	約265	直径 2		
552 －6	194 住	銅鏡？	直径 20		4	
552 －7	F 区検出	古銭	直径 24		1	
552 －8	206 土坑	古銭	直径 23		1	

鉄製品１

図版No.	出土位置	器　種	長さ	幅	厚さ	備　考
571 －1	117 住	鉄斧	77	48	18	
571 －2	98 住	鉄斧	95	63	21	
571 －3	EK- 15	鎌	130	22	3	
571 －4	77 住	鎌	142	20	3	
571 －5	286 住	鎌	(198)	30	2	刃先欠
571 －6	408 住	鎌	(101)	20	2	刃先欠
571 －7	316 住	鎌	(158)	37	2	刃先欠
571 －8	12 住	鎌	(90)	18	3	刃先欠
571 －9	DE- 5	鎌	(109)	34	2	刃先欠
571 －10	DE- 7	鎌	(54)	34	4	刃先欠
571 －11	158 住	鎌	(67)	29	2	刃先欠
571 －12	458 住	鎌	(78)	41	2	刃先欠
571 －13	264 住	鎌	(79)	38	5	刃先欠
571 －14	286 住	鎌	(75)	38	3	基部欠
572 －15	AV- 18	鍬（鋤）	104	28	17	
572 －16	EQ- 14	鍬（鋤）	(73)	36	23	
572 －17	CL- 9	鍬（鋤）	(63)	31	18	
572 －18	FS- 19	鉄鏃	79.5	38	9	
572 －19	AT- 18	鉄鏃	77	22	5	
572 －20	266 住	刀子？	(170)	26	6	茎部欠
572 －21	162 住	刀子	(181)	19	7	
572 －22	231 住	刀子	(70)	13	4	切先欠
572 －23	284 住	刀子	(170)	17	5	身部欠
572 －24	300 住	刀子	(98)	11	5	
572 －25	313 住	刀子	(75)	10	3	切先欠
572 －26	327 住	刀子	(119)	15	5	切先欠
572 －27	474 住	刀子	(117)	14	5	切先欠
572 －28	274 住	刀子	(99)	15	4	切先欠
572 －29	BB- 15	刀子	(86)	17	8	身部欠
572 －30	BW- 11	刀子	(99)	18	4	身部欠
572 －31	CN- 5	刀子	(87)	12	6	茎部欠
572 －32	CO- 8	刀子	(107)	16	6	茎部欠
572 －33	EG- 9	刀子	(78)	16	13	鉄製鎹付
572 －34	EY- 21	刀子	(71)	9	4	茎部欠
572 －35	FE- 15	刀子	(172)	14	11	鉄製鎹付
572 －36	FT-18	刀子	(82)	15	7	茎部欠
573 －37	222 住	槍？	134	33	4	
573 －38	411 住	絞具？	50	7.5	3	

第18表－5　屋代遺跡群出土遺物（鉄製品・骨角器）一覧表

鉄製品２　(mm・g)

図版No.	出土位置	器　種	長さ	幅	重さ	備　考
573 －39	407 住	棒状	202	32	16	
573 －40	303 住	棒状	161	19	19	
573 －41	162 住	石突？	76	31	2	
573 －42	CH- 8	楔？	56	20	3	
573 －43	BB- 16	楔？	49	20	3	
573 －44	36 住	火打ち金具	81	25	8	穿孔
573 －45	335 住	鎌？	95	14	3	
573 －46	224 住	石突？	30	30	3	
573 －47	309 住	刺金？	45	39	6	
573 －48	222 住	紡錘車	117.5	57	15	

鉄製品３

図版No.	出土位置	器　種	長さ	幅	重さ	備　考
573 －49	138 土坑	釘	44	8	5	
573 －50	458 住	釘？	69	7	6.5	
573 －51	65 住	針？	47	4	3.5	
573 －52	211 住	棒状	75	6	5	
573 －53	CO- 8	棒状	91	8	5	
573 －54	282 住	棒状	92.5	11	9	
573 －55	421 住	棒状	85	6	5	
573 －56	258 住	棒状	190	6	5	
573 －57	DS－10	紡錘車	39	46	8	

骨角器１

図版No.	出土位置	器　種	種・部位	長さ	幅	厚さ	備　考
574 －1	384 住	骨鏃	ｳｼ/ｳﾏ・骨？	95	12	4	
574 －2	BC- 13	骨鏃	ｼｶ・骨	126.5	10	4	ヤス？
574 －3	96 住	骨鏃	ｼｶ・角？	(128)	11	4.5	被熱
574 －4	229 住	骨鏃	ｼｶ・角	(92)	24.5	5.5	
574 －5	93 住	骨鏃	陸獣・骨？	(67)	9.5	5	未成品
574 －6	440 住	骨鏃	ｼｶ・骨	(45)	10.5	4.5	未成品
574 －7	GB- 19	骨鏃	ｼｶ・骨？	(61)	25.5	4	未成品
574 －8	35 住	骨鏃	ｼｶ・骨？	(33.5)	9	3.5	
574 －9	84 住	針	ｼｶ・中手骨	17	9	4.5	穿孔
574 －10	316 住	篦状	ｳｼ/ｳﾏ?・骨	(24)	11.5	3	
574 －11	CG- 8	針状	ｼｶ・骨	(84)	9	4.5	
574 －12	303 住	篦状	ｼｶ・骨	(75)	16	4	
574 －13	266 住	板状	？・骨	(59.5)	10.5	2.5	
574 －14	303 住	篦状	ｼｶ・中足骨？	(63.5)	7	3	
574 －15	239 住	針	ｼｶ・中足骨？	(70)	9.5	8	
574 －16	96 住	針	ｼｶ・骨	(29.5)	4	5	
574 －17	CF- 8	針状	ｼｶ?・骨	(82)	9.5	3.5	
574 －18	12 住	板状	ｳｼ/ｳﾏ?・骨	122	17	5	弓飾？
574 －19	12 住	板状	ｳｼ/ｳﾏ?・骨	128.5	17.5	4.5	弓飾？
574 －20	FQ- 17	板状	？　・骨	(46.5)	12.5	3.5	
574 －21	F 区検出	自在？	ｼｶ・角	36	16	3	穿孔
574 －22	266 住	不明	ｳｼ/ｳﾏ?・骨	(48.5)	16.5	7.5	
574 －23	86 住	弭	ｼｶ・角	22.5	15	14.5	
574 －24	G 区検出	不明	ｼｶ・角	48	12	12	
574 －25	321 住	筒状	ｼｶ・骨	37	30	30	
575 －26	GH- 23	紡錘車？	ｳｼ/ｳﾏ ？	52.5		5.5	

第18表－6　屋代遺跡群出土遺物（骨角器）一覧表

骨角器２

(mm)

図版No.	出土位置	器　種	種・部位	長さ	幅	厚さ	備　考
575 －27	G 区検出	紡錘車？	ｼｶ・ 角	(32.5)	(20.5)	(3.5)	
575 －28	G 区検出	刺突具？	ｼｶ・ 角	137.5	16	11	
575 －29	G 区検出	刀子柄	ｼｶ・ 角	109.5	17.5	9.5	
575 －30	68 住	刀子柄	ｼｶ・ 角	118	15	14	
575 －31	21 住	刀子柄	ｼｶ・ 角	82	18	11	
575 －32	115 住	刀子柄	ｼｶ・ 角	135	28.5	28.5	未成品
575 －33	68 住	刀子鞘？	ｼｶ・ 中手骨	192.5	24.5	10	未成品
575 －34	68 住	刀子鞘？	ｼｶ・ 中手骨	204	22.5	12	33と接合
575 －35	G 区検出	不明	ｼｶ・ 角	122	18.5	18	
575 －36	333 住	不明	ｼｶ・ 角	99	(30.5)	22.5	未成品
576 －37	78 住	板状ト占骨	ｳｼ/ｳﾏ・肋骨？	(177)	26	3	
576 －38	78 住	板状ト占骨	ｳｼ/ｳﾏ・肋骨？	(99)	16	1	
576 －39	78 住	板状ト占骨	ｳｼ/ｳﾏ・肋骨？	(91)	17	3.5	
576 －40	78 住	板状ト占骨	ｳｼ/ｳﾏ・肋骨？	(103)	21.5	3	未使用？
576 －41	78 住	板状ト占骨	ｳｼ/ｳﾏ・肋骨？	(66)	19	3.5	
576 －42	78 住	板状ト占骨	ｳｼ/ｳﾏ・肋骨？	(117)	22	4.5	
576 －43	78 住	板状ト占骨	ｳｼ/ｳﾏ・肋骨？	(79)	(16)	3	
576 －44	78 住	板状ト占骨	ｳｼ/ｳﾏ・肋骨？	(51)	(12)	2.5	
576 －45	78 住	板状ト占骨	ｳｼ/ｳﾏ・肋骨？	(148)	14	2.5	
576 －46	78 住	板状ト占骨	ｳｼ/ｳﾏ・肋骨？	(74)	23	3	未使用？
576 －47	86 住	板状ト占骨	ｳｼ/ｳﾏ・肋骨？	(94.5)	(14)	7	
576 －48	239 住	板状ト占骨	ｳｼ/ｳﾏ・肋骨？	(79)	30.5	4	
576 －49	247 住	板状ト占骨	ｳｼ/ｳﾏ・肋骨？	(108)	27	3	
576 －50	250 住	板状ト占骨	ｳｼ/ｳﾏ・肋骨？	(49.5)	19	1	
576 －51	G 区検出	板状ト占骨	ｳｼ/ｳﾏ・肋骨？	(43)	19.5	4	
576 －52	473 住	板状ト占骨	ｳｼ/ｳﾏ・肋骨？	(265)	24.5	3	
577 －53	473 住	板状ト占骨	ｳｼ/ｳﾏ・肋骨？	(161)	29.5	3	
577 －54	473 住	板状ト占骨	ｳｼ/ｳﾏ・肋骨？	(53)	29	2.5	
577 －55	473 住	板状ト占骨	ｳｼ/ｳﾏ・肋骨？	(220)	27	3	
577 －56	473 住	板状ト占骨	ｳｼ/ｳﾏ・肋骨？	(168)	27	2	
577 －57	473 住	板状ト占骨	ｳｼ/ｳﾏ・肋骨？	(79.5)	14	3	
577 －58	C 区14溝	板状ト占骨	ｳｼ/ｳﾏ・肋骨？	263	18	2	未使用？
577 －59	C 区検出	板状ト占骨	ｳｼ/ｳﾏ・肋骨？	(84)	30.5	2	
577 －60	G 区検出	板状ト占骨	ｳｼ/ｳﾏ・肋骨？	(55)	21.5	3	
577 －61	CI- 8	板状ト占骨	ｳｼ/ｳﾏ・肋骨？	(82)	25.5	5	
577 －62	92 土坑	板状ト占骨	ｳｼ/ｳﾏ・肋骨？	(60)	(13)	1	
577 －63	FR- 17	板状ト占骨	ｳｼ/ｳﾏ・肋骨？	(93)	17	3.5	
577 －64	GC- 24	板状ト占骨	ｳｼ/ｳﾏ・肋骨？	(77)	17	3	

第18表－7　屋代遺跡群出土遺物（骨角器・加工痕のある骨角・木製品）一覧表

骨角器３

(mm)

図版No.	出土位置	器　種	種・部位	長さ	幅	厚さ	備　考
577 －65	G 区検出	板状ト占骨	ｳｼ/ｳﾏ･肋骨？	(112)	17	3	
577 －66	G 区検出	板状ト占骨	ｳｼ/ｳﾏ･肋骨？	(127)	17	2	
577 －67	FC- 14	板状ト占骨	ｳｼ/ｳﾏ･肋骨？	(112)	32.5	1.5	
577 －68	CI- 5	板状ト占骨	ｳｼ/ｳﾏ･肋骨？	(111)	36.5	2.5	
578 －69	BM- 10	板状ト占骨	ｼｶ・肩甲骨	(73)	24	3.5	
578 －70	FC- 14	板状ト占骨	ｳｼ/ｳﾏ･肋骨？	(59)	21	2	
578 －71	CK- 5	板状ト占骨	ｼｶ・肋骨	(36)	17	2	
578 －72	FH- 17	板状ト占骨	ｳｼ/ｳﾏ･肋骨？	(67.5)	28	2	
578 －73	FS- 19	板状ト占骨	ｳｼ/ｳﾏ･肋骨？	(128)	24	2.5	
578 －74	72 住	刻骨	ｼｶ・ 角	160	31.5	1.6	
578 －75	124 住	刻骨	ｼｶ・ 角	35.5	15	7	被熱
578 －76	96 住	ト占骨	ｼｶ・ 肩甲骨	183	(105)	30	被熱
578 －77	104 住	ト占骨	ｼｶ・ 肩甲骨	203	120	34	
578 －78	B 区検出	ト占骨？	ﾌﾞﾀ?･肩甲骨	141	66	16	
529	259 土坑	板状ト占骨	ｳｼ/ｳﾏ･肩甲骨	(99)	(60)	5	

加工痕のある骨角１

図版No.	出土位置	種・部位	長さ	幅	厚さ	備　考
579 －1	211 住	ｼｶ・ 角	258	63	18	
579 －2	24 住	ｼｶ・ 角	143	62	21	
579 －3	16 住	ｼｶ・ 角	111	39	29	
579 －4	66 住	ｼｶ・ 角	66	28	13	
579 －5	FD- 16	ｼｶ・ 角	52	80	19	
579 －6	314 住	ｼｶ・ 角	47	16	16	
579 －7	316 住	ｼｶ・ 角	33	16	13	

加工痕のある骨角２

図版No.	出土位置	種・部位	長さ	幅	厚さ	備　考
579 －8	BL- 10	ｼｶ・ 角	30	30	22	
579 －9	検出面	ｼｶ・ 角	46	20	16	
579 －10	226 住	ｼｶ・ 角	47	20	11	
579 －11	59 住	ｼｶ・ 角	36	12	10	
579 －12	21 住	ｼｶ・ 角	47	194	19	
579 －13	82 住	ｼｶ・ 角	47	11	12	
579 －14	342 住	ｼｶ・ 骨	98	16	16	

木製品１

図版No.	出土位置	種・部位	長さ	幅	厚さ	備　考
514 －1	水田下層	馬形	163	25	5	スギ材
514 －2	水田下層	馬形	(109)	31	3	スギ材
514 －3	水田下層	馬形	(120)	27	4	スギ材
514 －4	水田下層	馬形	(94)	32	5	スギ材
514 －5	水田下層	馬形	(78)	16	5	
514 －6	水田下層	人形	(100)	21	3	スギ材
514 －7	水田下層	斎串	(174)	19	4	スギ材
514 －8	水田下層	斎串	(182)	20	4	
514 －9	水田下層	斎串	(162)	21	4	スギ材
514 －10	水田下層	斎串	(179)	32	4	
514 －11	水田下層	斎串	(116)	30	5	スギ材
514 －12	水田下層	斎串	(256)	23	6	スギ材
514 －13	水田下層	曲物底板	(149)	61	6	皮紐付
514 －14	水田下層	板状	160	43	8	穿孔

木製品２

図版No.	出土位置	種・部位	長さ	幅	厚さ	備　考
514 －15	水田下層	板状	160	42	11	穿孔
515 －16	水田下層	板状	(102)	36	6	
515 －17	水田下層	板状	(179)	42	5	
515 －18	水田下層	板状	(193)	33	7	
515 －19	水田下層	板状	(116)	24	4	
515 －20	水田下層	板状	(215)	22	4	
515 －21	水田下層	板状	(205)	45	3	
515 －22	水田下層	板状	(311)	27	5	
515 －23	水田下層	棒状	(365)	14	8	
515 －24	水田下層	棒状	(344)	26	19	
515 －25	水田下層	棒状	(141)	20	13	
516 －26	水田下層	樋	(2435)	165	130	スギ材
516 －27	水田下層	樋蓋	1635	140	40	スギ材

第18表－8　屋代遺跡群出土遺物（玉類）一覧表

玉類（勾玉）　(mm)

図版No.	出土位置	材質	長さ	幅	厚さ	備考
580 －1	21住	硬玉	13.5	9	2	
580 －2	26住	滑石	32.5	11	9	
580 －3	39住	滑石	(18)	7	4	
580 －4	47住	滑石	30	10	7	
580 －5	154住	碧玉	13.5	6	4	
580 －6	157住	滑石	2.2	13	2	
580 －7	231住	滑石	21	8	4.5	
580 －8	300住	滑石	21.5	9	7	
580 －9	309住	硬玉	14	7	4.5	
580 －10	476住	硬玉	22	13.5	2	
580 －11	DX-10	滑石	20.5	8	5	
580 －12	FJ-18	滑石	23.5	8	4	
580 －13	100住	土製	41	15	15	
580 －14	139住	土製	26	16	10	
580 －15	250住	土製	23	7	6.5	
580 －16	CB- 9	土製	49	17	18	

玉類（管玉）

図版No.	出土位置	石質	長さ	直径	厚さ	備考
581 －17	11住	滑石	13	12.5		
581 －18	22住	碧玉	22	9.5		
581 －19	111住	滑石	18	6		
581 －20	115住	滑石	19	4		
581 －21	124住	碧玉	15.5	4		
581 －22	142住	滑石	(17)	6.5		
581 －23	231住	滑石	(5)	12.5		欠損部大
581 －24	268住	滑石	14.5	4		
581 －25	421住	滑石	17	7		
581 －26	477住	碧玉	21	3		
581 －27	BD-14	滑石	15.5	4		
581 －28	BS-11	滑石	21	7.5		
581 －29	BW- 9	鉄石英	(31)	13		
581 －30	CM- 5	碧玉	12	5		
581 －31	EL-13	滑石	22.5	6.5		
581 －32	ET-14	滑石	(19)	6.5		
581 －33	FI-17	碧玉	9.5	2		
581 －34	FK-16	滑石	18	9		
581 －35	GD-19	滑石	28.5	10.5		
581 －36	GD-20	滑石	(22)	7		

玉類（臼玉１）

図版No.	出土位置	石質	長さ	幅	厚さ	備　考
581 －1	12住	滑石	9	9	6	未成品
581 －2	12住	凝灰岩	4.5	4.3	3	
581 －3	17住	滑石	4.5	5	4	
581 －4	17住	凝灰岩	4	4.5	3	
581 －5	17住	凝灰岩	5.5	5.5	2.5	
581 －6	17住	凝灰岩	5.5	5.5	2.5	
581 －7	17住	凝灰岩	4.5	4.5	1.5	
581 －8	17住	凝灰岩	4.5	4.5	3.5	
581 －9	17住	凝灰岩	4	4.5	4.5	
581 －10	17住	滑石	4.5	4.5	4	
581 －11	17住	滑石	4.5	4.5	3	
581 －12	17住	滑石	4.5	4.5	4	
581 －13	17住	滑石	4.5	4.5	4.5	
581 －14	17住	凝灰岩	4	4	4	
581 －15	17住	滑石	4	4.5	4.5	
581 －16	29住	滑石	14	14.5	9	未成品
581 －17	31住	滑石	12	11.5	6	未成品
581 －18	46住	滑石	5	5	3	
581 －19	47住	滑石	4.5	4.5	4	
581 －20	47住	凝灰岩	4.5	4	2.5	
581 －21	59住	滑石	5	5	4	
581 －22	59住	滑石	5	5	4	
581 －23	59住	凝灰岩	5	5	3	
581 －24	66住	凝灰岩	4.5	4	4.5	
581 －25	66住	滑石	5	5	3.5	
581 －26	66住	滑石	5	5	3	
581 －27	83住	滑石	6	6	5	
581 －28	120住	滑石	4.5	4.5	3	
581 －29	120住	滑石	5	5	3	
581 －30	120住	滑石	5	5	4	
581 －31	120住	滑石	5	4.5	3.5	
581 －32	120住	滑石	5	5	3	
581 －33	124住	滑石	4	4.5	3.5	
581 －34	160住	凝灰岩	5	5	3	
581 －35	209住	凝灰岩	6	5.5	4	
581 －36	212住	凝灰岩	5	5	2	
581 －37	221住	滑石	6	6	3	
581 －38	124住	滑石	9	9	7	

第18表－9　屋代遺跡群出土遺物（玉類）一覧表

玉類（臼玉２）　(mm)

図版No.	出土位置	石質	長さ	幅	厚さ	備　考
581 －39	225住	滑石	5	5	4	
581 －40	264住	滑石	9.5	9.5	6	
581 －41	275住	滑石	8	7.5	4	
582 －42	280住	蛇紋岩？	5	5	2.5	
582 －43	282住	凝灰岩	5	5	4	
582 －44	301住	凝灰岩	7	7	4.5	
582 －45	301住	滑石	7.5	7.5	3	
582 －46	301住	滑石	5.5	5.2	4	
582 －47	303住	滑石	6	6	2	
582 －48	306住	滑石	4.5	4.5	3	
582 －49	307住	凝灰岩	6	6	4.5	
582 －50	309住	滑石	5	5	3.5	
582 －51	316住	滑石	5	5	4	
582 －52	316住	凝灰岩	5	5	3	
582 －53	320住	滑石	6	6	3	
582 －54	333住	滑石	9.6	9.3	6.5	
582 －55	410住	滑石	3.5	4	2	
582 －56	422住	滑石	4	4	3.5	
582 －57	440住	凝灰岩	3	3	2	
582 －58	461住	滑石	8	8	5.5	側辺に稜
582 －59	461住	滑石	6	6	3	側辺に稜
582 －60	468住	滑石	3.5	3.5	2.5	
582 －61	477住	滑石	16	16	8	未成品
582 －62	489住	滑石	5.5	5.5	4	
582 －63	489住	滑石	4.5	4.5	3	
582 －64	土器集中	凝灰岩	3.5	3.5	3	側辺に稜
582 －65	土器集中	滑石	4	7	2.5	側辺に稜
582 －66	土器集中	凝灰岩	4.5	4.5	4	側辺に稜
582 －67	土器集中	凝灰岩	4	4	3	側辺に稜
582 －68	土器集中	凝灰岩	4	4	2.5	
582 －69	土器集中	凝灰岩	4	4	2	側辺に稜
582 －70	土器集中	凝灰岩	4.5	4.5	3	側辺に稜
582 －71	土器集中	凝灰岩	4	4	3	側辺に稜
582 －72	土器集中	凝灰岩	4	4	2	側辺に稜
582 －73	土器集中	凝灰岩	4	4	3.5	側辺に稜
582 －74	土器集中	凝灰岩	4	4	3	側辺に稜
582 －75	土器集中	凝灰岩	4.5	4.5	3.5	側辺に稜
582 －76	土器集中	凝灰岩	4	4	3	側辺に稜

玉類（臼玉３）

図版No.	出土位置	石質	長さ	幅	厚さ	備　考
582 －77	土器集中	凝灰岩	4	4	3	側辺に稜
582 －78	土器集中	凝灰岩	5	5	4	側辺に稜
582 －79	土器集中	凝灰岩	5	5	2	側辺に稜
582 －80	土器集中	凝灰岩	4	4	3	側辺に稜
582 －81	土器集中	凝灰岩	5	4	3	側辺に稜
582 －82	土器集中	凝灰岩	4	4	2	側辺に稜
582 －83	土器集中	凝灰岩	5	5	2	側辺に稜
582 －84	土器集中	凝灰岩	5	5	3	側辺に稜
582 －85	土器集中	凝灰岩	4	4	3	側辺に稜
582 －86	土器集中	凝灰岩	4	4	3	側辺に稜
582 －87	土器集中	凝灰岩	4	4	3	側辺に稜
582 －88	土器集中	凝灰岩	4	4	2	側辺に稜
582 －89	土器集中	凝灰岩	4	4	2	側辺に稜
582 －90	土器集中	凝灰岩	4	4	3.5	側辺に稜
582 －91	土器集中	凝灰岩	4	4	3	側辺に稜
582 －92	土器集中	凝灰岩	4	4	2.5	側辺に稜
582 －93	土器集中	凝灰岩	4.5	4	3	側辺に稜
582 －94	土器集中	凝灰岩	4	4	2	側辺に稜
582 －95	148住	凝灰岩	4	4	3	
582 －96	156住	蛇紋岩？	4	4	1	
582 －97	165住	滑石	4	4	3	
582 －98	229住	滑石	6	5	6	
582 －99	C 区 1溝	滑石	7	7	5	
582 -100	F 区 1溝	凝灰岩	4	4	2	
582 -101	G 区 1溝	凝灰岩	5	5	3	
582 -102	11　掘立	滑石	11.5	11.5	9	
582 -103	AS-18	凝灰岩	4	4	3	
582 -104	BD-18	滑石	24	23	8	未成品
582 -105	AS-18	滑石	5	5	3	
582 -106	BG-12	滑石	10.5	10.5	9	
582 -107	BI-12	凝灰岩	5	5	3	
582 -108	BJ-14	滑石	5	5	3	
582 -109	BJ-14	凝灰岩	4.5	4	2	
582 -110	BJ-15	滑石	14	14	5	未成品
582 -111	BJ-15	滑石	4	4	3	
582 -112	BL-14	凝灰岩	4	4	2	
582 -113	BM-10	滑石	18	16	7	
582 -114	EL-9	凝灰岩	6	6	3	

第18表－10　屋代遺跡群出土遺物（玉類・滑石製模造品）一覧表

玉類（臼玉４）

(mm)

図版No.	出土位置	石質	長さ	幅	厚さ	備　考
582 -115	EO-11	滑石	7.5	7	1	
582 -116	EY-17	凝灰岩	6	6	4	
582 -117	FA-17	凝灰岩	5	5	3.5	
582 -118	FB-13	凝灰岩	5	5	4	側辺に稜
582 -119	FC-15	滑石	6	6	1.5	
582 -120	FC-15	凝灰岩	4	4	2	側辺に稜
582 -121	FC-16	滑石	11	11	4	未成品
582 -122	FF-17	凝灰岩	5	5	2.5	
582 -123	FG-15	滑石	5	5	2	
582 -124	FG-15	滑石	6	6	4	
582 -125	FJ-17	滑石	5	5	3	
582 -126	FK-16	滑石	5	5	4	
582 -127	FK-17	滑石	5	5	2.5	
582 -128	FQ-15	凝灰岩	5	5	4	
582 -129	FW-19	滑石	6	6	3	
582 -130	GB-19	滑石	7.5	7.5	5.5	
582 -131	GB-19	滑石	4.5	4.5	3.5	
582 -132	GB-19	滑石	4	4	3.5	
582 -133	GD-20	滑石	4.5	4.5	3	
582 -134	GE-19	滑石	5	5	4	
582 -135	GF-21	滑石	4	4	2	
582 -136	GA-17	滑石	5.5	5.5	2	
582 -137	F 区表採	滑石	8.5	8.5	8.5	
582 -144	209住	滑石	8	8	8.5	
582 -146	317住	滑石	5.5	5.5	5.5	

玉類（ガラス玉）

図版No.	出土位置	色調	長さ	幅	厚さ	備　考
583 -138	117住	ｽｶｲﾌﾞﾙｰ	4	4	4	
583 -139	124住	ｸﾞﾘｰﾝ?	8.5	8.5	6.5	表面風化
583 -140	143住	ｽｶｲﾌﾞﾙｰ	3	3	2.5	
583 -141	146住	ｺﾊﾞﾙﾄﾌﾞﾙｰ	6.5	6.5	5	
583 -142	194住	ｽｶｲﾌﾞﾙｰ	5	5	5	
583 -143	207住	ｸﾞﾘｰﾝ	8.5	8.5	5.5	
583 -145	210住	ｸﾞﾘｰﾝ?	5	5	4.5	表面風化
583 -147	AS-19	ｸﾞﾘｰﾝ	8.5	8.5	6	
583 -148	FB-16	ｸﾞﾘｰﾝ	10	10	8	

玉類（土玉）

図版No.	出土位置	材質	長さ	幅	厚さ	備　考
583 -149	21住		27	26	24	土錘？
583 -150	30住		6	6	7.5	２連状
583 -151	118住		6.5	6.5	5	
583 -152	157住		9	9	9	
583 -153	201住		5	5	15	
583 -154	272住		6	7	7.5	
583 -155	477住		9	10	9	
583 -156	BI-14		21	20	18	土錘？
583 -157	BX-11		19	17	17	土錘？
583 -158	DX-11		10.5	10	9.5	
583 -159	EB-10		24	23.5	24	土錘？

その他の玉類

図版No.	出土位置	材質	長さ	幅	厚さ	備　考
583 －１	40 住	土製	21	17	17	穿孔なし
583 －２	56 住	滑石	35	16	8	未成品？
583 －３	BF－13	軟玉	(30)	14	5	石帯？

滑石製模造品

図版No.	出土位置	器種	長さ	幅	厚さ	備　考
583 －１	209 住	有孔円盤	22	31	3	２孔
583 －２	215 住	有孔円盤	20	18	4	１孔
583 －３	277 住	有孔円盤	24	23	4	２孔
583 －４	280 住	有孔円盤	18	20	2	２孔
583 －５	G 区溝1	有孔円盤	33	33	3	２孔
583 －６	FB－16	有孔円盤	23	24	3	２孔
583 －７	327 住	剣型	40	18	3	２孔
583 －８	AU－18	剣型	26	17	3	２孔
583 －９	EF－10	剣型	(62)	(21)	4	

報告書抄録

ふりがな	やしろいせきぐん
書名	屋代遺跡群
副書名	国道403号（土口バイパス）道路改良に伴う発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	木下正史、佐藤信之　ほか
編集機関	更埴市教育委員会　生涯学習課　文化財係
所在地	〒387-8511　長野県更埴市杭瀬下84番地　　TEL 026-273-1111
発行年月日	2000年3月24日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
屋代遺跡群（やしろいせきぐん）	長野県（ながのけん）更埴市（こうしょくし） 大字屋代（やしろ）	20216	31－21	36 32 44	138 8 52	1995.06.13 ～ 1998.03.24	7,500㎡	国道403号道路改良に伴う発掘調査

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
屋代遺跡群	集落跡	弥生時代～中世	竪穴住居　約420棟 掘立柱建物　10棟 堀　1基	唐三彩、骨角器、銅鏃、瓦、玉類	千曲川右岸の自然堤防上に形成された弥生時代中期末から9世紀の集落で、官衙との関連を想定される建物も検出されている
	水田跡	古代		木製祭祀具	

屋代遺跡群　本文編

発行日	平成12年３月24日
発　行	更　埴　市　教　育　委　員　会
	〒387-8511　長野県更埴市杭瀬下84番地
	電話　(026)273-1111
印　刷	信　毎　書　籍　印　刷　株　式　会　社
	〒381-0037　長野県長野市西和田470
	電話　(026)243-2105